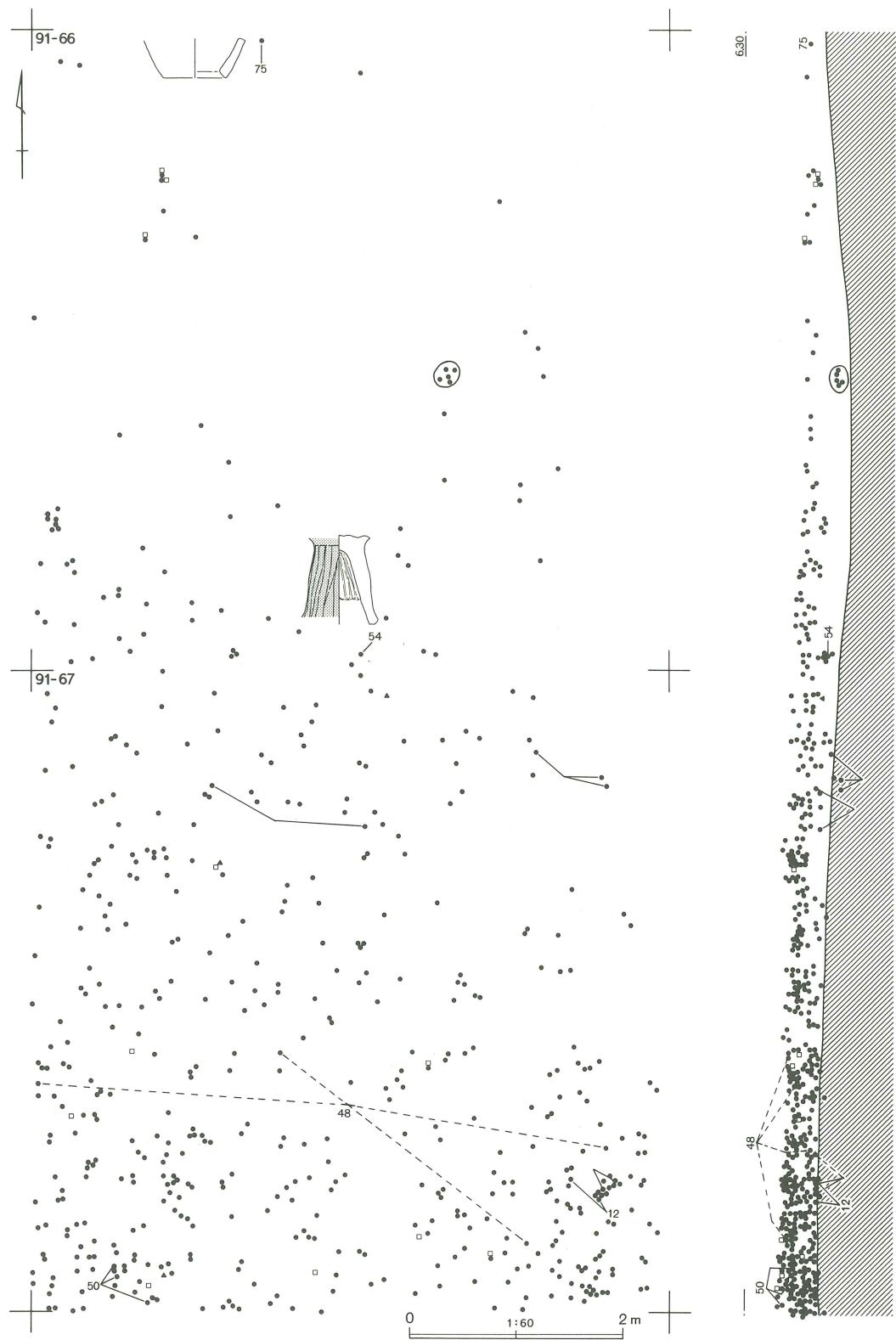
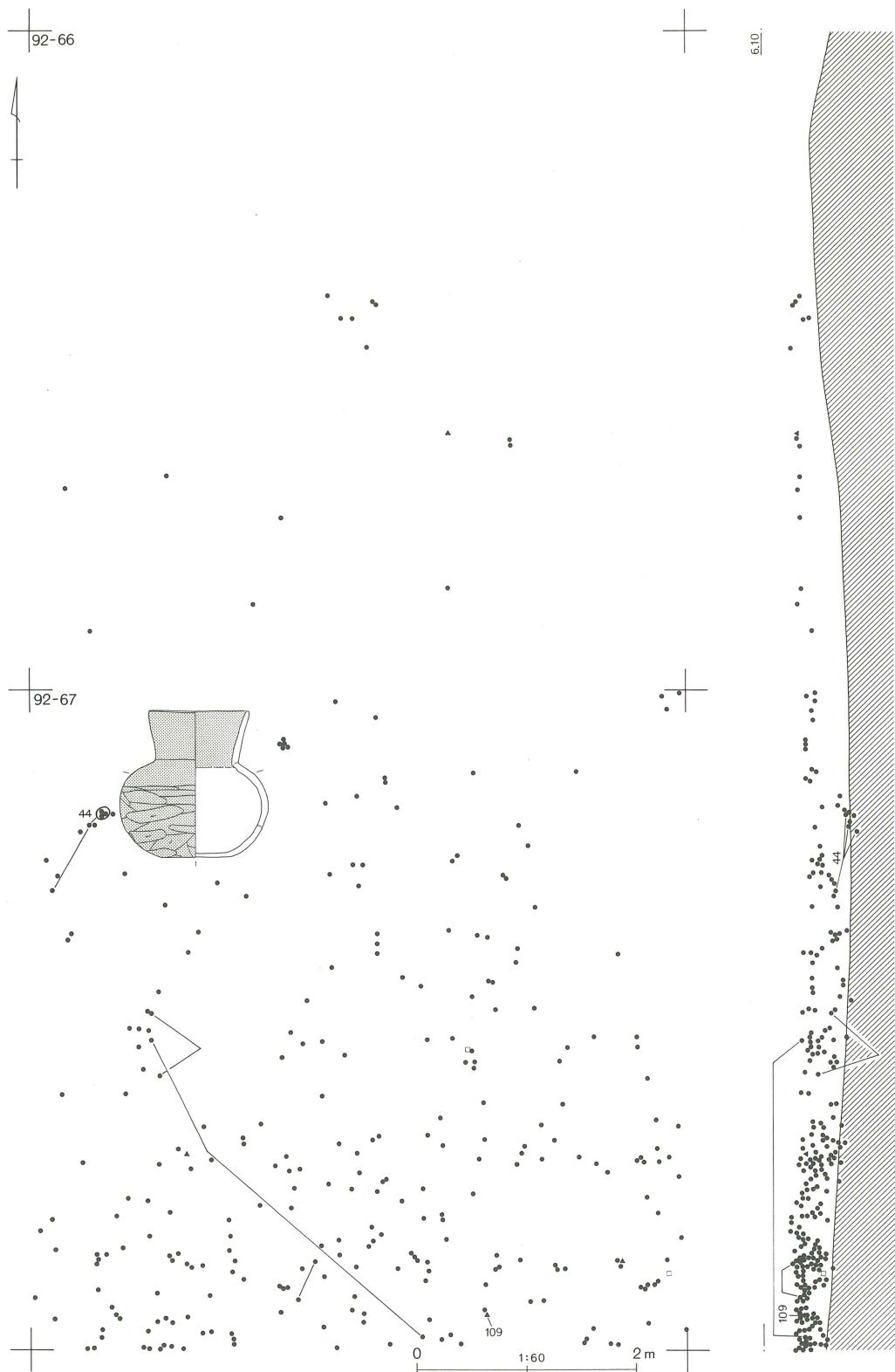


根 切

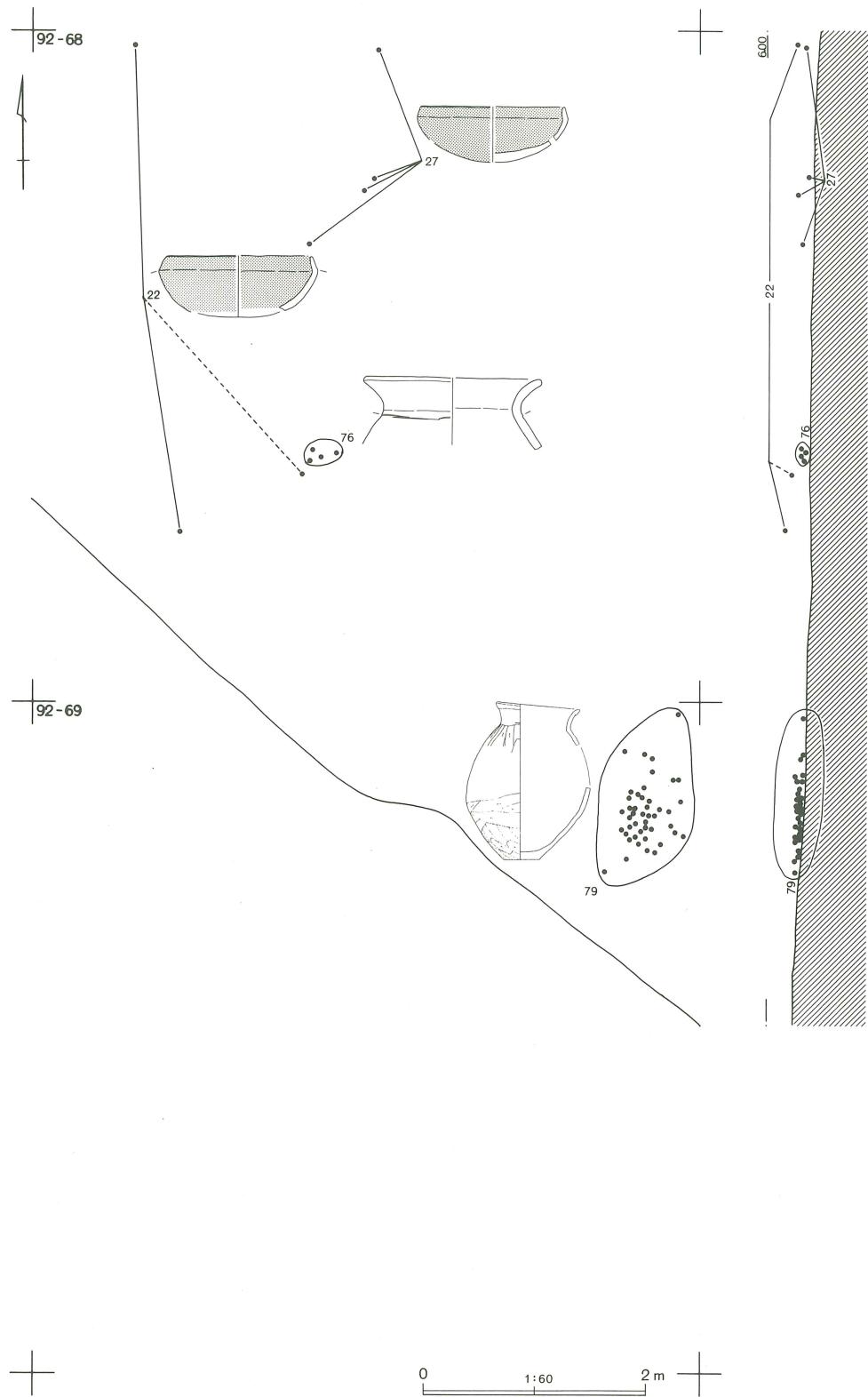


第 207 図 包含層遺物出土状態(11)

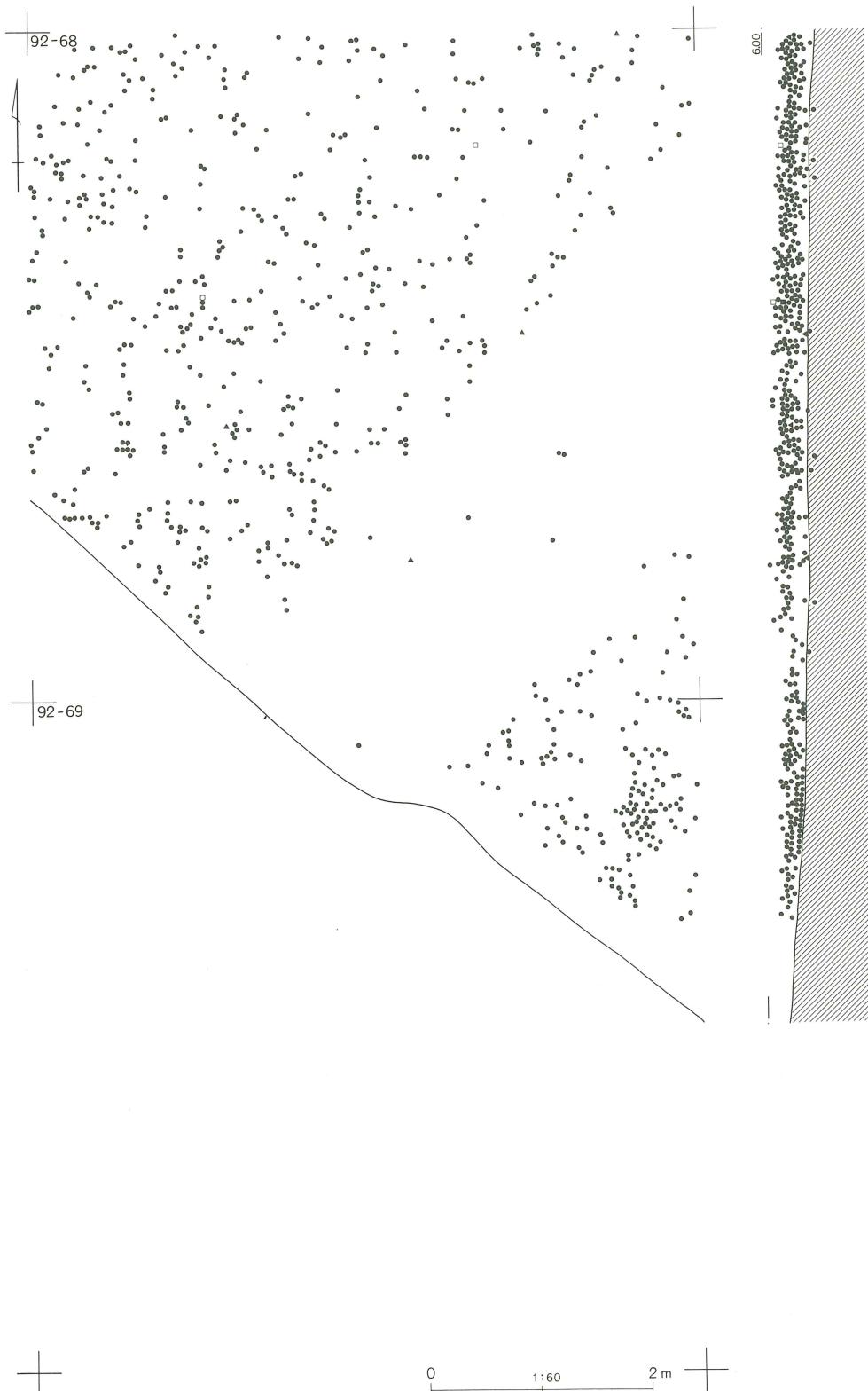


第 208 図 包含層遺物出土状態(12)

根 切

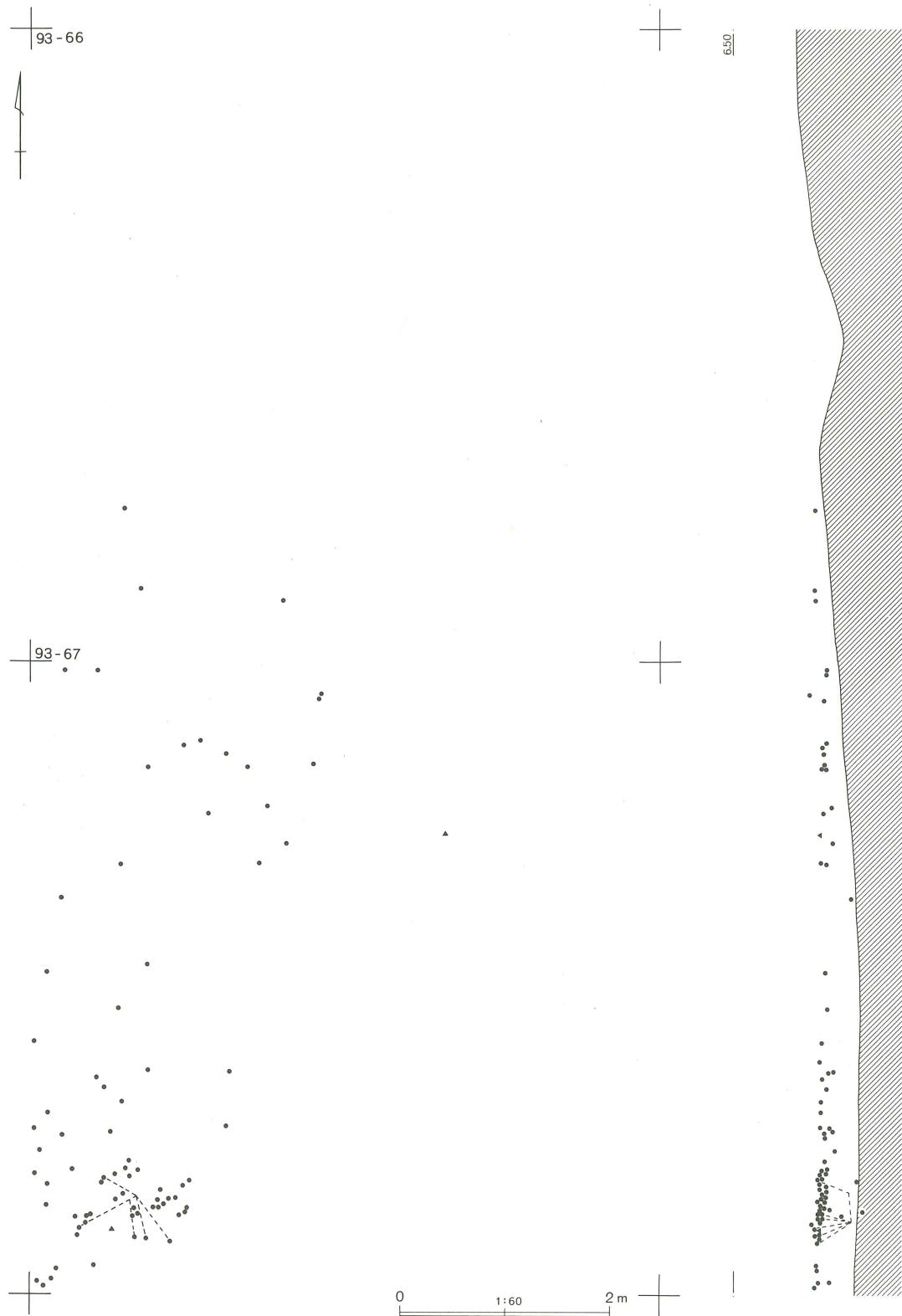


第 209 図 包含層遺物出土状態(13)

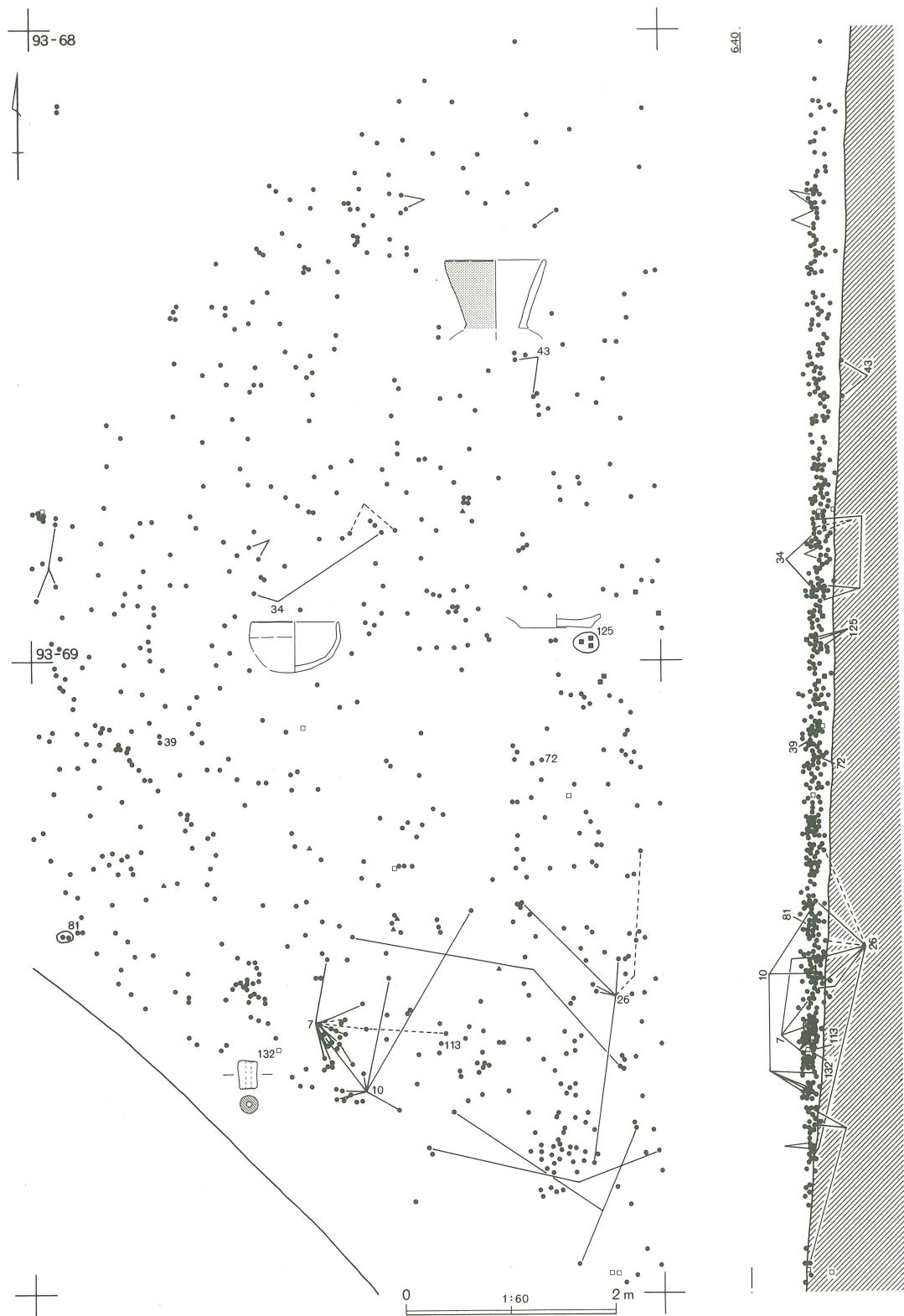


第 210 図 包含層遺物出土状態(14)

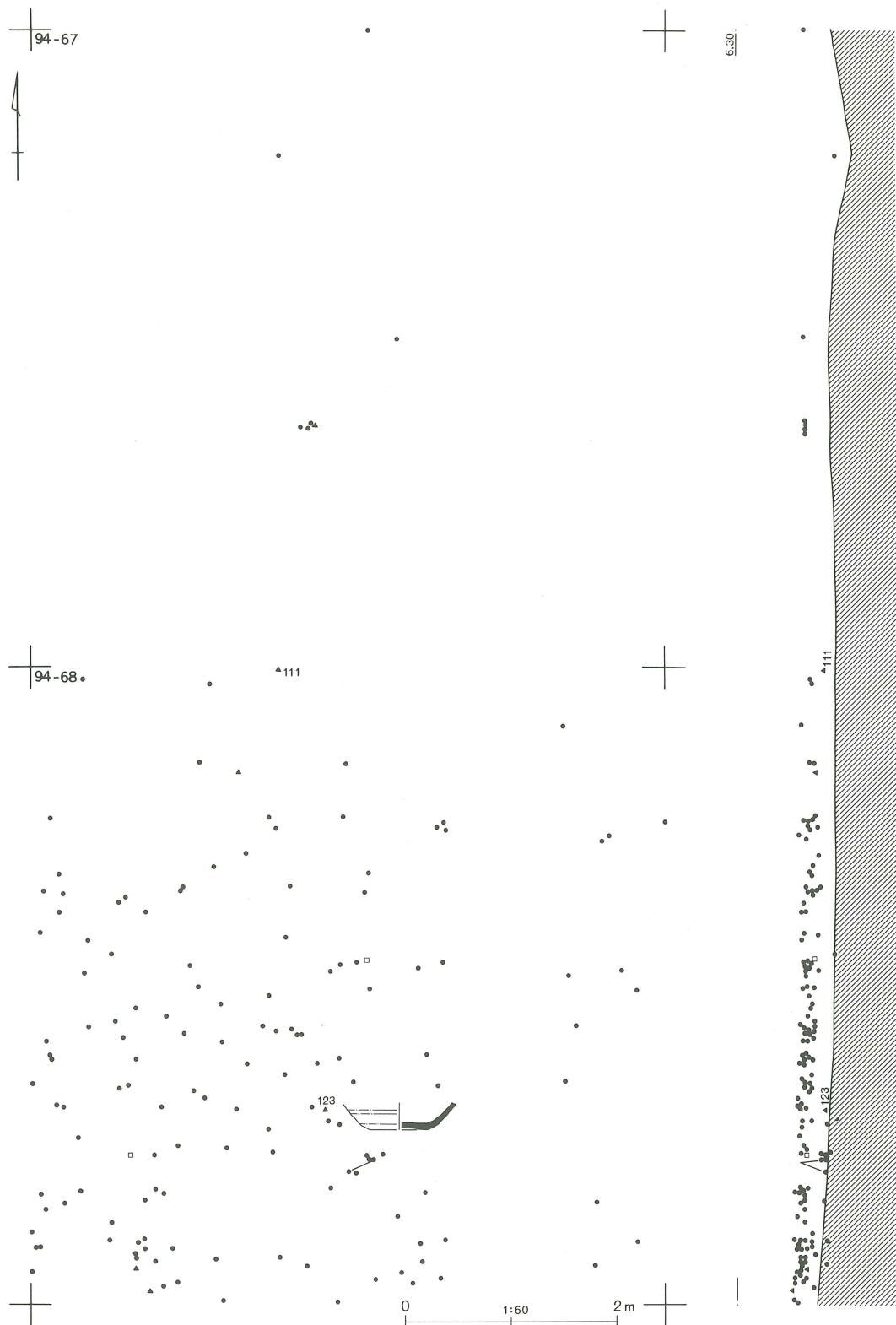
根 切



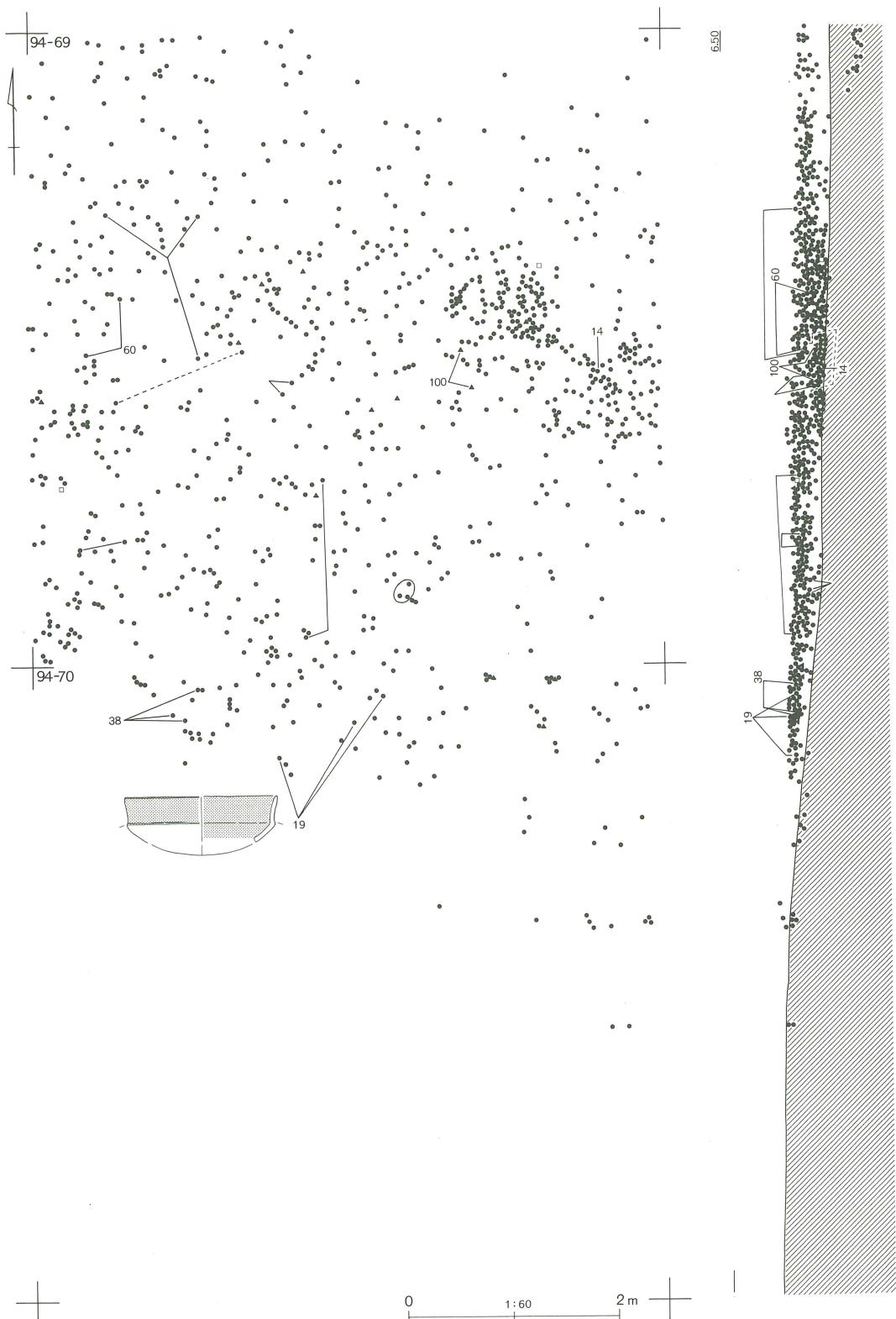
第 211 図 包含層遺物出土状態(15)



第 212 図 包含層遺物出土状態(16)



第213図 包含層遺物出土状態(17)

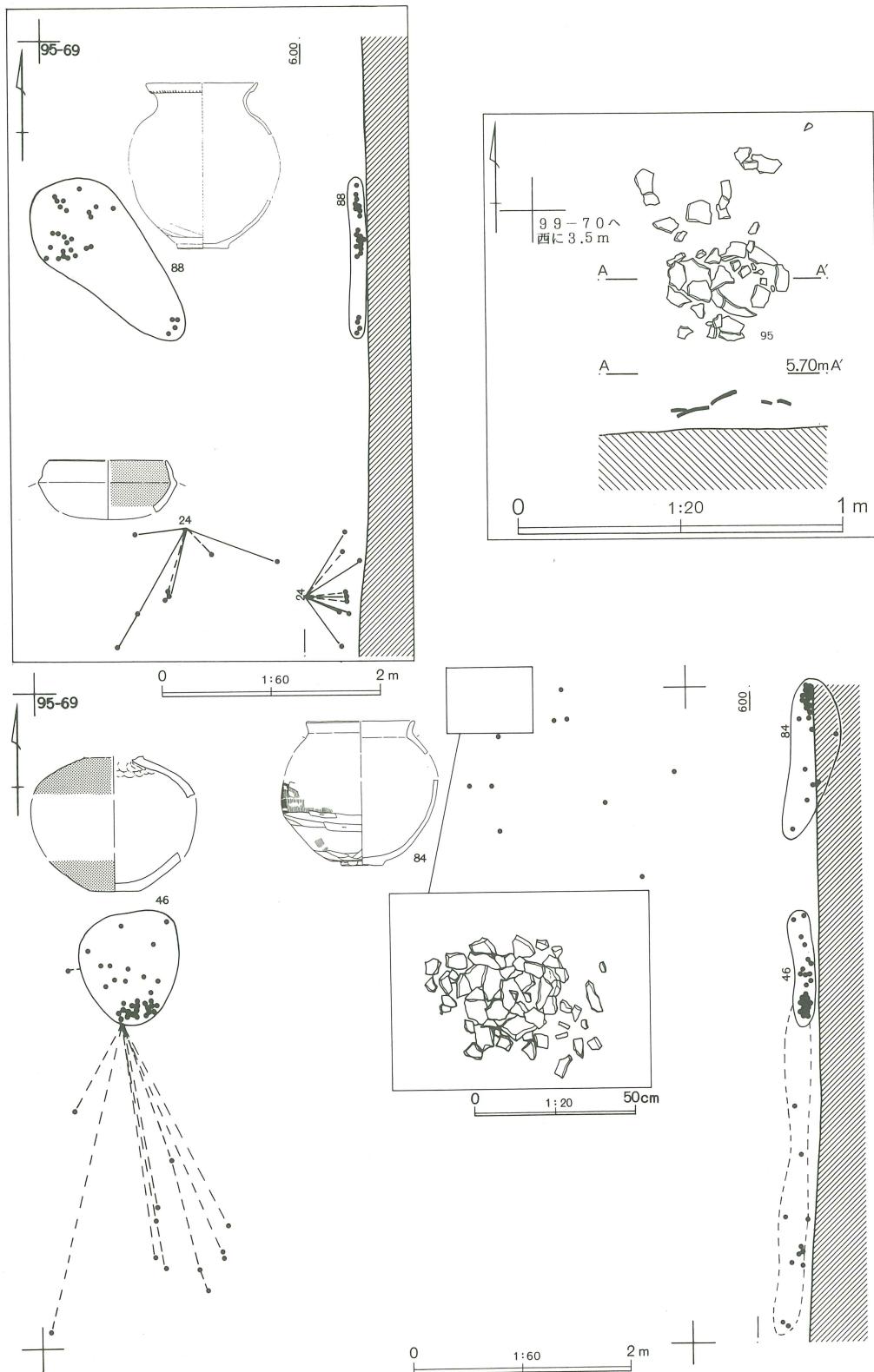


第 214 図 包含層遺物出土状態(18)

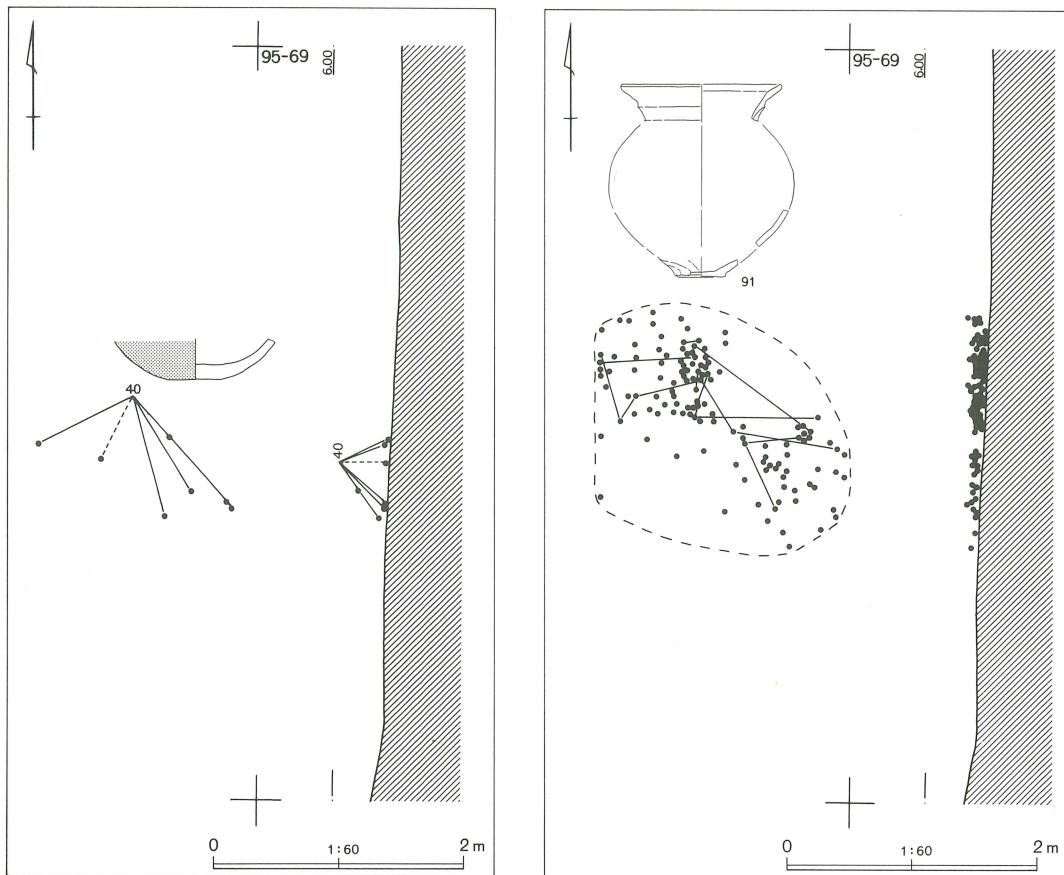
根 切



第 215 図 包含層遺物出土状態(19)



第 216 図 包含層遺物出土状態(20)



第217図 包含層遺物出土状態(21)

墳時代後期～平安時代をひとまとめにせざるをえなかった。ただし、後述するように、おそらく15,926点の大半は古墳時代後期の遺物と考えている。

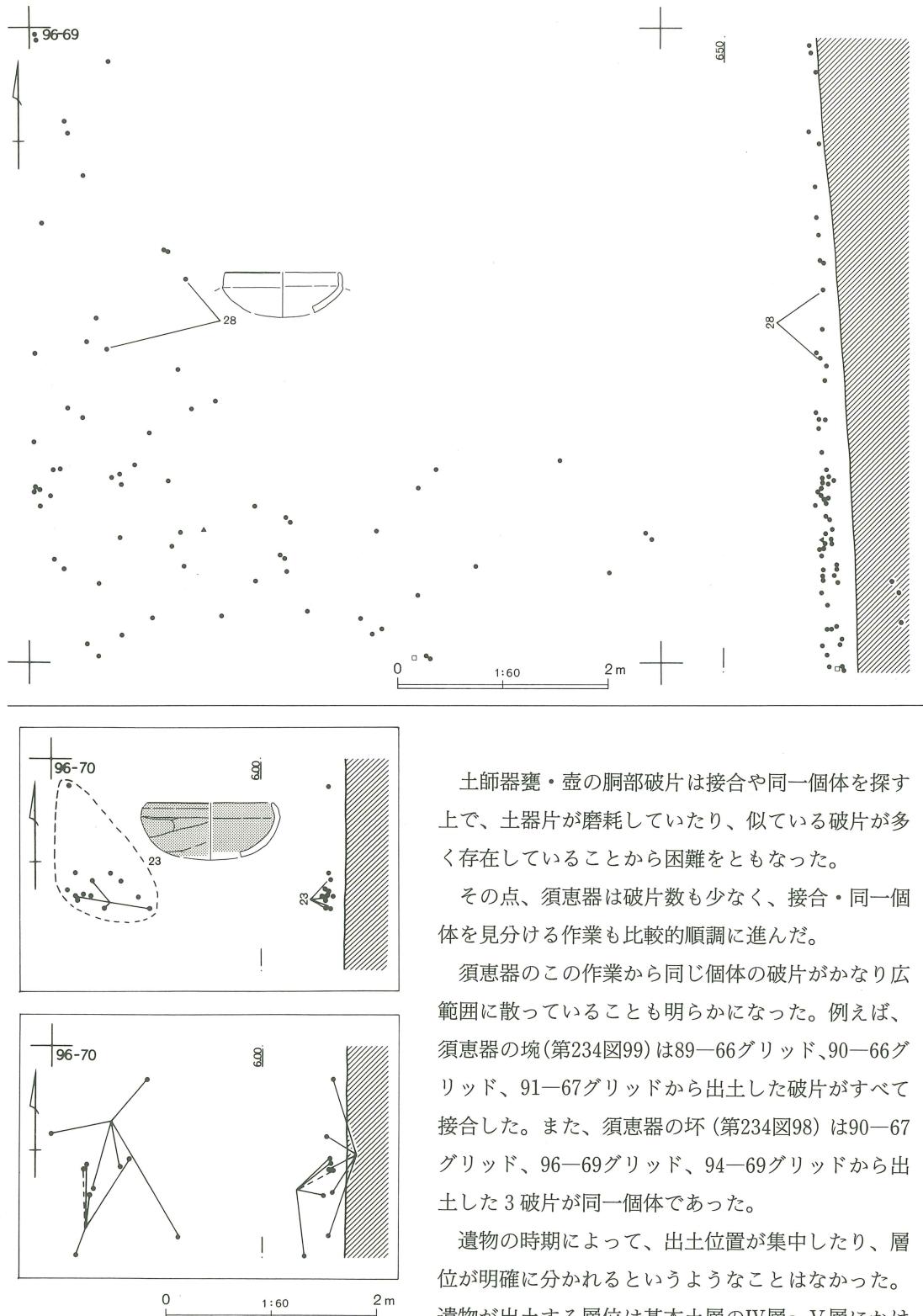
遺物は83—65グリッドと94—69グリッドと96—71グリッド付近に集中していた。最も多かったのは96—71グリッドで1,736点出土している（第220～222図）。

今回の調査区域内は低地でも河川になっていた痕跡はなく、川の増水時に冠水するような湿地であったと思われる。出土状態からは不要になった土器や破損した土器を投棄した様子がうかがえるが、理解に苦しむようなものも存在する。それは、自然堤防からかなり離れた地点から土師器壺などが一個体つぶれたような状態で出土するケースである。例えば、弥生土器の甕（第228図4）は99—70グリッドから99—71グリッドにかけて出土しているが（第227図）、その場所は自然堤防からは約40mも離れている。同じように、土師器の壺（第233図95）は口縁部を下にして伏せた状態で99—70グリッドから出土しており（第216図）、その場所は自然堤防から約50mも離れている。このようなケースは投棄した土器が何十mも転がっていったとも考えにくく、何か意味があるのかもしれない。

根 切



第 218 図 包含層遺物出土状態(22)



第 219 図 包含層遺物出土状態(23)

土師器甕・壺の胴部破片は接合や同一個体を探す上で、土器片が磨耗していたり、似ている破片が多く存在していることから困難をともなった。

その点、須恵器は破片数も少なく、接合・同一個体を見分ける作業も比較的順調に進んだ。

須恵器のこの作業から同じ個体の破片がかなり広範囲に散っていることも明らかになった。例えば、須恵器の塊(第234図99)は89-66グリッド、90-66グリッド、91-67グリッドから出土した破片がすべて接合した。また、須恵器の壺(第234図98)は90-67グリッド、96-69グリッド、94-69グリッドから出土した3破片が同一個体であった。

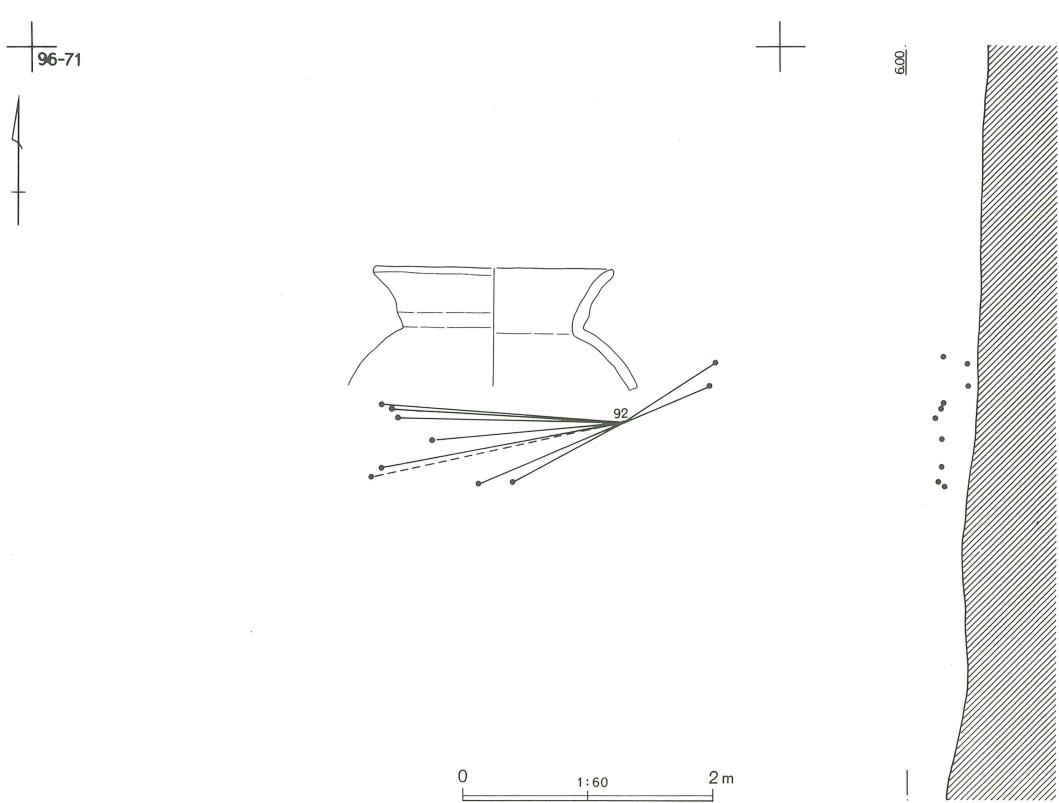
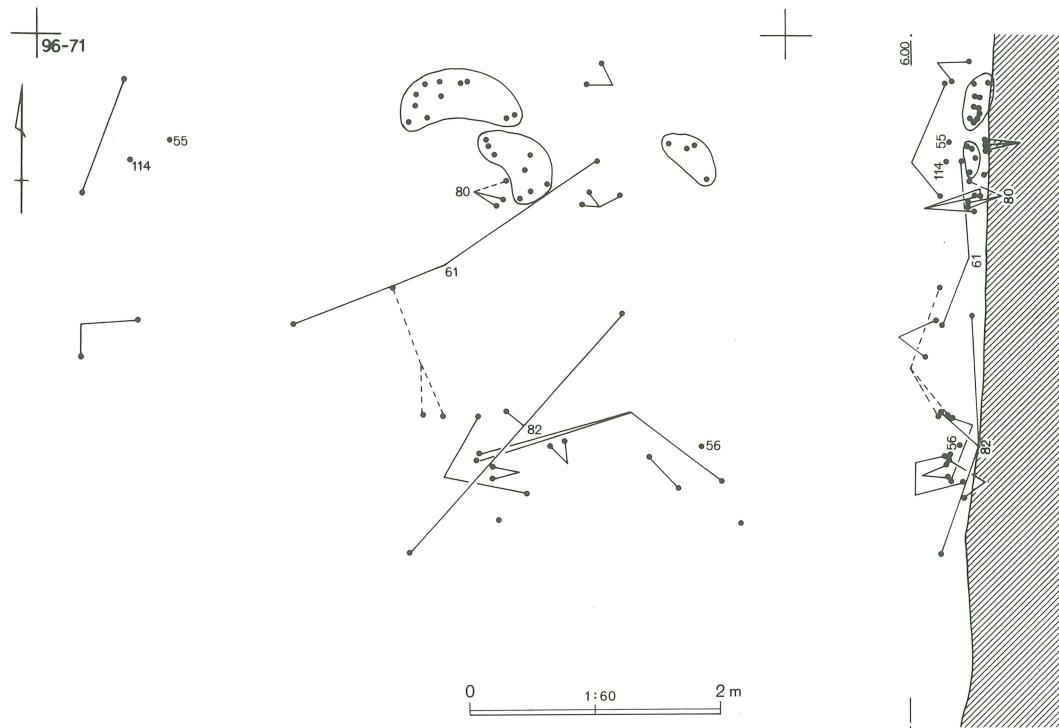
遺物の時期によって、出土位置が集中したり、層位が明確に分かれるというようなことはなかった。遺物が出土する層位は基本土層のIV層～V層にかけてである(第188図)。

根 切

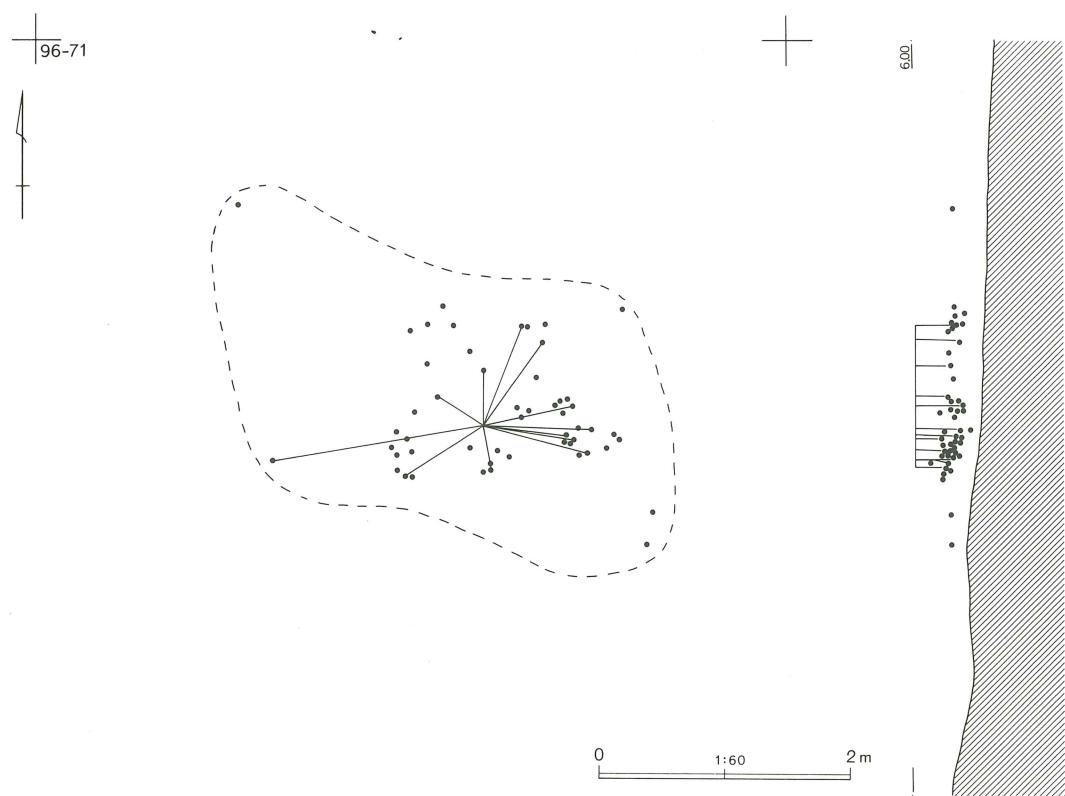
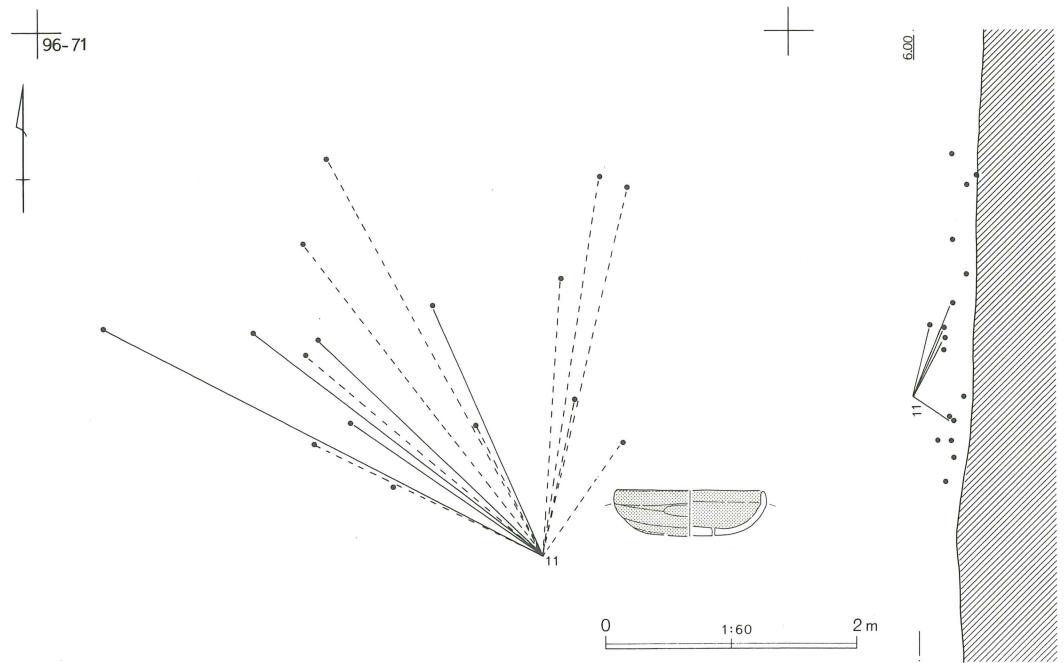


第220図 包含層遺物出土状態(24)

根 切



第 221 図 包含層遺物出土状態(25)



第 222 図 包含層遺物出土状態(26)

根 切



第 223 図 包含層遺物出土状態(27)



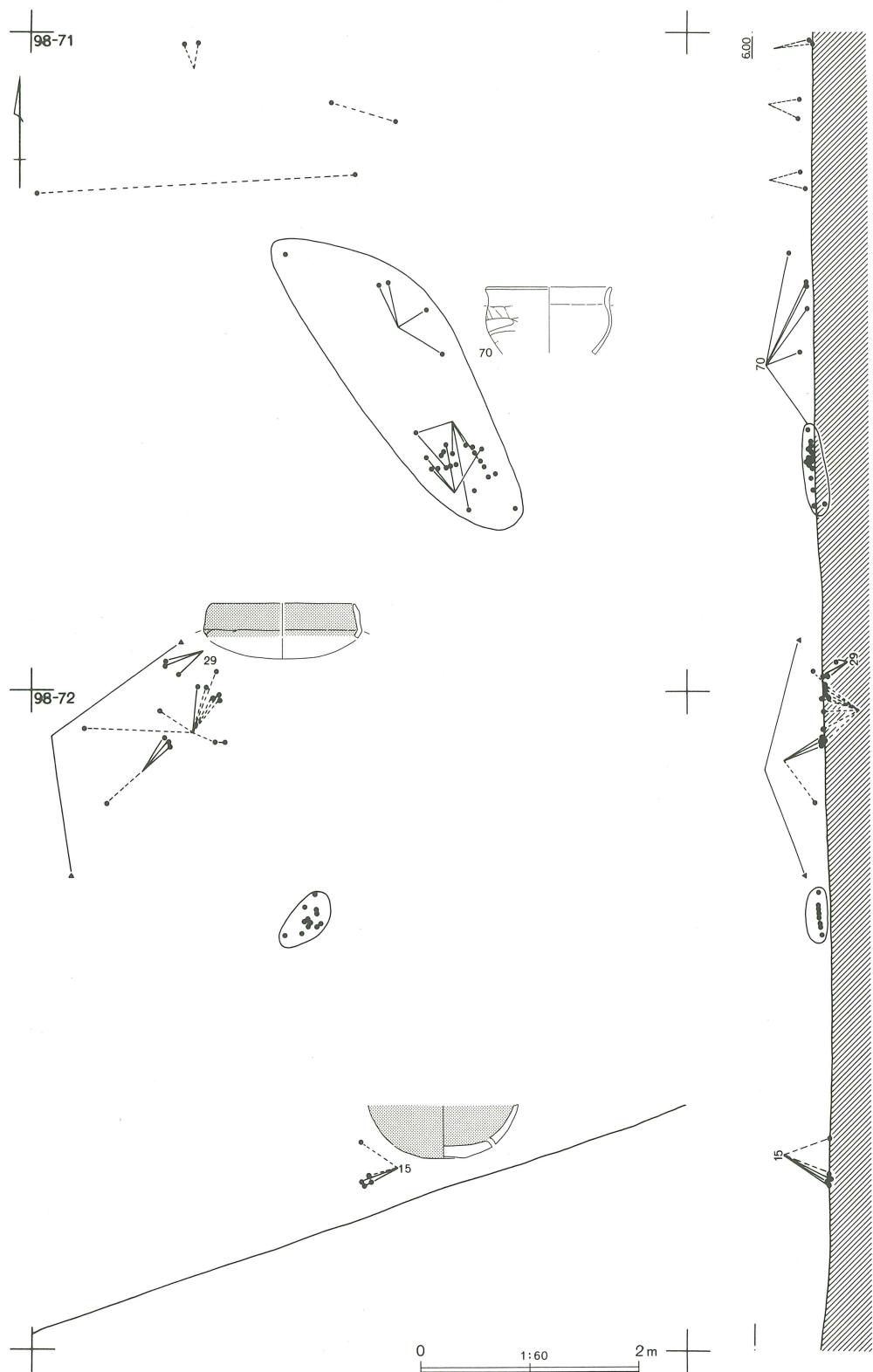
第 224 図 包含層遺物出土状態(28)

根 切

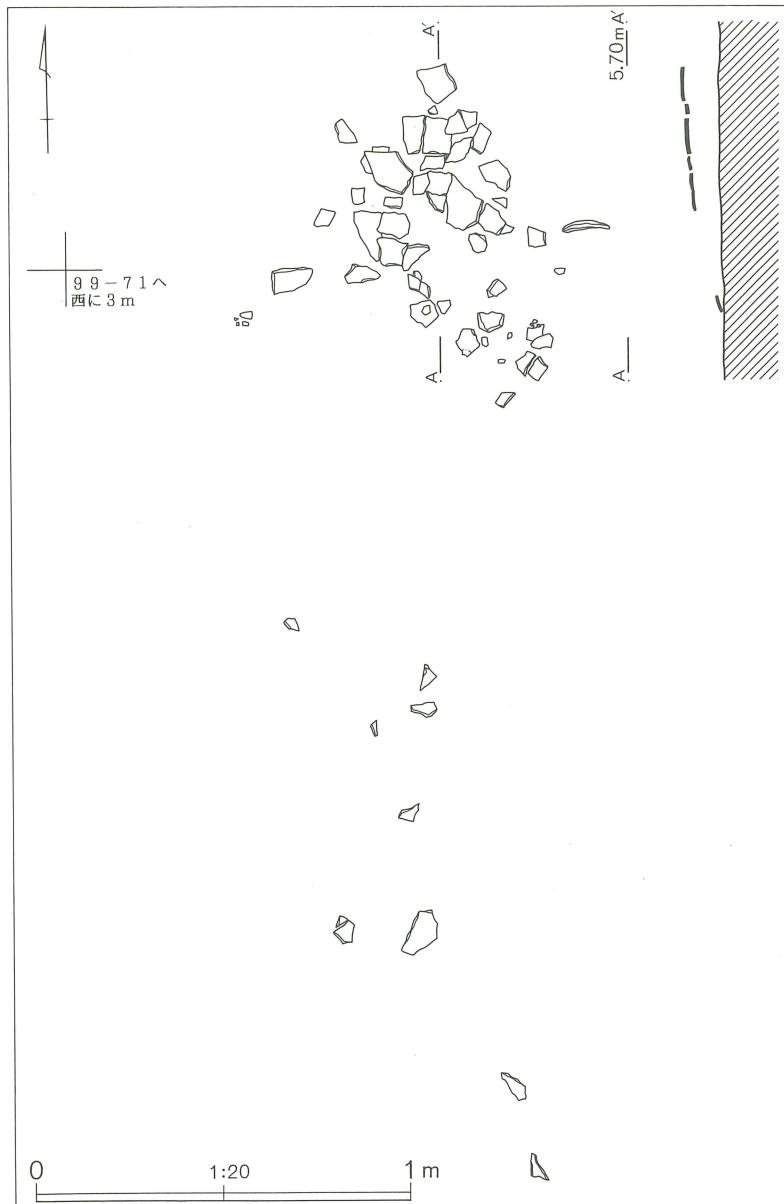


第 225 図 包含層遺物出土状態(29)

根 切



第 226 図 包含層遺物出土状態(30)



第227図 包含層遺物4の出土状態

図化できた遺物は計132点あった(第228~236図)。1~3は縄文時代の土器と石器、4は弥生時代の土器、5~115は古墳時代の土師器・須恵器など、116~128は奈良時代から平安時代の須恵器・土師質土器、129~131は中世の陶器・磁器、132は時期は確定できない。これらの中では古墳時代後期の遺物が最も多く、全体の約8割を占めている。古墳時代後期~平安時代に属する破片資料全体でもおそらく約8割は古墳時代後期の所産と思われる。

縄文時代は土器2点と石器1点を図化した(第228図)。1は胴部が張る形態の土器の胴部破片である。沈線文が二条横位に施されている。時期は縄文時代晩期に属すると思われるが型式などはよ

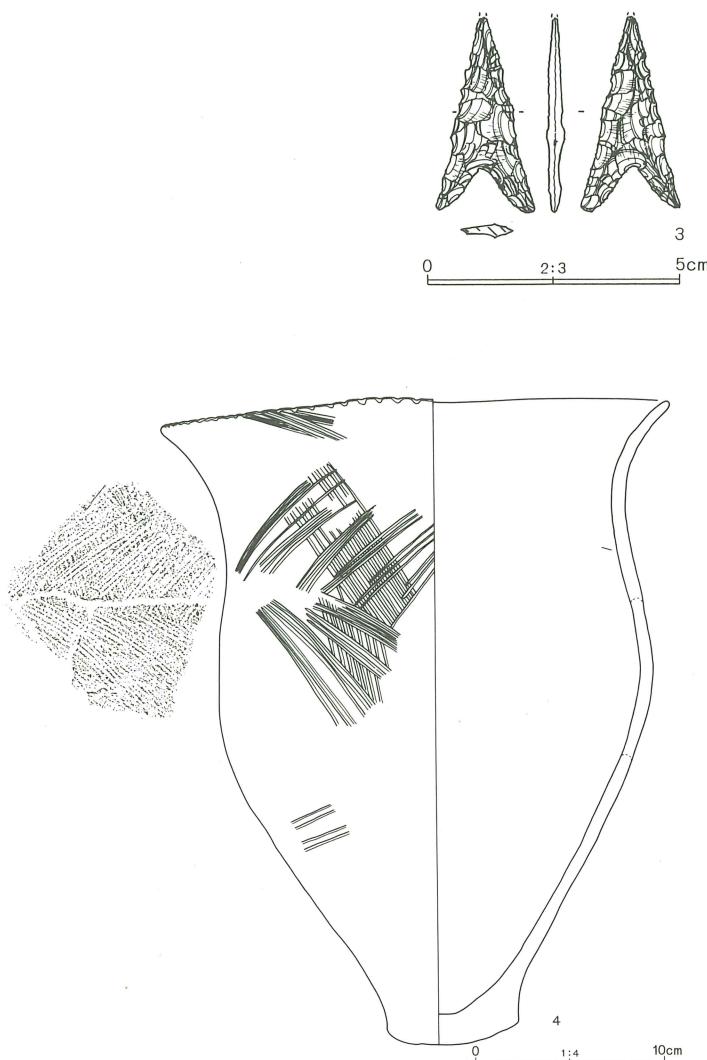
くわからない。2は異形台付土器の体部破片である。二条の沈線文を施しており、コブ文を配している。時期は縄文時代後期後葉に属すると思われるが型式などはよくわからない。3は石鏃である。チャート製で、先端部をわずかに欠損している。

弥生時代は土器1点を図化した(第228図)。土圧で押しつぶされたような出土状態で、破片の一部は2mほど離れた所まで散っていた(第227図)。砂質の強い胎土のためか、器表面は剥離が著しく、調整技法等はごく一部でしか観察できなかった。口唇部には刻み目が入る。胴部外面は左上から右下方向に何段かにわたって刷毛目調整し、さらにその上に一単位3、4条の櫛描きの羽状文が施されている。弥生時代中期後葉の宮ノ台式土器と思われる。今回の調査で出土した弥生時代の土器はこの1点だけである。

古墳時代の遺物は計111点を図化した(第229~234図)。その内訳は土師器が91点、須恵器が16点、手捏土器が1点、石製模造品が3点である。土師器のうち34・84・85・86・87・88・89・90は古墳時代前期に遡る可能性が高い。

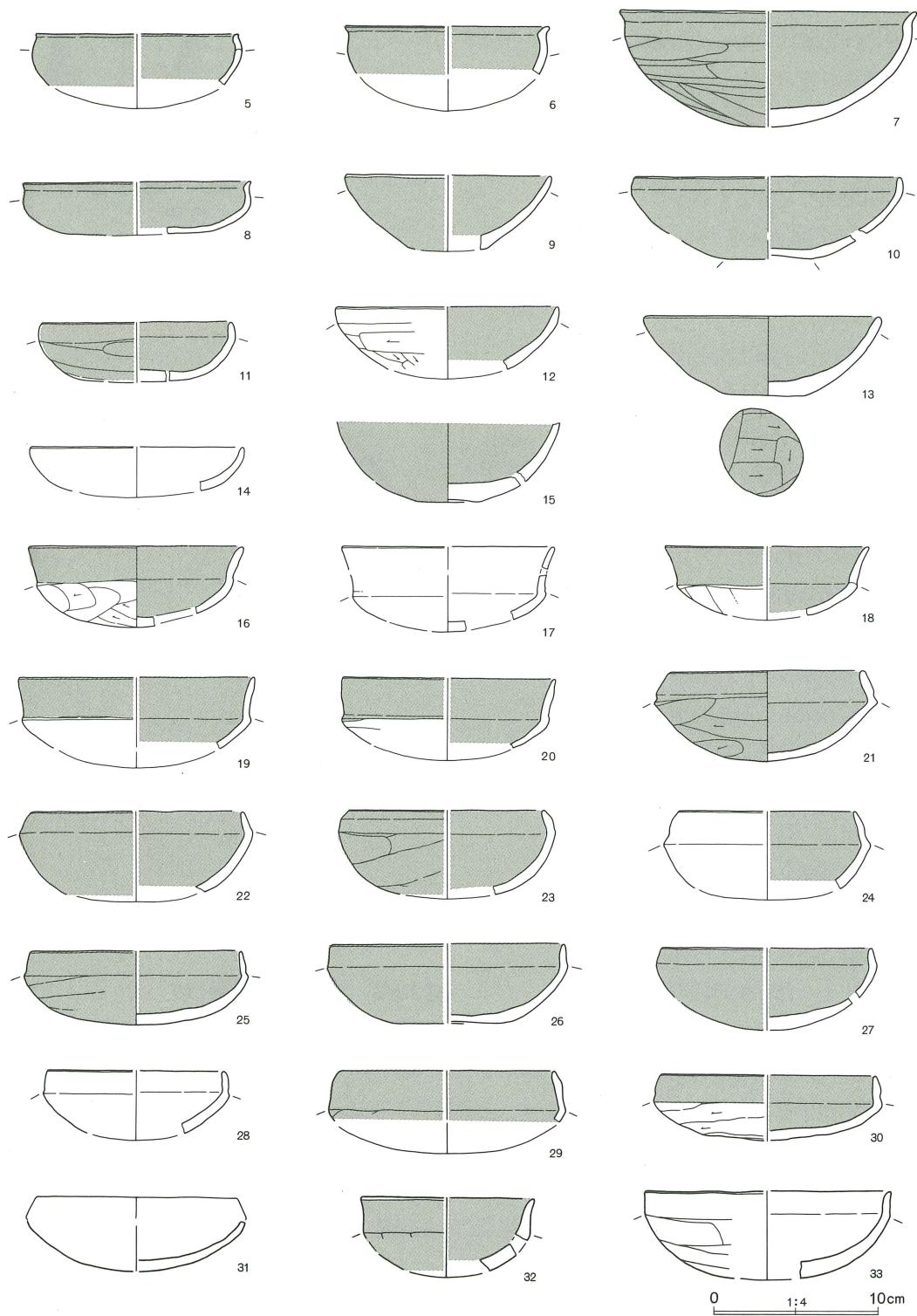
土師器の器種には壺・塊・小型壺・高壺・甌・甕・壺などがある。土師器壺の形態はバラエティに富んでおり、赤彩されたものが多い。口径は12~13cm前後のものが多く、器高も比較的深い。古墳時代後期でも比較的古い段階のものが多いと思われる。このような傾向は土師器高壺にも認められ、49・52・57(第230図)のように体部下端や脚部に稜が作り出されるものが多い。また、土師器甕も長胴化しているもののまだ胴部が張るものが多い。

須恵器の器種には蓋、壺、塊、長頸壺、甕などがある。99(第234図)の塊は頸部より上を欠損し



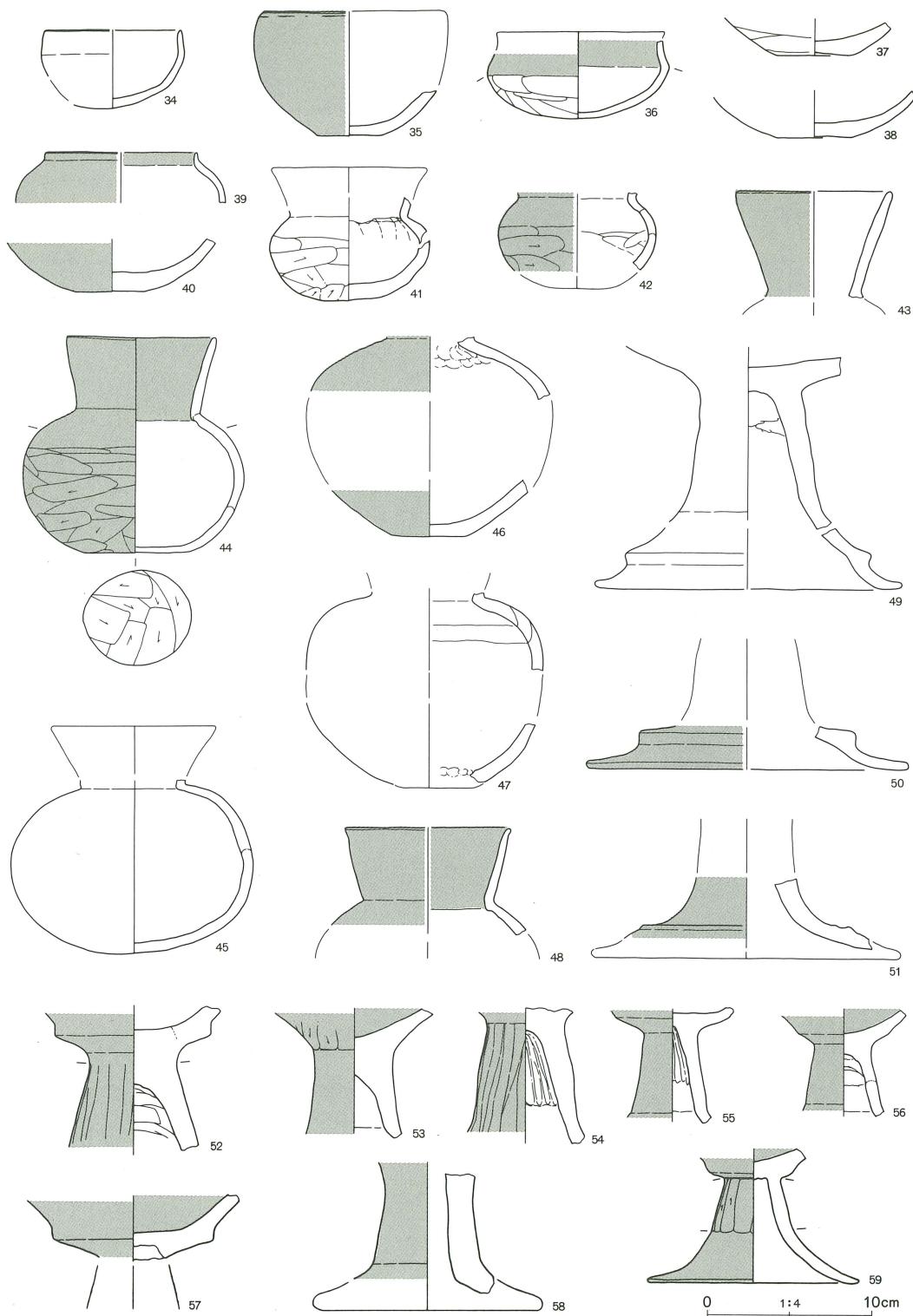
第228図 包含層出土遺物(1)

根 切



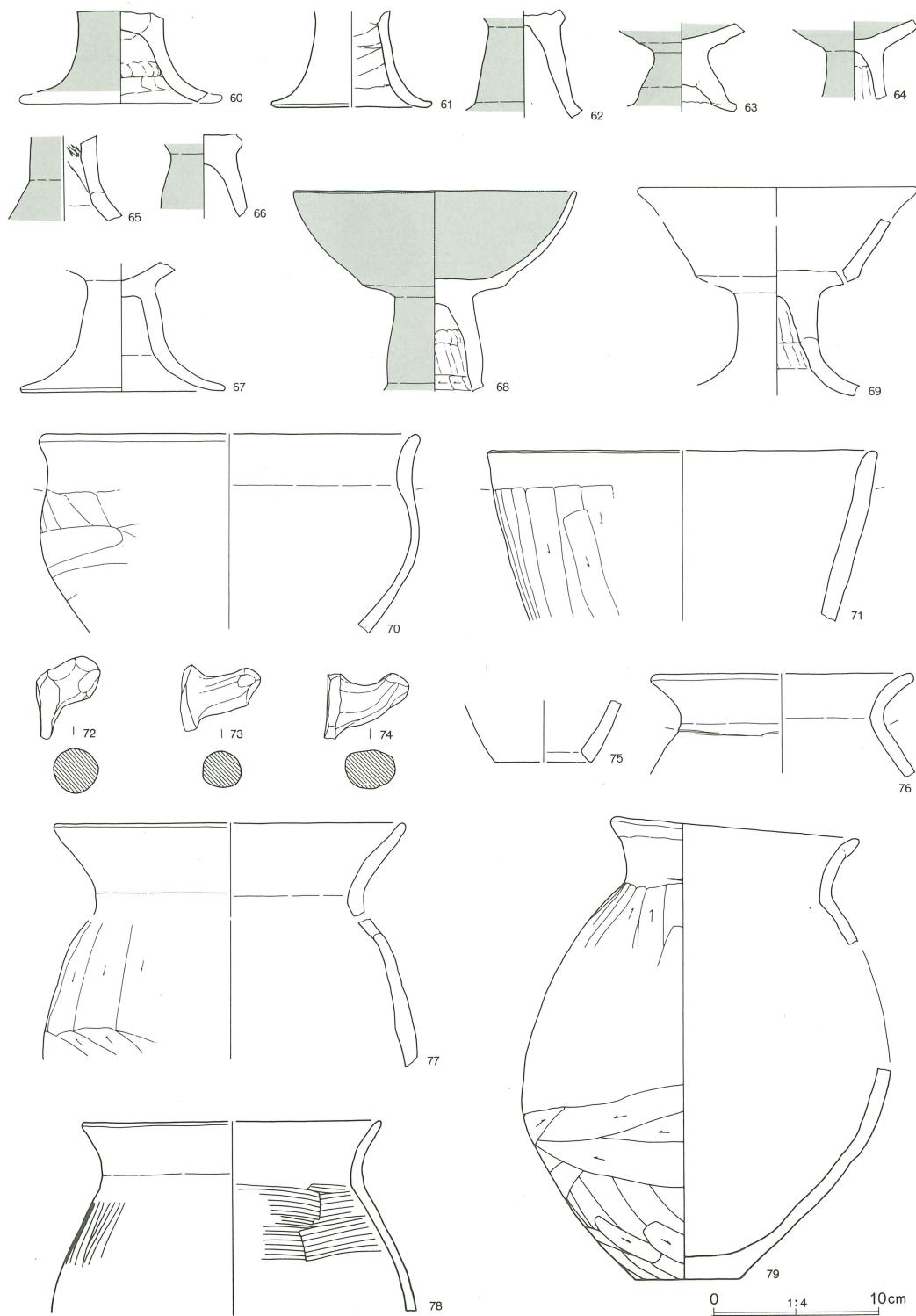
第 229 図 包含層出土遺物(2)

根 切



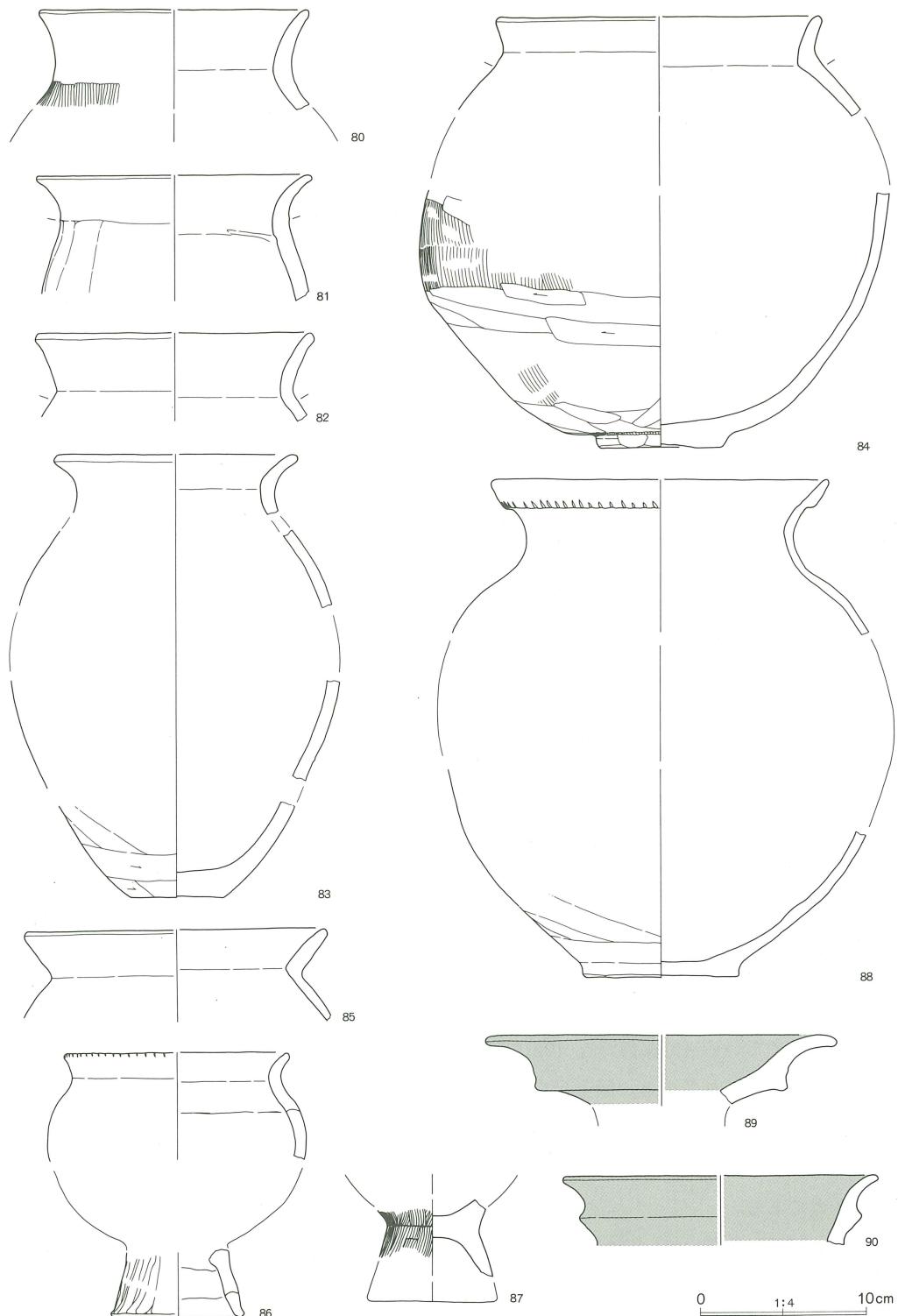
第 230 図 包含層出土遺物(3)

根 切

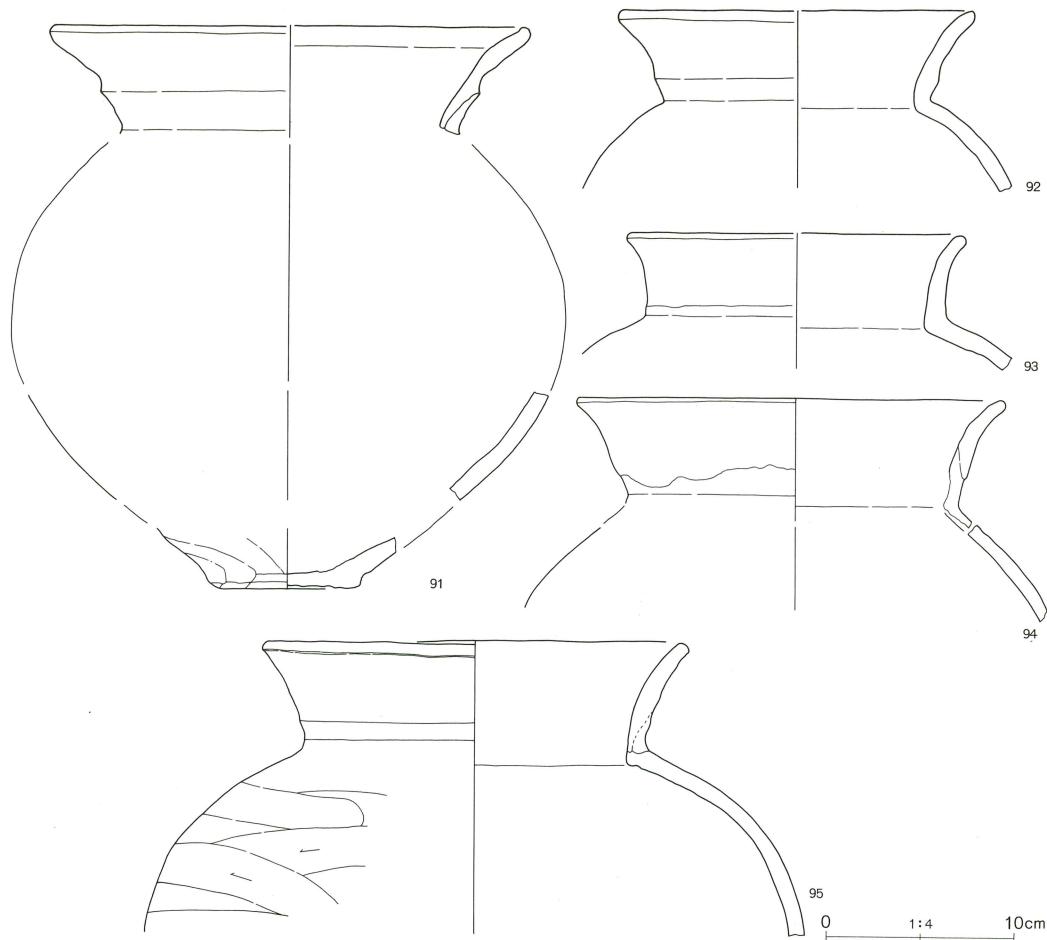


第 231 図 包含層出土遺物(4)

根 切



第232図 包含層出土遺物(5)



第233図 包含層出土遺物(6)

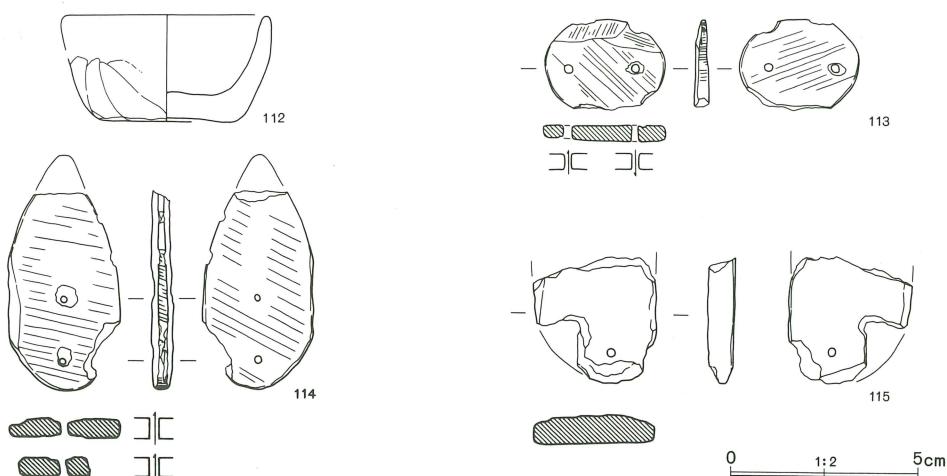
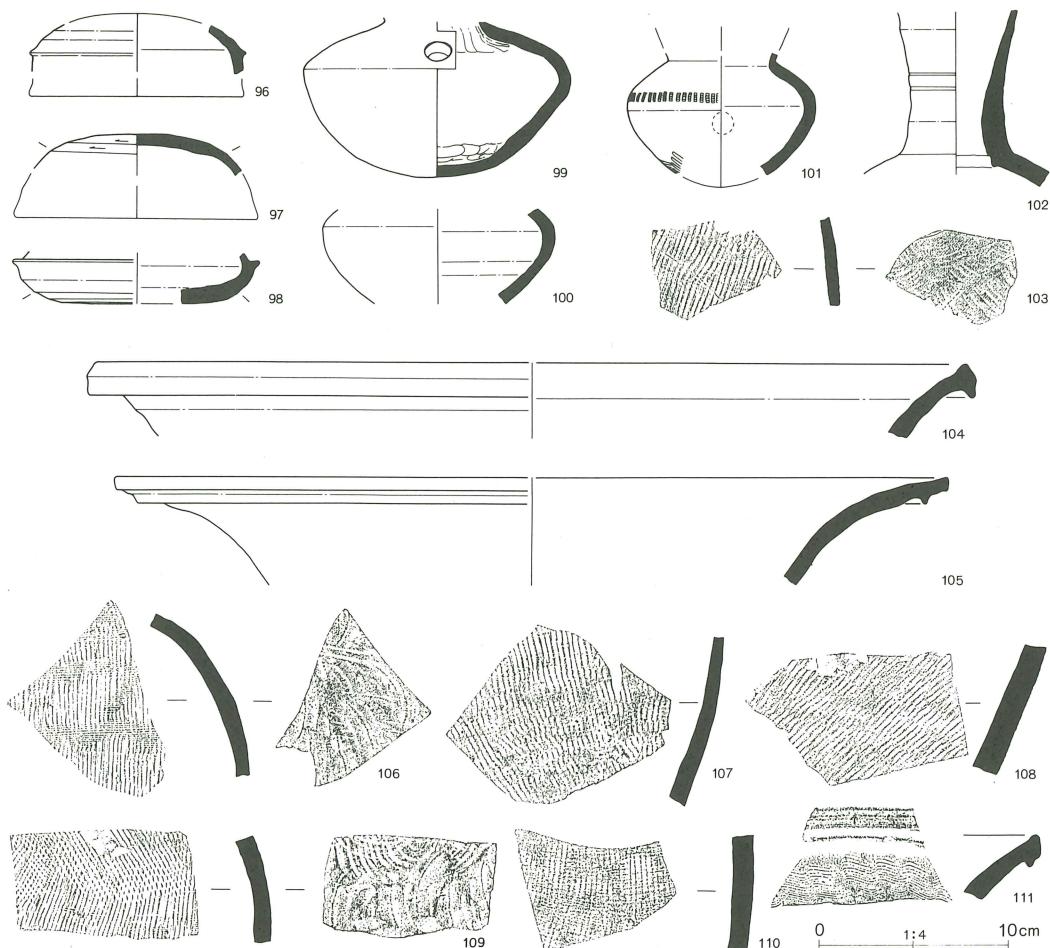
ているが他はすべて残存している。口縁部が欠損しているので確定できないが、肩部がしっかりと張っている形態から陶邑編年の高蔵23号窯より新しくはならないものと思われる。よって、6世紀初頭以前の所産の可能性が高いものと思われる。また、胎土分析を行ったところ陶邑産の可能性が高いという結果もでている（付編参照）。102（第234図）の長頸壺の胴部はフラスコ型になる。頸部には2条の沈線が付けられている。胎土は白灰色で精選されており湖西産であろう。7世紀代の所産と思われる。

奈良時代から平安時代の遺物は計13点を図化した（第235図）。その内訳は須恵器が11点、土師質土器が2点である。

須恵器の器種には蓋・壺・甕がある。117～120は底部に再調整を加えている須恵器壺なので奈良時代の所産であろう。116を除き、他の土器は平安時代の所産と思われる。128は胎土が粗く、多量の雲母を含んでいるので県外産の可能性が高い。

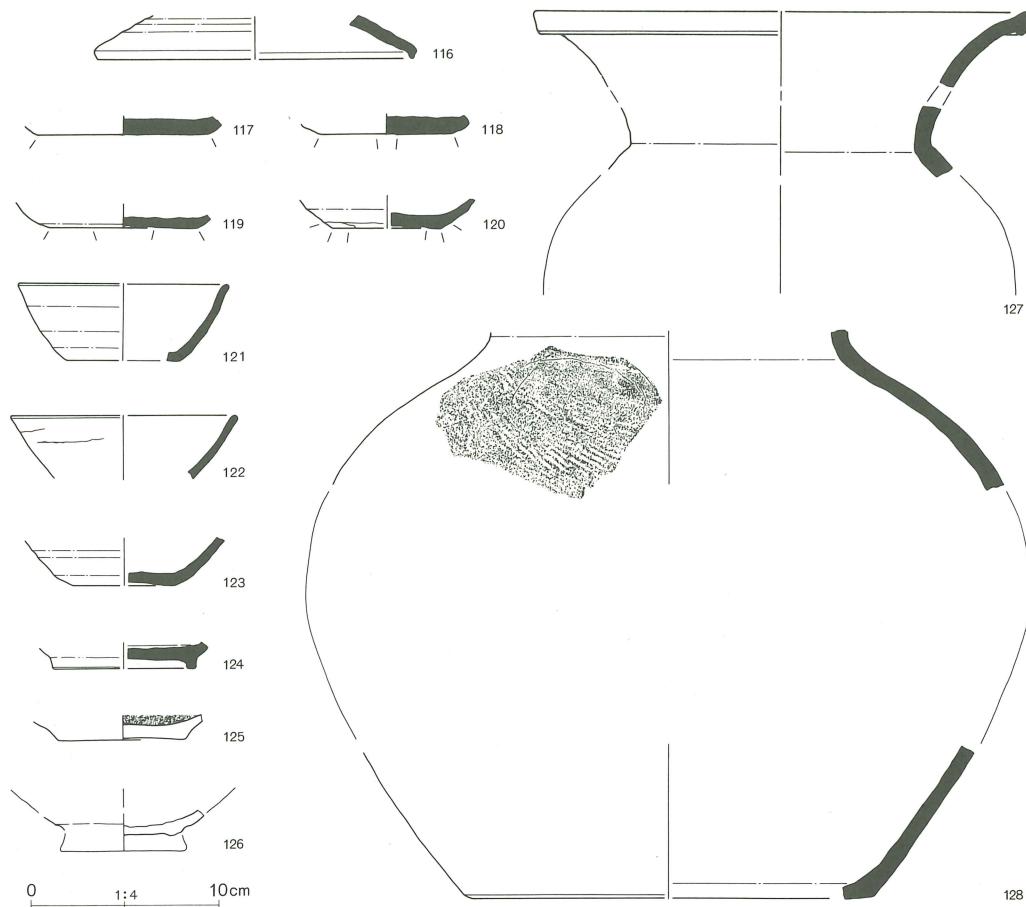
土師質土器の器種には壺と高台付壺がある。125は内面を黒色処理している。器表面が剥離しているのでミガキ調整されていたのかは不明である。

根 切

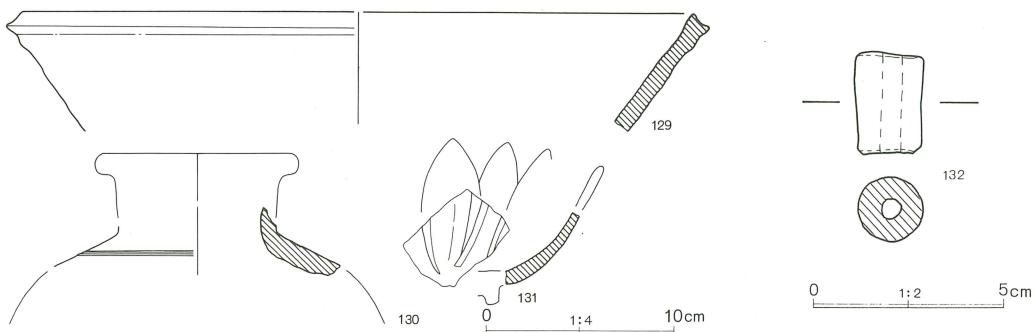


第 234 図 包含層出土遺物(7)

根 切



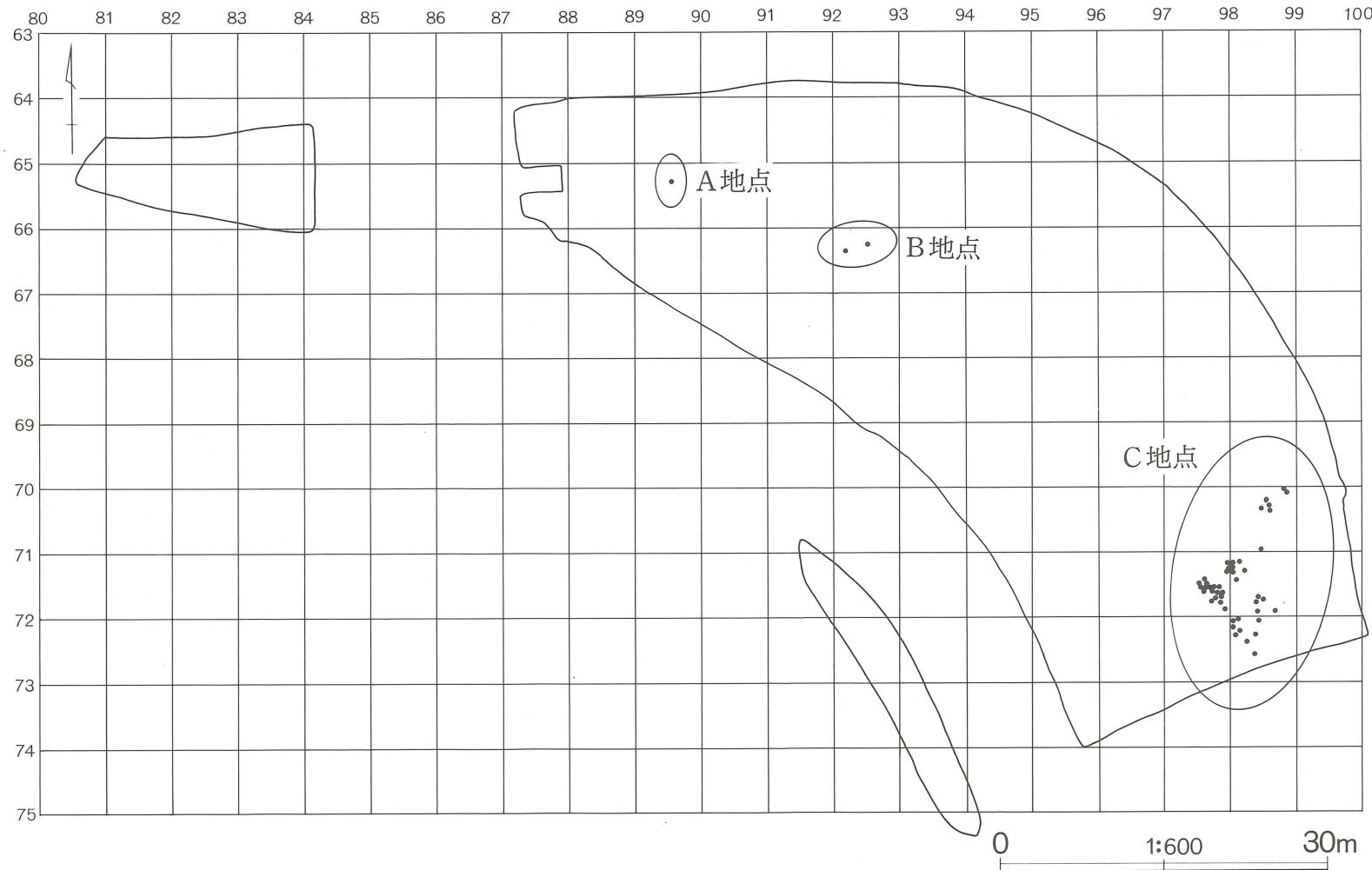
第235図 包含層出土遺物(8)



第236図 包含層出土遺物(9)

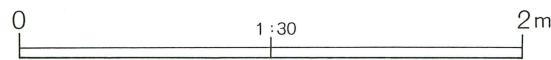
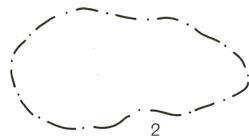
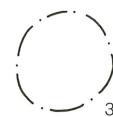
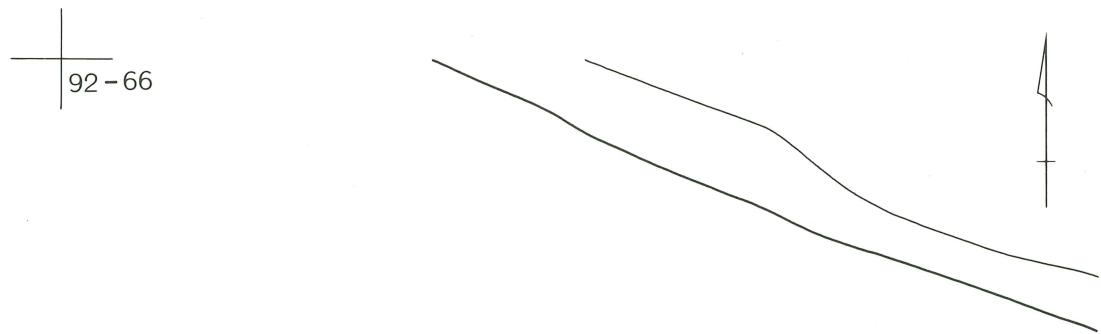
中世の遺物は計3点を図化した(第236図)。その内訳は陶器2点と磁器1点である。

129は常滑産の片口鉢である。14世紀代の所産と思われる。130は瀬戸・美濃産の壺である。肩部に2条に沈線がめぐる。13~14世紀代の所産と思われる。131は舶載磁器の青磁碗である。体部外面には幅広の鎬蓮弁文が彫られている。13世紀代の所産と思われる。



第 237 図 馬歯・馬骨出土位置

根 切



0<sub>37</sub>

0<sub>38</sub>



0<sub>40</sub>

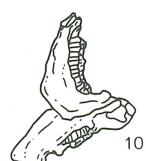
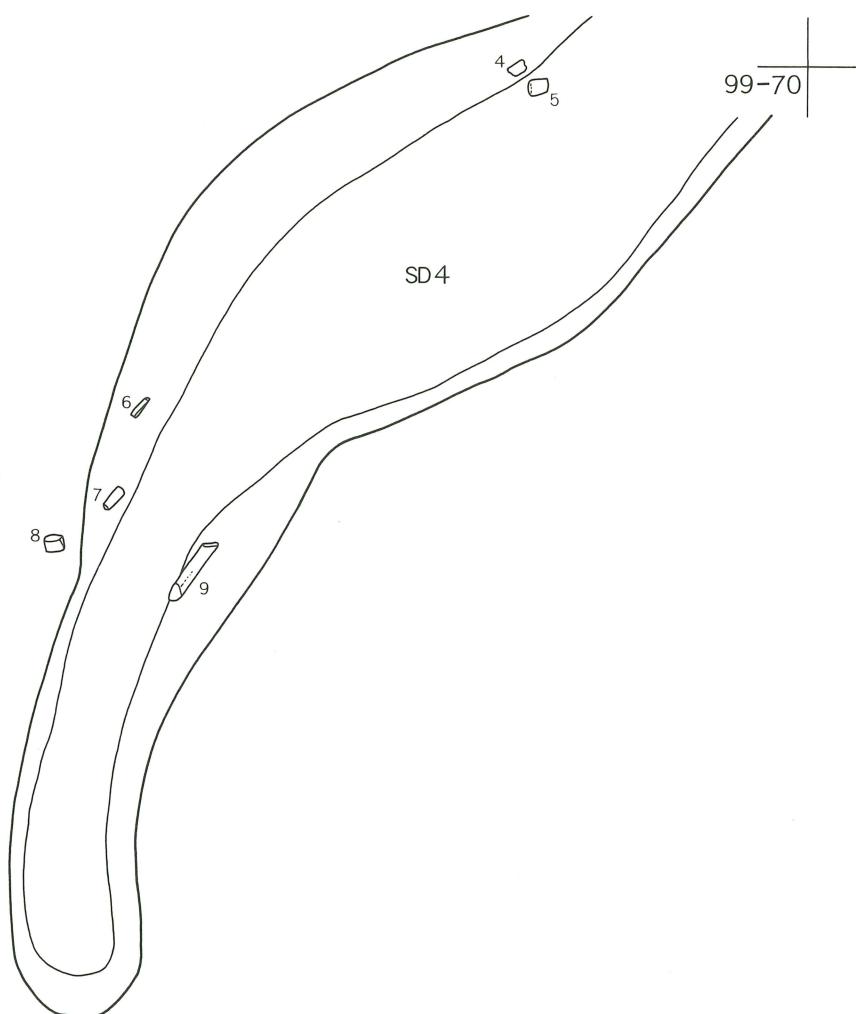


99-72



第 238 図 馬歯・馬骨出土状態(1)

根 切

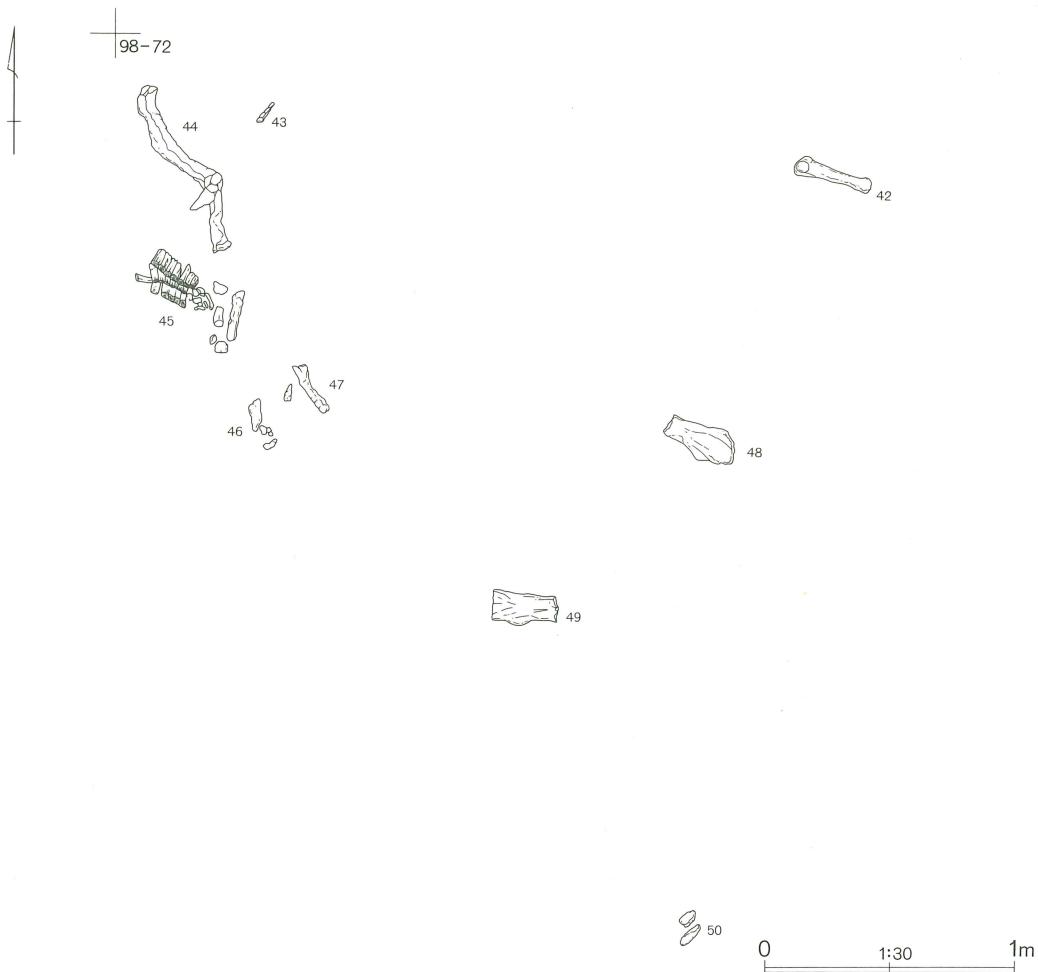


0 1:30 2m

第 239 図 馬歯・馬骨出土状態(2)



第 240 図 馬歯・馬骨出土状態(3)



第 241 図 馬歯・馬骨出土状態(4)

今回の調査で出土した遺物の中で、土器以外に歯・骨がかなりの点数出土したのでここで取り上げたい。くわしい分析結果は付編に譲ることとし、ここでは出土状態などについて簡単に報告しておきたい。なお、歯の種はすべて馬であるという分析結果が出ている。

馬歯・馬骨は計50点出土しており、出土地点は大きく3つにわかっている(第237図)。ここでは便宜的に89-65グリッド付近をA地点、92-66グリッド付近をB地点、97-71グリッド・98-70グリッド・98-71グリッド・98-72グリッド付近をC地点と呼ぶことにする。

A地点では1か所で臼歯片が数個まとまって出土した。これを馬骨1とした。

B地点では2か所で臼歯片が数個まとまって出土した(第238図上)。これを馬骨2、馬骨3とした。

以上3つの馬骨以外はすべてC地点で出土したものである(第238図下～第241図)。

出土状態は一頭の馬がそのままの形で検出されたのではなく、かなりばらばらになっている。分析では少なくとも7頭の馬の歯・骨が存在しているという結果が出ている。鴨川の氾濫による冠水

時に流された部位も多かったと思われる。たとえば、馬骨10は下顎骨が2頭分重なって出土しているが、これに合う上顎骨は1つも出土していない（第239図）。

出土した層位は主にV層で、第3地点では標高5.4m前後である。これは他の土器群と同じである。問題になるのはこれらの馬歯・馬骨の時期であろう。出土遺物は古墳時代後期が最も多かったので、馬歯・馬骨も同時期の可能性が高いが確証はない。

### 3 第3地点の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### 第1号住居跡（第244図～第246・248図）

95—110・96—110グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第3号住居跡より新しい。住居の西壁が調査区域外にかかっていたため、住居の全容はつかめなかった。

発掘範囲内の所見から住居の平面形は正方形に近いものと推定され、主軸方向はN—1°—Wである。規模は南北長が3.54mで、深さは39cmである。壁溝はカマド付近を除き全周するものと思われ、幅は15cmで、深さは8cmである。

覆土は3層に分かれ、きれいなレンズ状で自然堆積と思われる。

ピットや土壙は検出されなかった。

貼り床は掘り方の凹凸を埋めるように全体で確認された。

床面下ではピットが4本検出された。P'1は径10cmで、深さは7cm、P'2は径31cmで、深さは8cm、P'3は径15cmで、深さは14cm、P'4は径12cmで、深さは14cmである。

カマドは北壁に設けられ、長さ1.5m、焚口幅54cmである。煙道部と燃焼部はわずかに段差がある。煙道部と燃焼部とも側面は被熱により赤褐色に硬化していた。カマド袖は地山に近似した粘土質の土を貼り付けたものである。

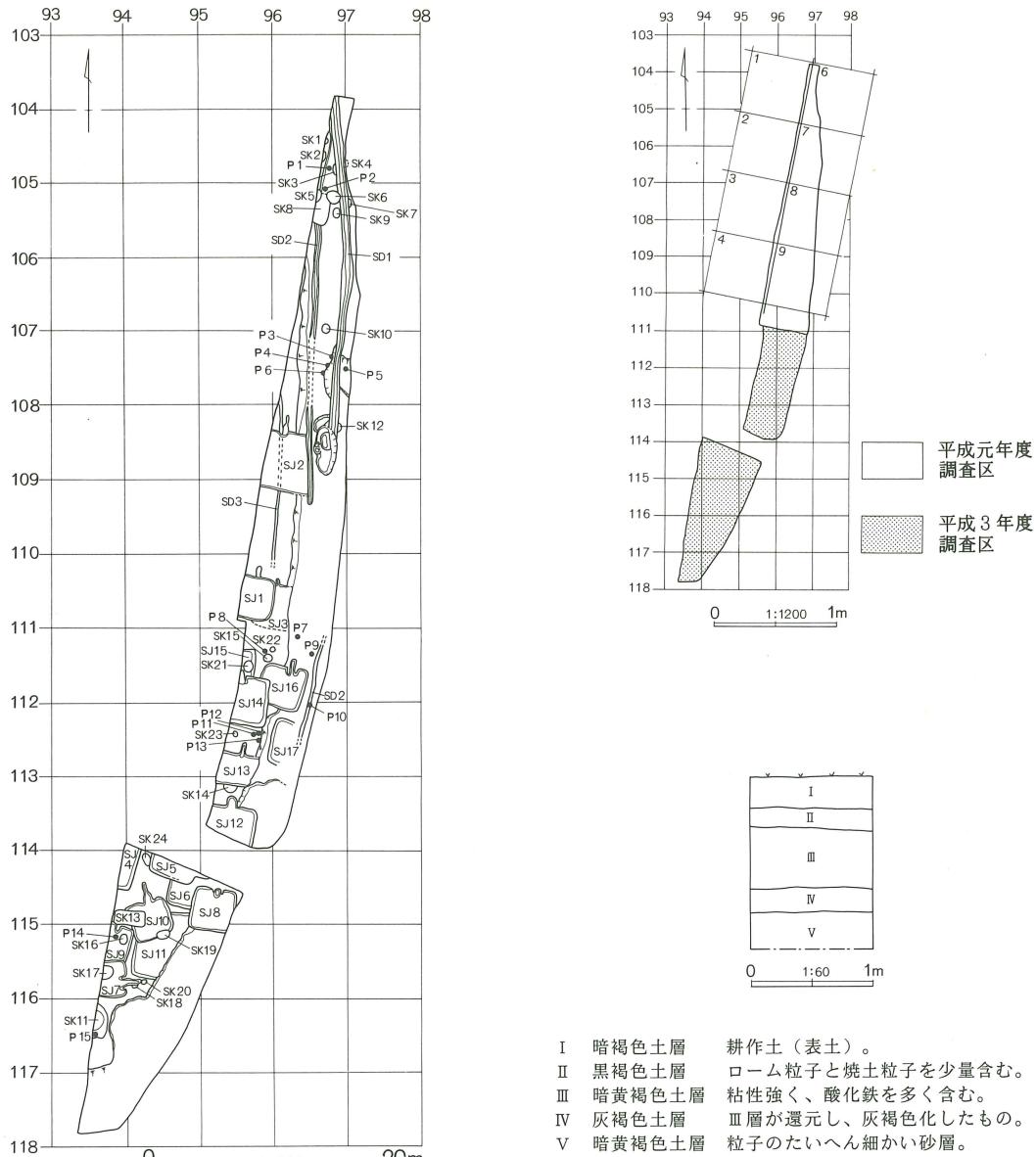
遺物はたいへん多く出土したが、大半は覆土中（1層）から出土したものである。その8割近くが土師器甕・壺の破片であった。

図化できた遺物は計13点あった。出土位置は1～5・7・9～13が床面近く、6が床面下、8は覆土中である。

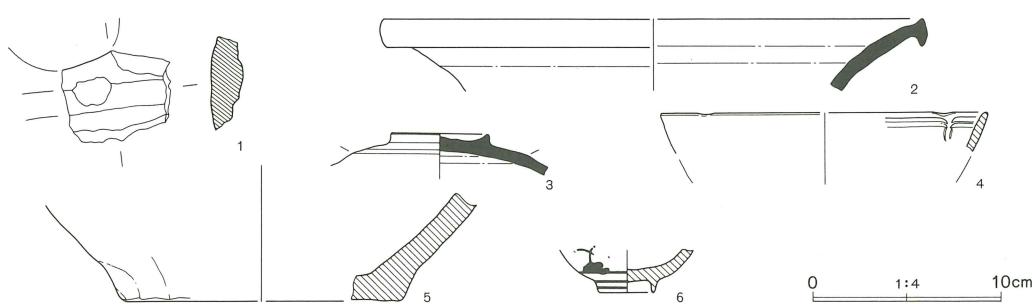
壺類は土師器が主体で、丸底で口唇部がやや肥厚して外に開く形態のものが多い（2～4）。また、口唇部端部や口唇部内側に沈線をめぐらすものもある（2・6）。6の土師器壺は内面を丁寧にミガキ調整している。また、内面には漆が薄い膜状に付着していた。

須恵器壺は量的に少なく、9の須恵器壺は底部全面回転糸切り無調整で、口径16.6cm、器高4.6cmである。胎土には白色針状物質が含まれているので南比企窯跡群産である。

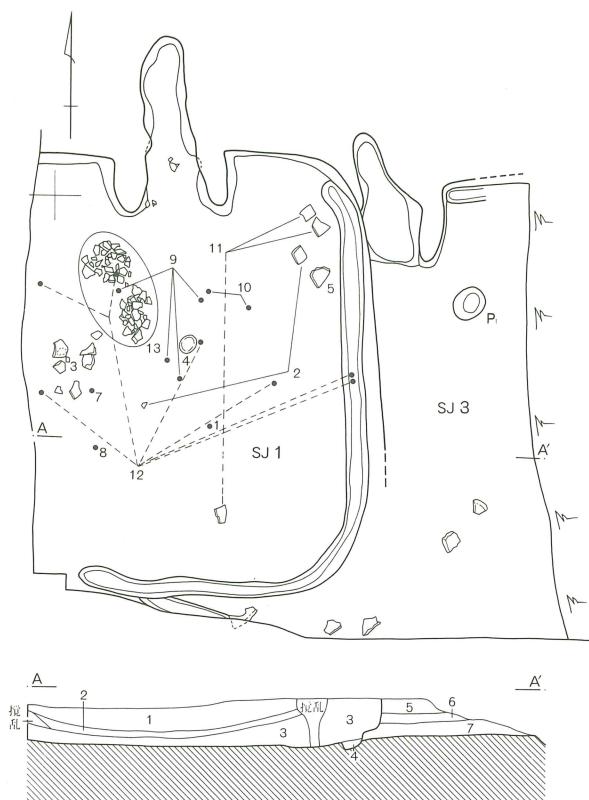
覆土中出土の8の須恵器高台付壺は底部が高台よりも飛び出しており、その形態や胎土から湖西産の可能性が高い。内面には銅の溶解物が付着しているので、取瓶として使われていたものであろう。



第242図 第3地点全体図

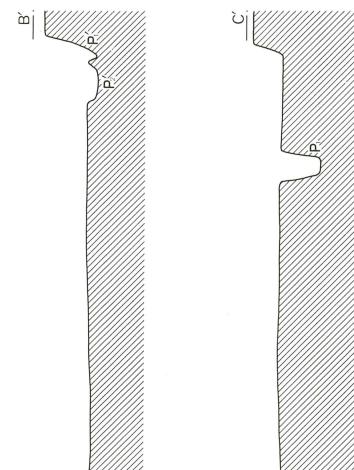
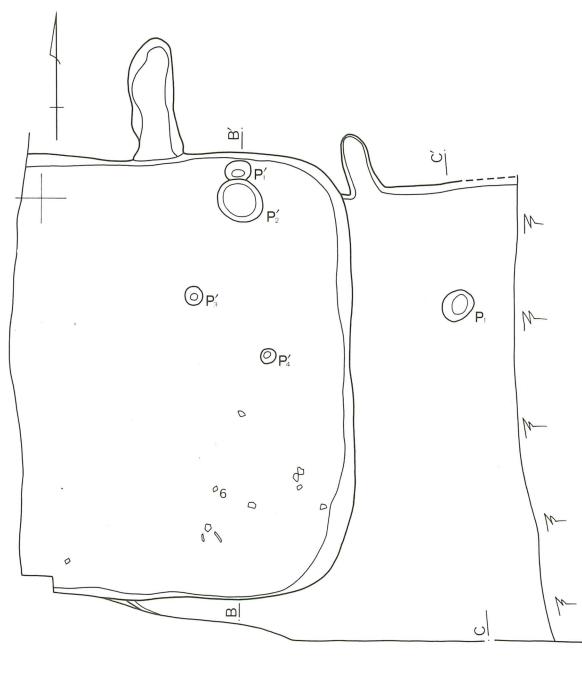


第243図 表採遺物



第1号住居跡

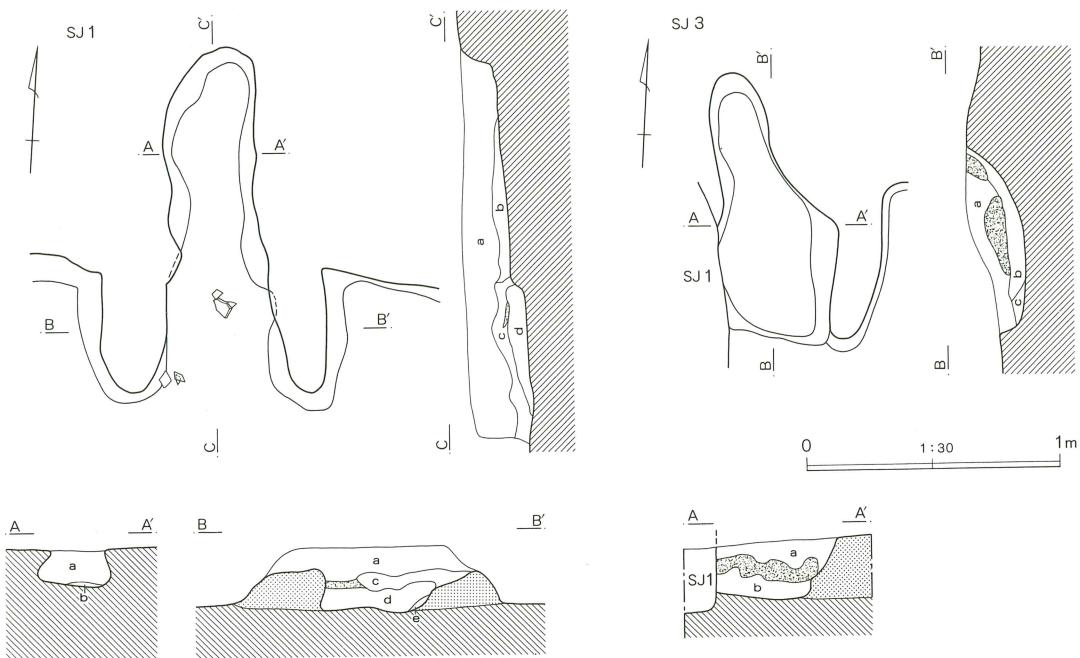
- 1 茶褐色土層 しまり・粘性ともにあり、3 mm大の焼土粒子と炭化物を多く含む。3層よりも砂質が強い。
- 2 黒褐色土層 しまり・粘性ともにあり、2~4 mm大の焼土粒子と炭化物をたいへん多く含む。
- 3 茶褐色土層 しまり・粘性ともにあり、4 mm大の焼土粒子と炭化物を1層よりも多く含む。
- 4 暗褐色土層 しまり弱く、粘性あり。炭化物・焼土をわずかに含む。
- 第3号住居跡
- 5 茶褐色土層 1層よりも明るく、しまりもある。3 mm大の焼土粒子をわずかに含む。
- 6 茶褐色土層 1層よりも明るく、3 mm大の砂質粘土粒子をたいへん多く含む。
- 7 茶褐色土層 1層よりも明るく、炭化物をわずかに含む。



0 1:60 2 m

第244図 第1・3号住居跡(1) L=6.60m

## 根 切



第1号住居跡カマド

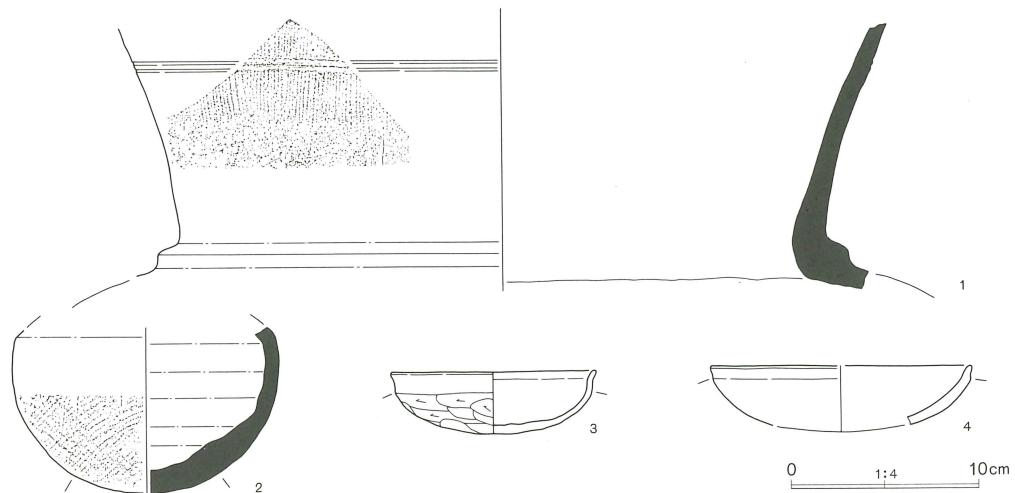
- a 茶褐色土層 しまり・粘性ともにあり。5mm大の焼土粒子と炭化物をたいへん多く含む。
- b 黒灰色土層 eよりも白い。しまり・粘性ともにあり。5mm大の焼土粒子をわずかに含む。
- c 黄褐色土層 カマドそでの土に近似している。5~10mm大の焼土粒子と炭化物をやや多く含む。
- d 黑灰色土層 しまり弱く、粘性あり。5mm大の焼土粒子をわずかに含む。
- e 黑灰色土層 しまりはたいへんよく、粘性あり。d層よりもローム粒子を多く含む。

第245図 第1号住居跡(2) L=6.60m

第3号住居跡カマド

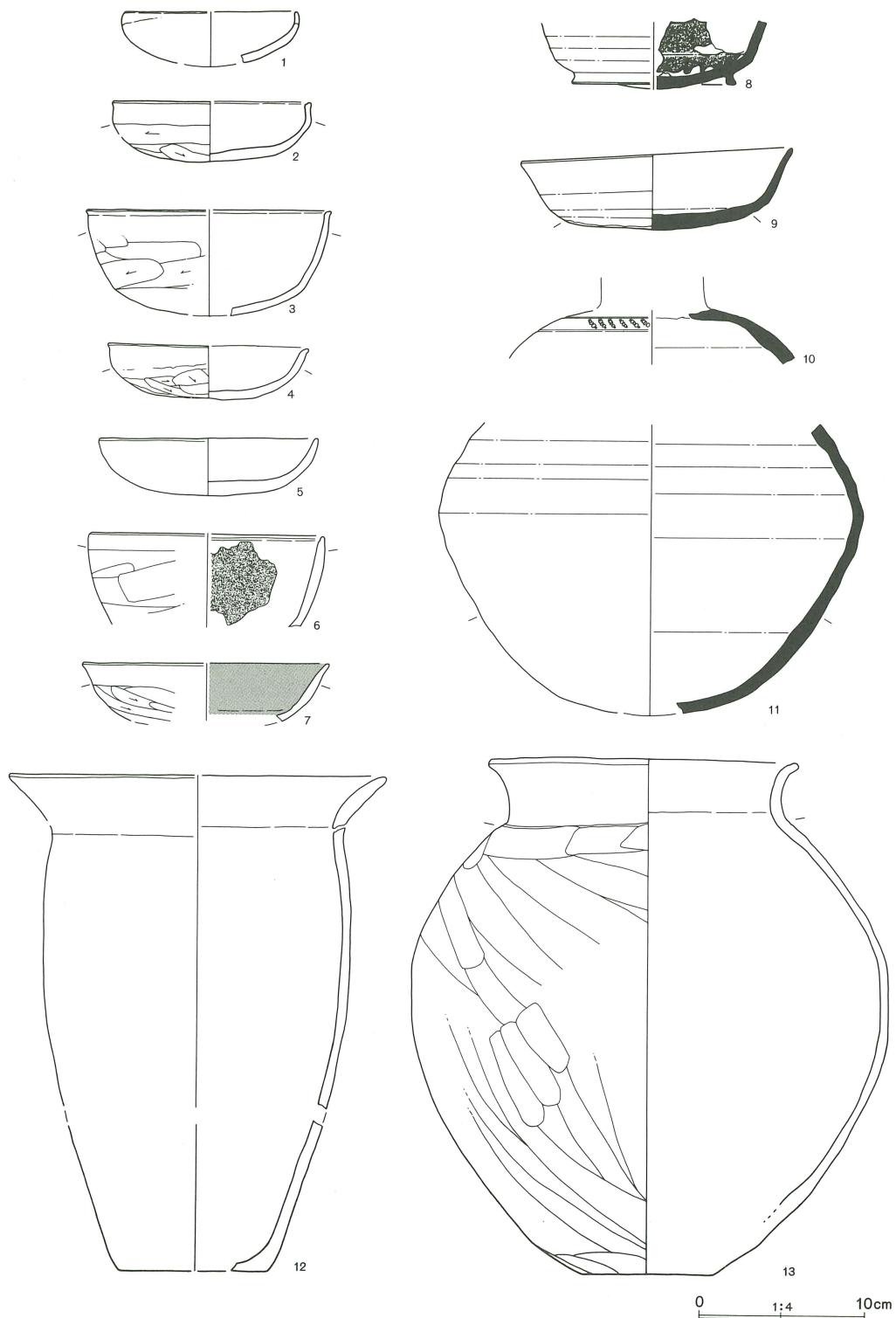
- a 黄褐色土層 粘質土で、焼土・炭化物を多く含む。
- b 暗灰色土層 しまり・粘性ともにある。灰を主体とし、炭化物を多く含む。
- c 暗灰色土層 焼土とb層が混じったような粘質土。

第246図 第3号住居跡(2) L=6.60m



第247図 第3号住居跡出土遺物

根 切



第 248 図 第 1 号住居跡出土遺物

## 第2号住居跡（第249～251図）

96-108・96-109グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。

住居の西壁は調査区域外にかかり、東壁は鴨川の氾濫により削り取られており、住居の全容はつかめなかった。

発掘範囲内の所見から住居の平面形は正方形に近いものと推定され、主軸方向はN-2°-Wである。規模は南北長が4.80mで、深さは55cmである。壁溝はカマド付近を除き全周するものと思われ、幅は18cmで、深さは15cmである。

覆土はおおまかには2層に分かれ、自然堆積と思われる。

床面では、ピットが計3本検出されたが、このうち柱穴になると思われるものはP1・P2の2つである。P1は径23cmで、深さは36cm、P2は径28cmで、深さは30cm、P3は径44cmで、深さは14cmである。

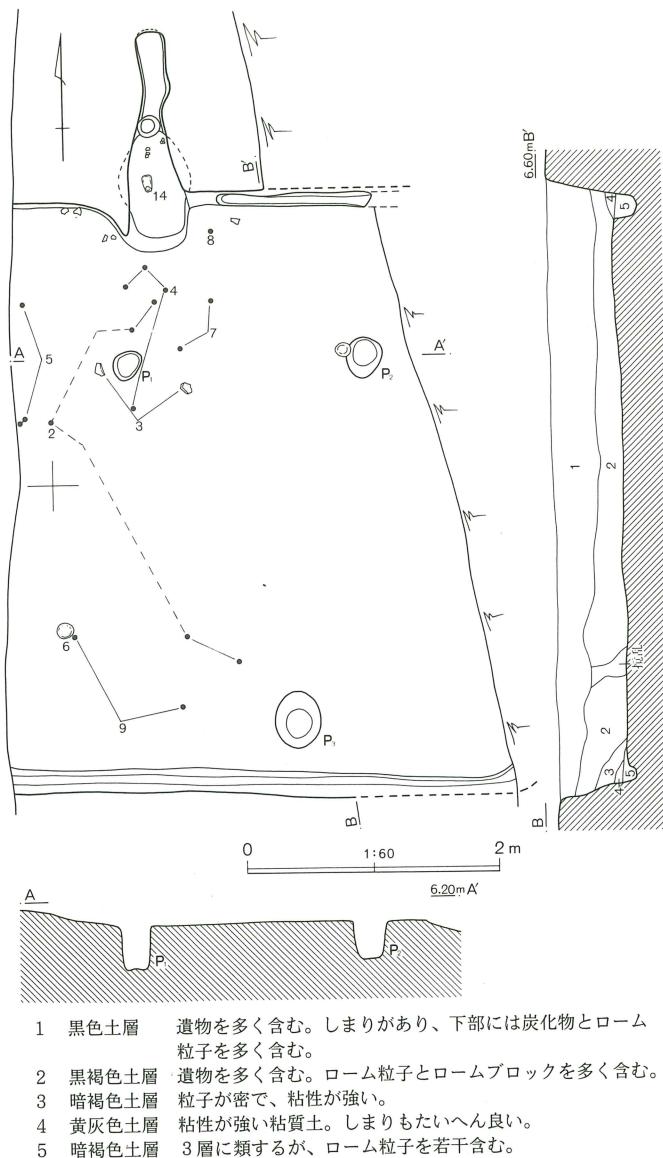
一方、土壤は検出されなかつた。

貼り床は掘り方の凹凸を埋めるように全体で確認された。

カマドは北壁に設けられ、長さ1.75m、焚口幅48cmである。煙道部と燃焼部はわずかに段差がある。煙道部と燃焼部とも側面は被熱により赤褐色に硬化していた。カマド袖は地山に近似した粘土質の土を貼りつけたもので、右袖はほとんど残っていなかった。

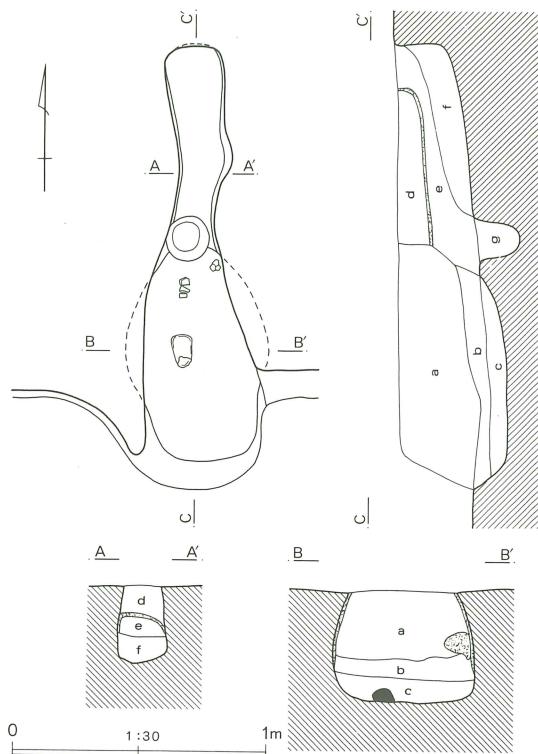
遺物は比較的多く出土し、大半は覆土中（1層）から出土したものである。その7割近くが土師器甕・壺の破片であった。

図化できた遺物は計14点あった。出土位置は1～5・7～12が床面近く、6が覆土中、13が床面下、14がカマドである。



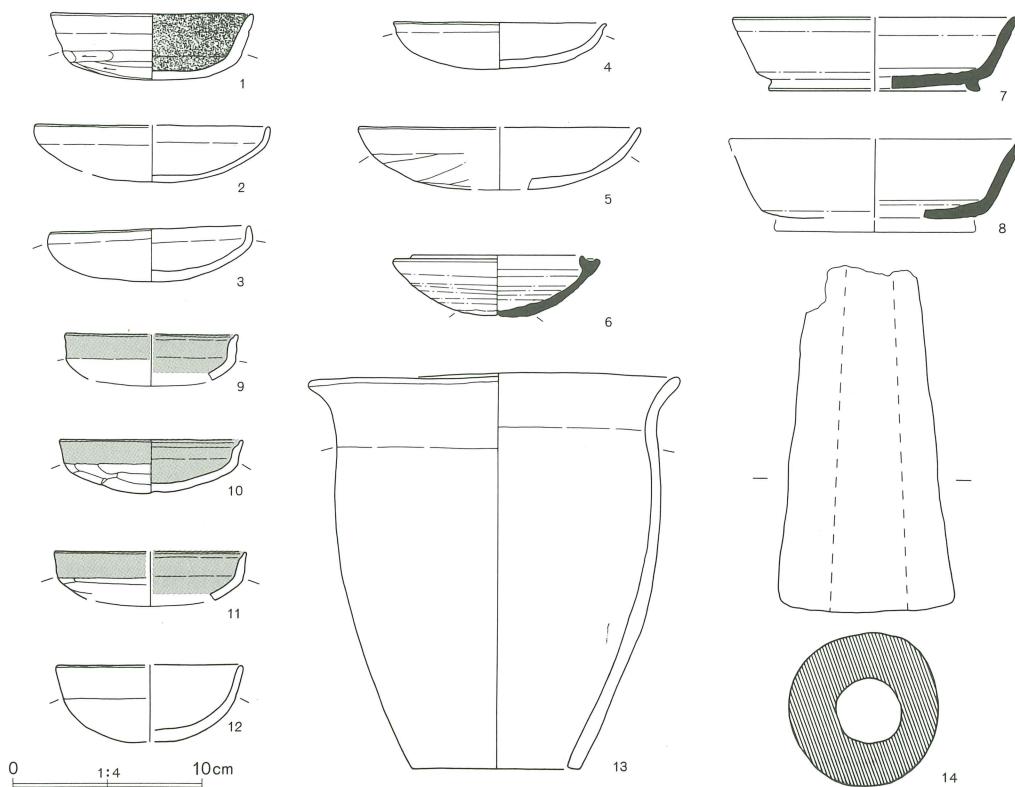
第249図 第2号住居跡(1)

根 切

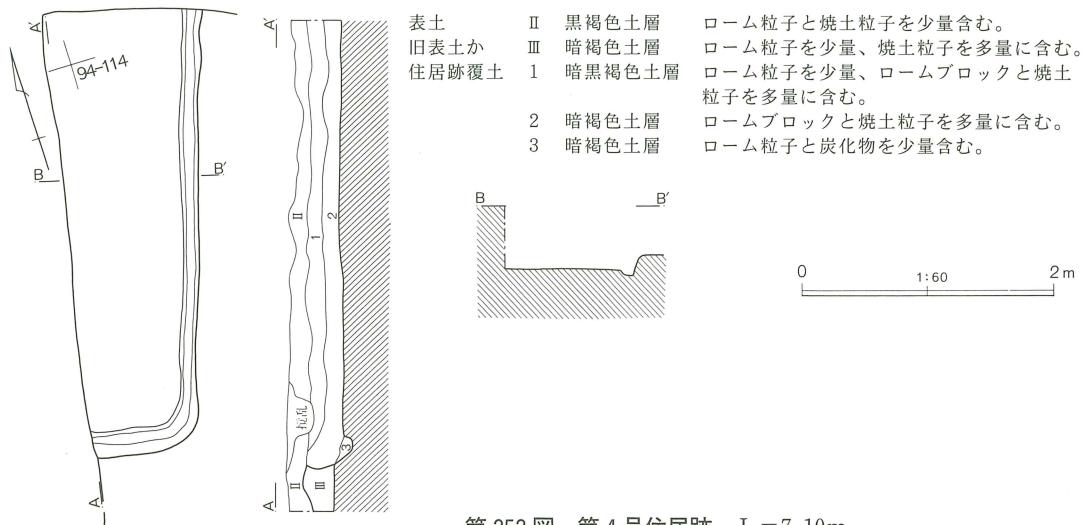


- a 暗茶褐色土層 しまりがあり、茶色土にローム粒子と焼土粒子を多量に含む。
- b 暗茶褐色土層 黄色土がブロック状に混入する。焼土粒子を多量に含む。(天井部か)
- c 黒色土層 炭化物と灰を主体とし、しまりやや悪い。
- d 黄色土層 下部は赤褐色を呈しており、煙道部の天井を形成する土と思われる。
- e 黒色土層 粒子は密で、粘性もある。焼土粒子も若干含む。
- f 黒褐色土層 粘性があり、若干のローム粒子と焼土粒子を含む。
- g 黒色土層 c層とほぼ同じ。

第250図 第2号住居跡(2) L=6.60m



第251図 第2号住居跡出土遺物(1)



第 252 図 第 4 号住居跡 L = 7.10m

## 第 3 号住居跡 (第 244・246・247 図)

95-110・96-110 グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第 1 号住居跡よりも古い。住居の西側半分を第 1 号住居跡に破壊され、さらに東壁は鴨川の氾濫により削り取られており、住居の全容はつかめなかった。

よって、住居の平面形や規模は不明である。主軸方向は N-6°-W である。

壁溝はカマド右脇と住居南西隅にわずかに確認できるが、全周するかはわからない。

床面では、ピットは 1 本しか検出されず、柱穴になると思われる。P 1 は径 14cm で、深さは 32cm である。一方、土壙は 1 基も検出されなかった。

貼り床は掘り方の凹凸を埋めるように全体で確認された。

カマドは北壁に設けられ、長さ 1.04m、焚口幅は推定 50cm である。煙道部は先端を欠き、残存部分も底面しか残っていなかった。カマド袖は地山に近似した粘土質の土を貼りつけたものである。

住居の遺存状態が悪かったので遺物は少なかった。図化できた遺物も計 4 点しかなかった。出土位置はいずれも床面近くからである。

## 第 4 号住居跡 (第 252 図)

93-114・94-114 グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。

住居の大半が調査区域外にかかっているため、住居の全容はつかめなかった。よって、住居の平面形や規模などは不明である。

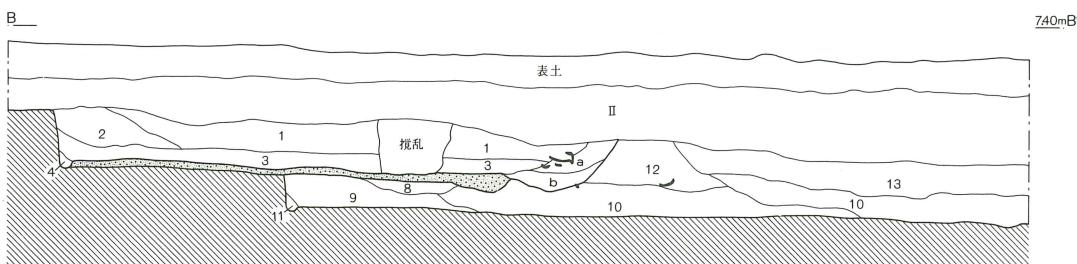
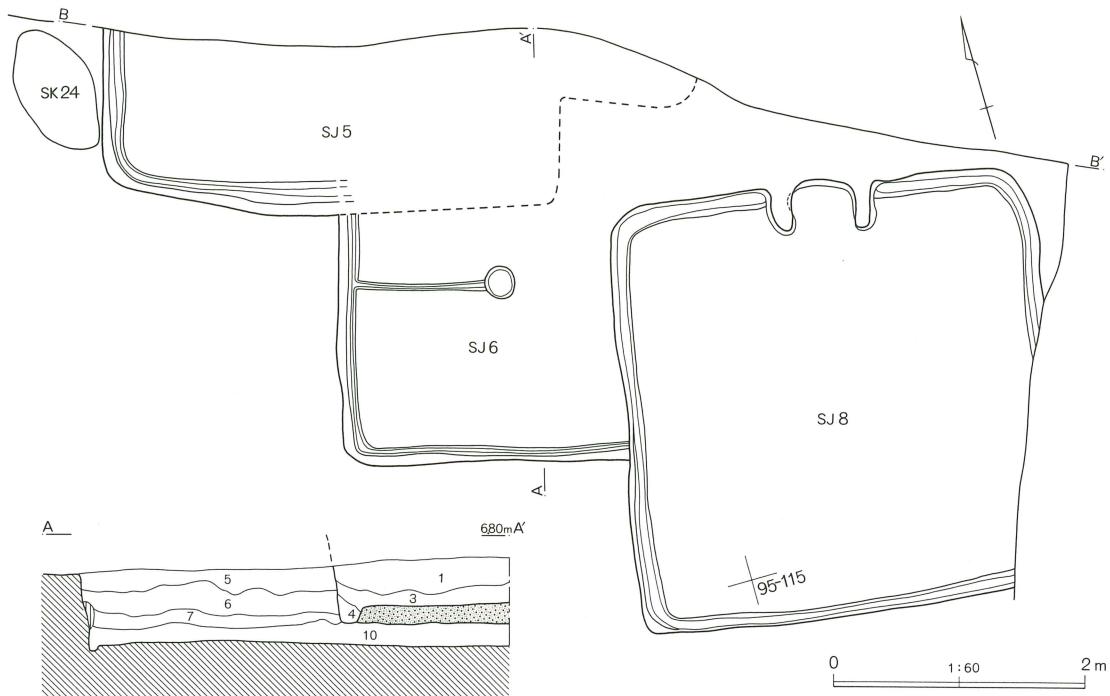
壁溝は調査区域内では全周しており、幅は 15cm で、深さは 10cm である。

覆土はおおまかにいうと 2 層に分かれ、自然堆積と思われる。

ピットや土壙は検出されなかった。

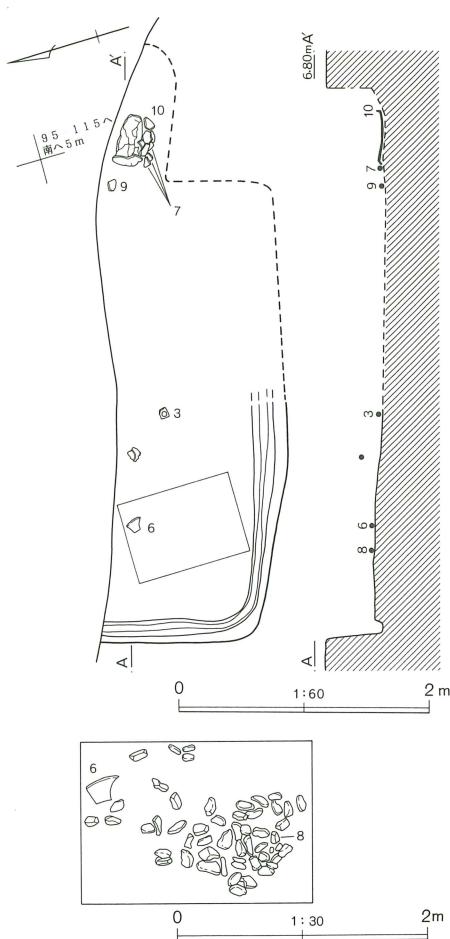
遺物はたいへん少なく、土師器壊の破片が 1 点、土師器甕の細片が数点しか出土しなかった。また、図化できる遺物もなかった。

## 根 切

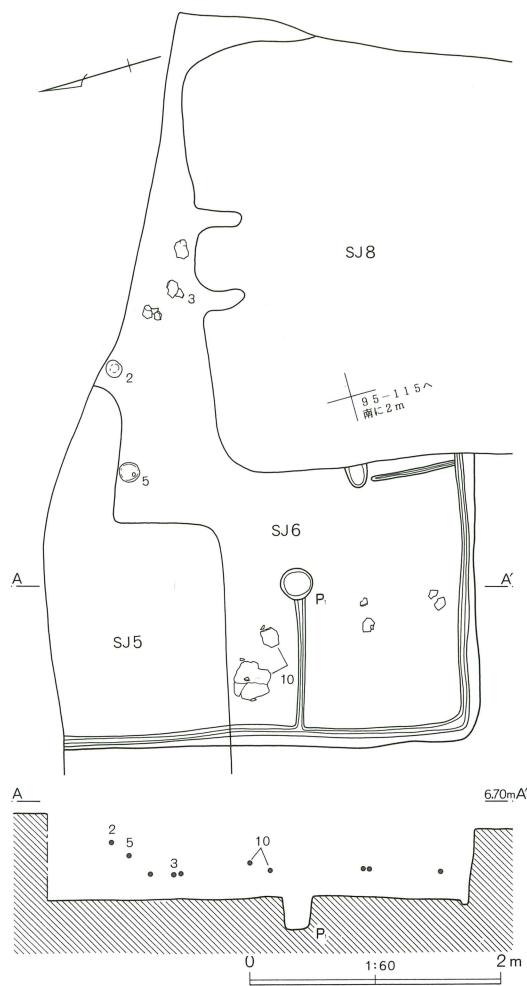


表土	ローム粒子と焼土粒子を少量含む。	第6号住居跡覆土	ローム粒子と焼土粒子を多量に含む。
II 黒褐色土層	ローム粒子と焼土粒子を少量含む。	5 暗褐色土層	ローム粒子と焼土粒子を多量に含む。
第5号住居跡覆土		6 暗褐色土層	ロームブロック（小）と焼土粒子を多量に含む。
1 暗褐色土層	ローム粒子と焼土粒子を少量含む。	7 暗黒褐色土層	ロームブロックと焼土粒子を多量に含む。
2 暗黒褐色土層	焼土ブロックを含む。	8 黒褐色土層	ローム粒子を多く、焼土粒子を少量含む。
3 暗褐色土層	焼土粒子と炭化物を少量含む。	9 黒褐色土層	ロームブロック（小）を斑に多く含む。
4 暗黒褐色土層	ローム粒子を多量に含む。	10 黒褐色土層	ロームブロックと焼土粒子を多量に含む。
第5号住居跡カマド覆土		11 黒褐色土層	ローム粒子を少量含む。
a 暗褐色土層	焼土ブロックを多量に含む。		
b 褐色土層	ローム粒子と焼土粒子を多量に含む。		
谷部覆土			
12 暗褐色土層	ローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。		
13 暗灰褐色土層	粘性強く、酸化鉄・マンガン粒子を多量に含む。		
14 底褐色土層	粘性強く、ローム粒子を少量含む。		

第253図 第5・6・8号住居跡



第254図 第5号住居跡



第255図 第6号住居跡

### 第5号住居跡 (第253・254・256図)

94—114グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第6号住居跡よりも新しい。

住居の三分の二が調査区域外にかかり、さらに第6号住居跡との重複部分を掘り抜いてしまったため、住居の全容はつかめなかった。

よって、住居の平面形は不明である。規模は破線部分で推定すると南北長が3.62mで、深さは44cmである。

壁溝は調査区域内では全周しており、幅は10cmで、深さは8cmである。

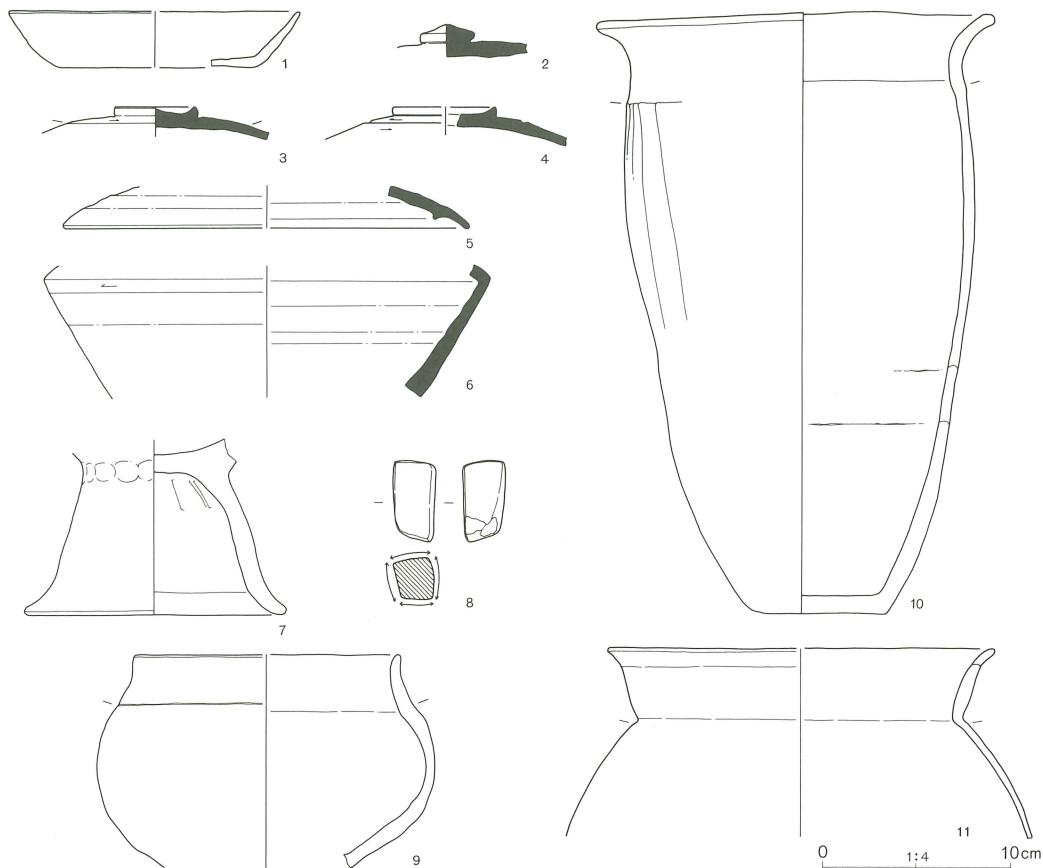
覆土はおおまかにいうと3層に分かれ、自然堆積と思われる。

ピットや土壌は検出されなかった。

貼り床は掘り方の凹凸を埋めるように全体で確認された。貼り床はカマドと推定される付近で特に厚く、約15cmぐらいある。

遺物は比較的少なかった。南東隅付近では礫がまとまって53点出土した。特に加工を行った痕跡

## 根 切



第256図 第5号住居跡出土遺物

や被熱した様子はない。礫1点は50g前後の重さのものが多かった。これらの礫は図化をしなかつたが、写真掲載した（図版38）。

図化できた遺物は計11点あった。出土位置は1・2・4・5が覆土中、3・6・8が床面直上、7・9～11がカマドである。

## 第6号住居跡（第253・255・257図）

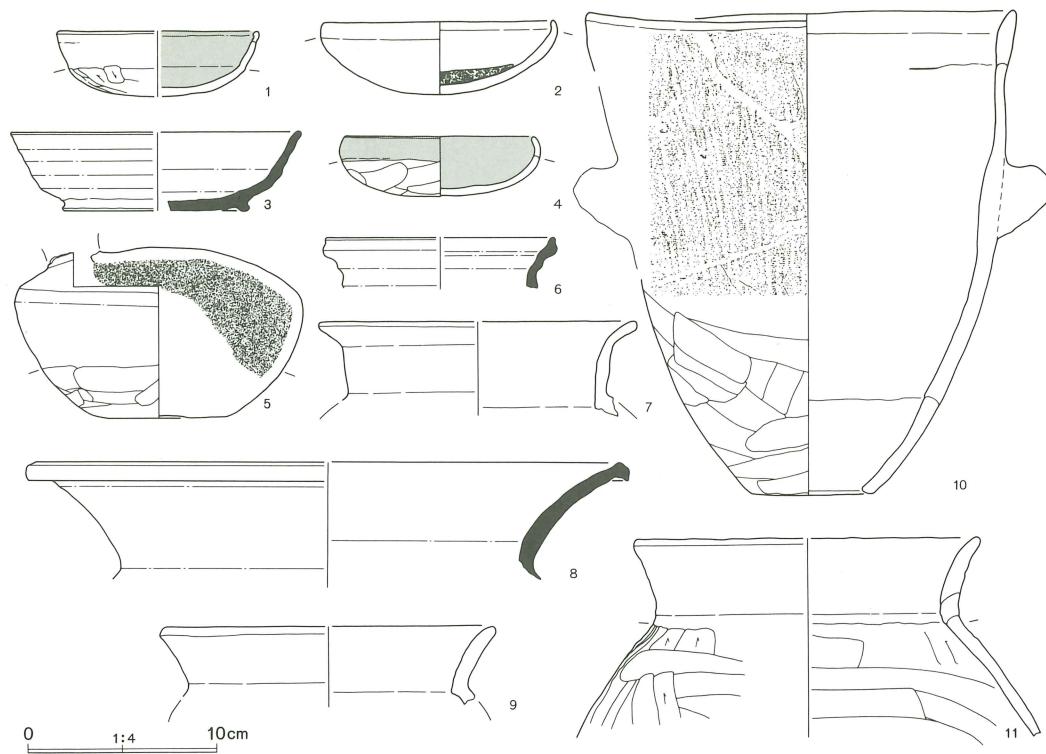
94—114・94—115グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第5号住居跡・第8号住居跡よりも古い。

住居の一部が調査区域外にかかり、さらに第8号住居跡によって住居の約四分の一を破壊されているため、住居の全容はつかめなかった。

よって、住居の平面形や規模は不明である。深さは56cmである。

壁溝は調査区域内では全周しており、幅は8cmで、深さは5cmである。また、東壁と南壁で1か所ずつ間仕切り溝のようなものが検出されている。

床面では、ピットは1本しか検出されず、柱穴になるものと思われる。P1は径24cmで、深さは



第257図 第6号住居跡出土遺物

25cmである。一方、土壙は1基も検出されなかった。

遺物は比較的多く出土したが、大半は覆土中から出土したものである。その6割近くが土師器甕・壺の破片であった。

図化できた遺物は計11点あった。すべて覆土中からの出土である。2の土師器壺の内面には漆が薄く付着していた。また、5の須恵器平瓶の中には漆がたまっていた。おそらく漆貯蔵具として使われていた瓶であろう。平瓶の口縁部は漆の出し入れをしやすくするためか、打ち欠いてある。この平瓶は口縁部以外は完存しているので、内側にどのくらい漆が入っているのかを数値で示すことはできない。指で探った感じでは容量の半分は入っているようである。

#### 第7号住居跡 (第258・259・262図)

93—115・94—115グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第9号住居跡・第18号土壙よりも新しく、第17号土壙よりも古い。

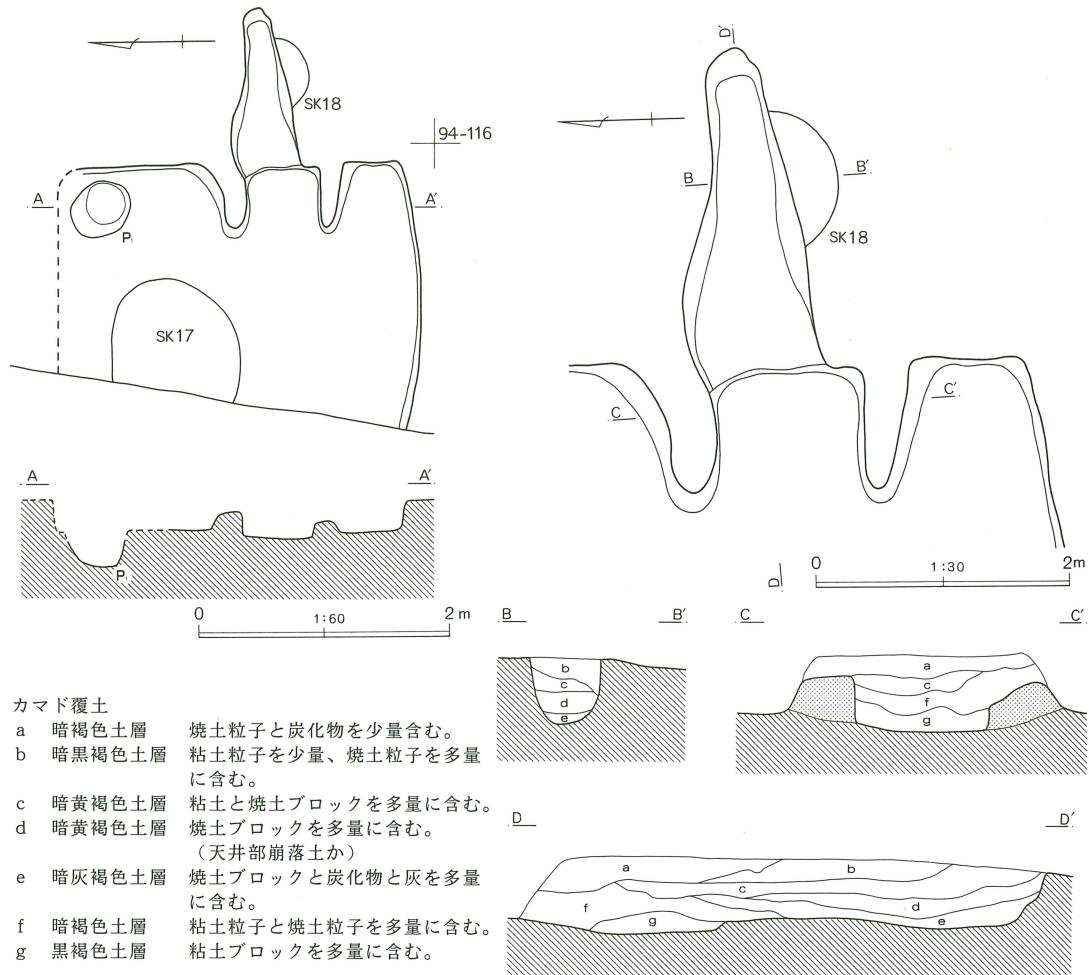
住居の約半分が調査区域外にかかっているため、住居の全容はつかめなかった。よって、住居の平面形は不明である。また、壁溝は確認されなかった。

規模は南北長が2.94mで、深さは24cmある。主軸方向はN—87°—Eである。

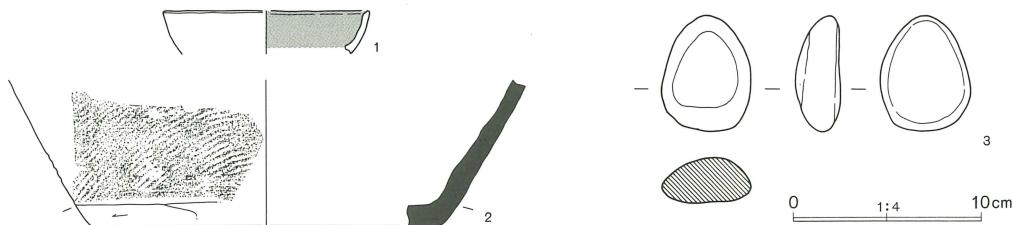
床面では、ピットは1本しか検出されなかった。P 1は径48cmで、深さは29cmである。

カマドは東壁に設けられ、長さ1.78m、焚口幅62cmである。煙道部と燃焼部はわずかに段差があ

## 根 切



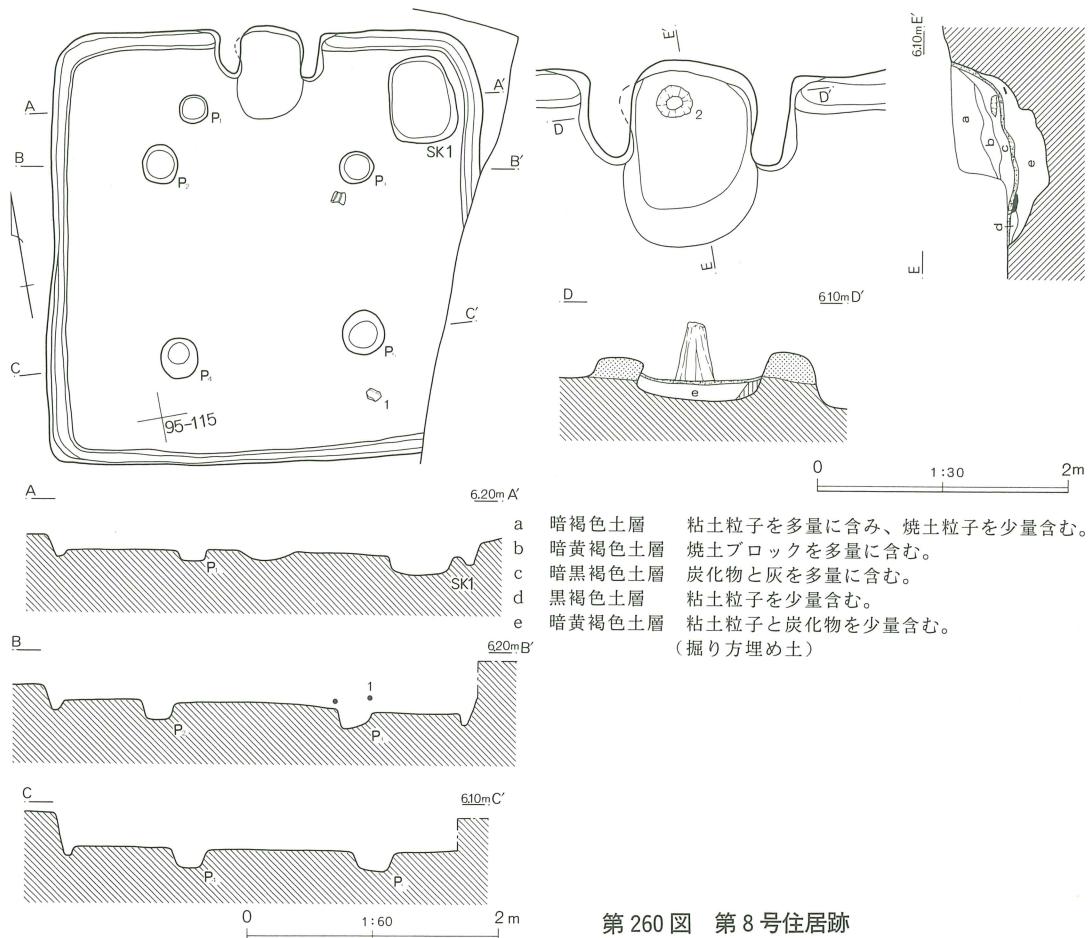
第258図 第7号住居跡 L=6.70m



第259図 第7号住居跡出土遺物

る。

遺物は比較的少なく、その7割近くが土師器甕・壺の破片であった。図化できた遺物も計3点しかなかった。出土位置は1・3がP1、2がカマドからである。3の軽石は用途は不明であるが、大宮市教育委員会が行った隣接地の発掘でも第7号住居跡から同じような大きさの軽石が1点出土している（大宮市教育委員会 1993）。



第260図 第8号住居跡

## 第8号住居跡（第260・261図）

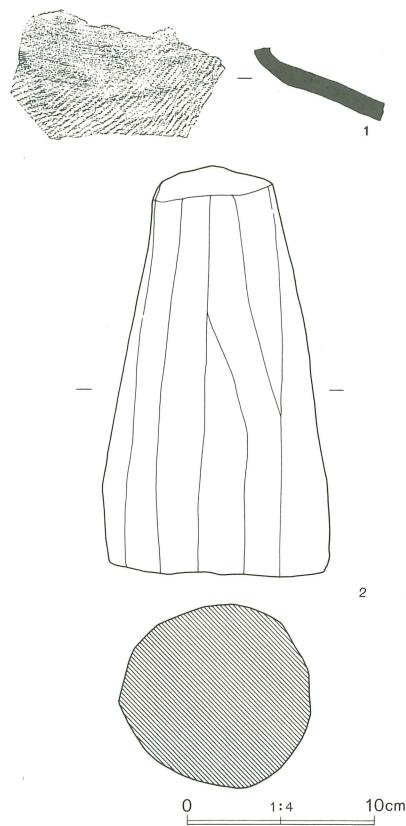
94-114・95-114グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第6号住居跡より新しい。住居の一部が調査区域外にかかっているため、住居の全容はつかめなかった。発掘範囲内の所見から住居の平面形は正方形に近いものと推定され、主軸方向はN-11°-Eである。規模は南北長が3.45m、東西長が3.44m、深さは29cmである。

壁溝はほぼ全周するものと思われ、幅は10cmで、深さは8cmである。床面では、ピットが計5本検出されたが、このうち柱穴になると思われるものはP 2・P 3・P 4・P 5の4つである。P 1は径12cmで、深さは9cm、P 2は径26cmで、深さは16cm、P 3は径26cmで、深さは15cm、P 4は径28cmで、深さは15cm、P 5は径33cmで、深さは14cmである。

また、土壤は1基検出された。SK 1は方形で、住居の北東隅にあり、長辺52cmで、深さは15cmである。

カマドは北壁に設けられ、長さ72cm、焚口幅52cmである。煙道部は残っていなかった。おそらく燃焼部と段差がある形態であろう。燃焼部の底面は被熱により赤褐色に硬化していた。カマド袖は地山に近似した粘土質の土を貼りつけたものと思われる。また、燃焼部からは支脚が立ったまま、

## 根 切



第 261 図 第 8 号住居跡出土遺物

原位置と思われる場所から出土している。

遺物はたいへん少なく、図化できた遺物も 2 点しかなかった。

出土位置は 1 が覆土中、2 がカマドである。

第 3 地点で検出された住居跡ではカマドには 2 のような支脚を用いていた例が多く、第 2 号住居跡・第 12 住居跡・第 16 号住居跡でも出土している。この他にも、第 7 号住居跡・第 9 号住居跡～第 11 号住居跡でも支脚の破片と思われる粘土塊が出土している。

### 第 9 号住居跡 (第 262～265 図)

93-114・93-115・94-115 グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第 7 号住居跡・第 13 号土壙・第 16 号土壙・第 14 号ピットより古い。

住居の約西半分が調査区域外にかかり、さらに北壁部分は第 7 号住居跡によって破壊されているため、住居の全容はつかめなかった。よって、住居の平面形は不明である。

規模は一辺の長さが唯一わかる東壁が 3.78m、深さは 22cm である。主軸方向は N-17°-E である。

壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は 16cm で、深さは 10cm である。

生活段階のピットは検出されなかつたが、土壙は 1 基検出された。P 1 は橢円形で、東壁寄りの中央にある。長径は 53cm で、深さは 20cm ある。

カマドは北壁に設けられ、長さ 80cm、焚口幅は不明である。一部分を第 13 号土壙に破壊されている。煙道部は残っていなかつた。おそらく燃焼部と段差がある形態であろう。

遺物は比較的少なく、図化できた遺物は計 5 点あった。

出土位置は 1・3・5 が覆土、2 がカマド、4 が壁溝である。

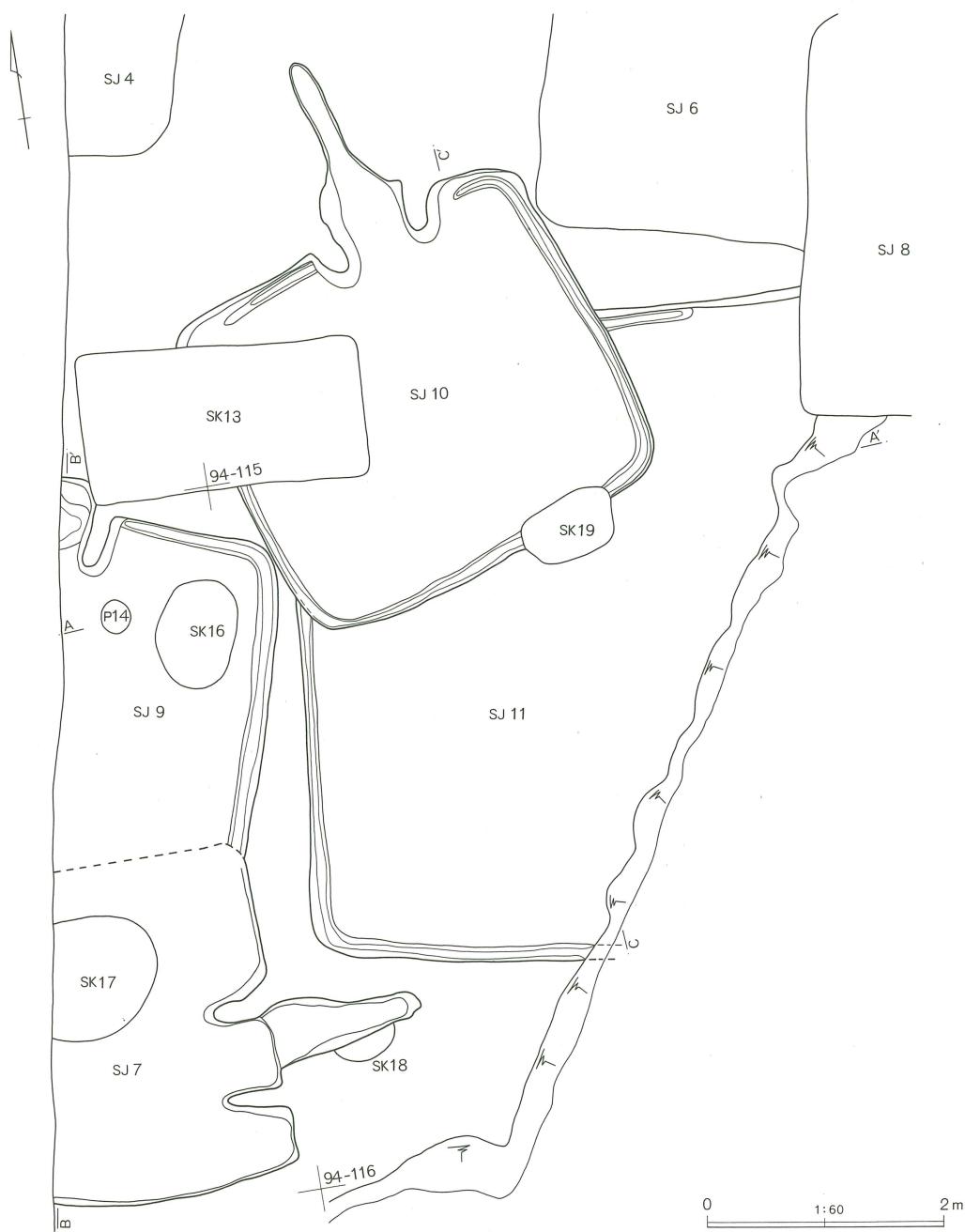
### 第 10 号住居跡 (第 262・263・266～268 図)

94-114・94-115 グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第 11 号住居跡より新しく、第 13 号土壙・第 19 号土壙より古い。

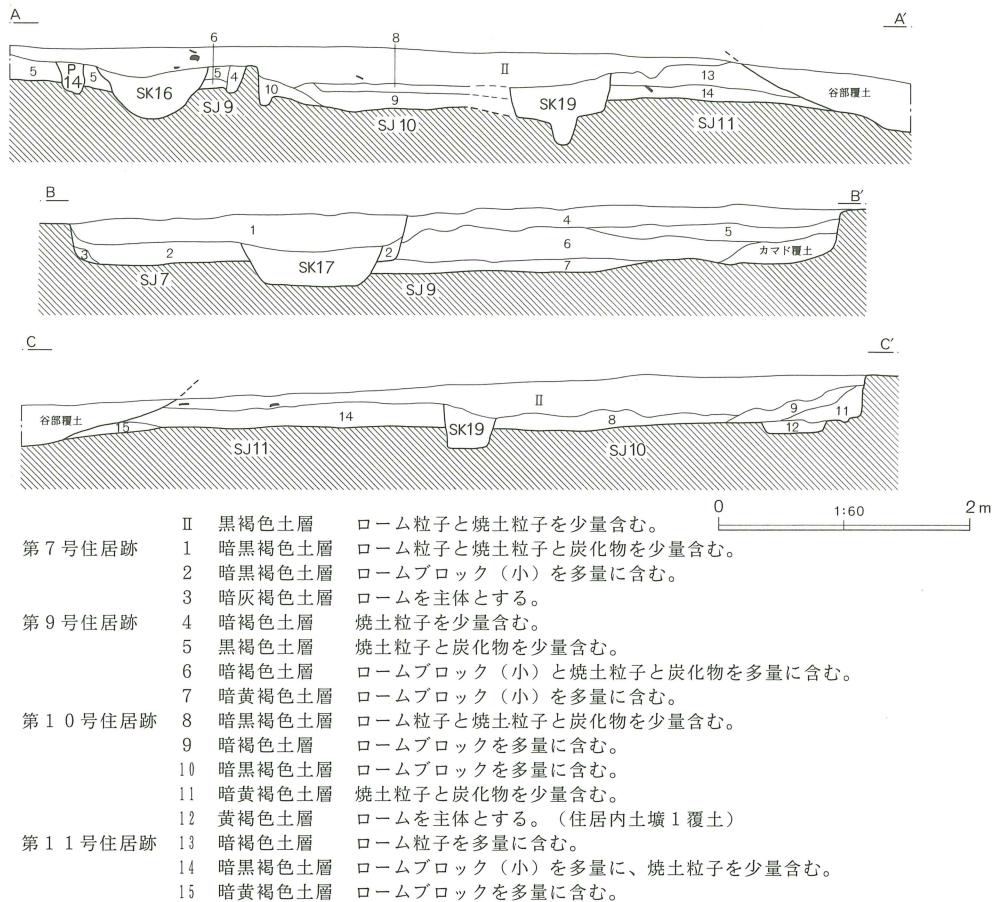
住居の平面形はほぼ正方形に近く、主軸方向は N-17°-W である。規模は南北長が 3.02m、東西長が 3.40m、深さは 40cm である。

壁溝は北東隅付近を除き全周するものと思われ、幅は 8cm で、深さは 6cm である。

生活段階のピットは計 4 本検出されたが、いずれも浅い。P 1 は径 30cm で、深さは 5cm、P 2 は



第 262 図 第 7・9~11 号住居跡(1)



第263図 第7・9~11号住居跡(2) L=6.80m

径25cmで、深さは11cm、P 3は径28cmで、深さは9cm、P 4は径26cmで、深さは13cmである。

床面では、土壌が1基検出された。SK 1は方形で、カマド右脇にあり、長辺61cmで、深さは9cmである。

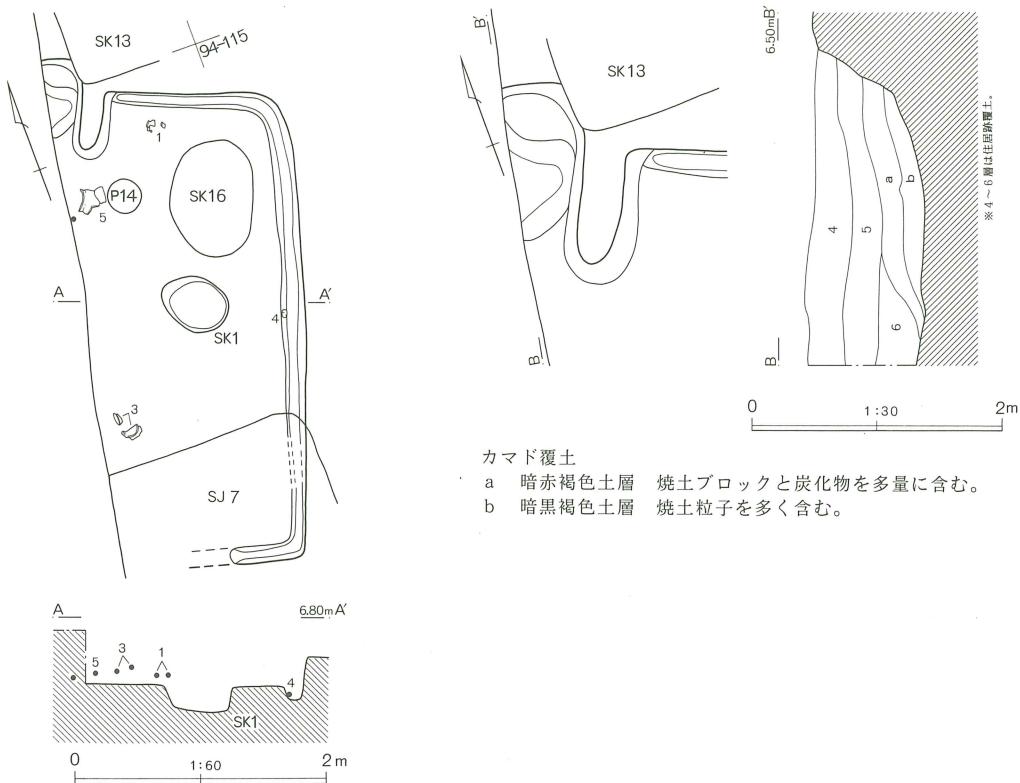
貼り床は掘り方の凹凸を埋めるように、住居南半分で顕著に認められた。床面下からは土壌が1基検出された。SK' 1は住居のほぼ中央にあり、長辺47cmで、深さは10cmである。

カマドは北壁やや右寄りに設けられ、長さ1.8m、焚口幅62cmである。煙道部の先端は残っていなかった。煙道部と燃焼部にはほとんど段差がない。

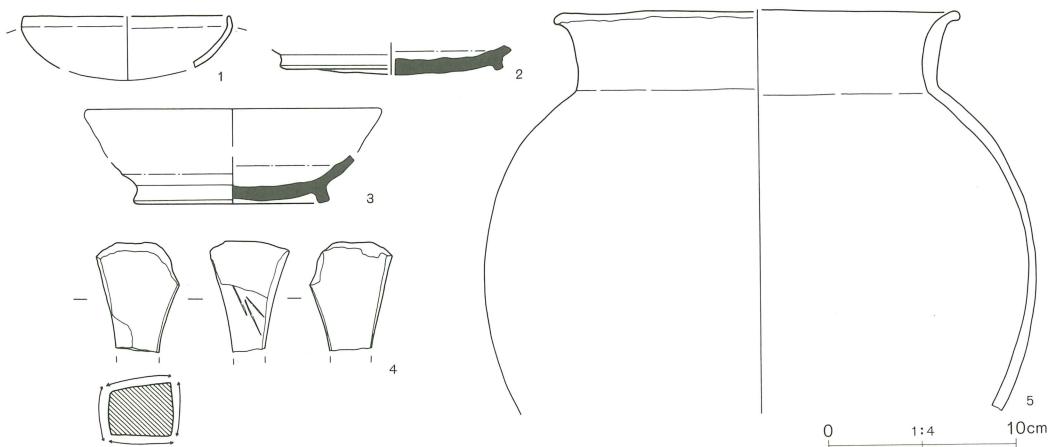
遺物はたいへん多く出土したが、大半は覆土中から出土したものである。図化できた遺物は計7点あった。出土位置は1が貼り床下、2・5・7が覆土、3が床面直上、4がSK 1である。また、6はカマドから出土した破片と貼り床下から出土した破片が接合している。

#### 第11号住居跡（第262・263・269・270図）

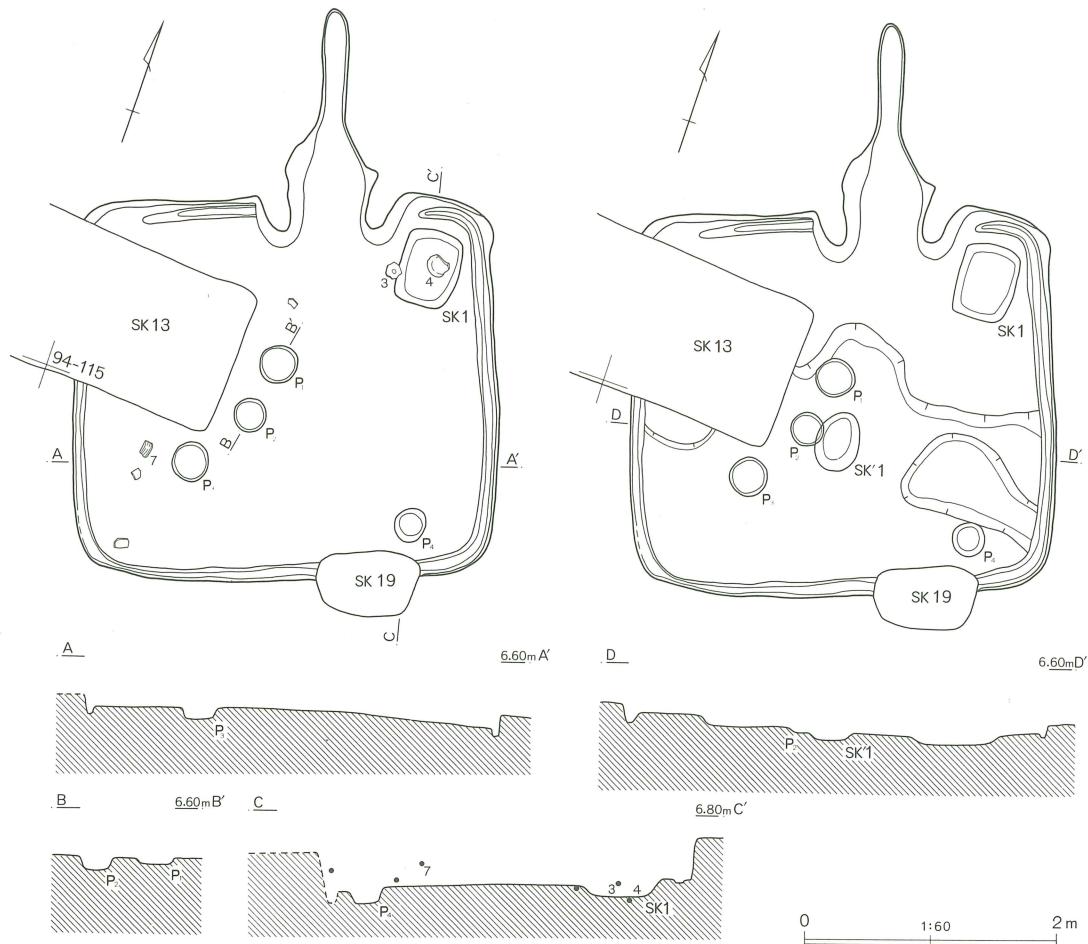
94-114・94-115グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第8号住居跡・第10号住居



第 264 図 第 9 号住居跡



第 265 図 第 9 号住居跡出土遺物



第266図 第10号住居跡(1)

跡・第19号土壤よりも古い。

住居の北西隅付近は第10号住居跡に破壊され、さらに約三分の一は鴨川の氾濫により削り取られており、住居の全容はつかめなかった。

よって、住居の平面形や規模は不明である。

壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は10cmで、深さは5cmである。

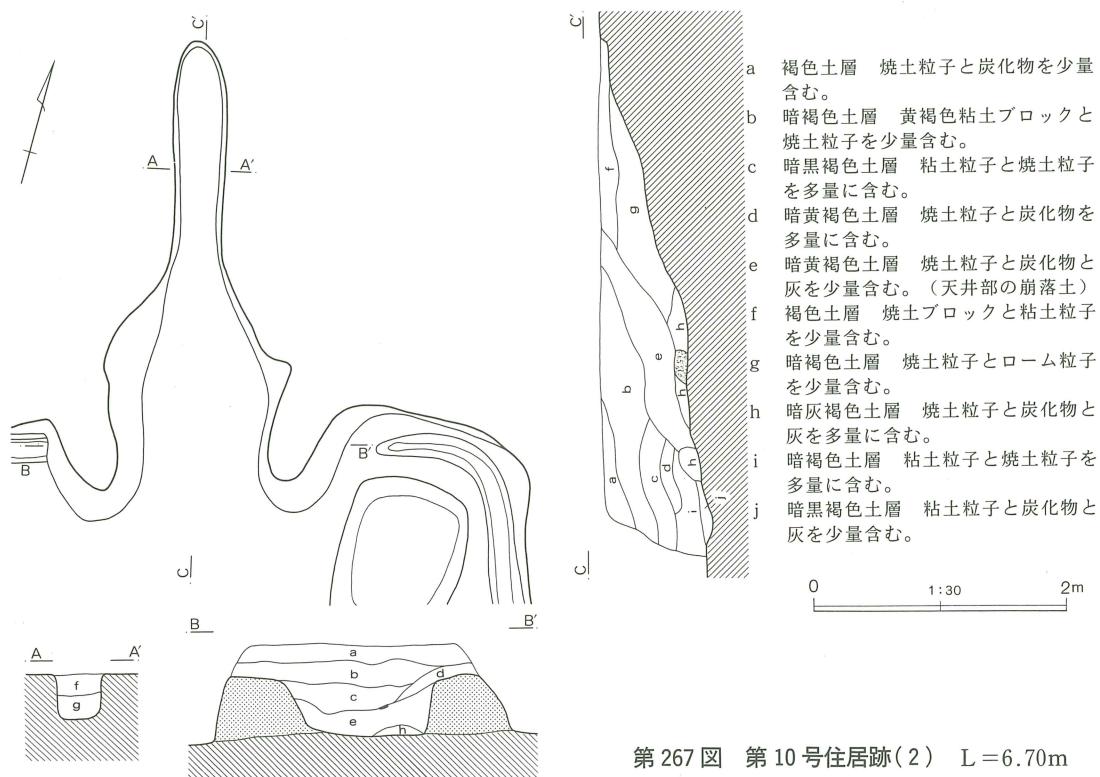
床面では、ピットが計3本検出された。P1は径23cmで、深さは19cm、P2は径27cmで、深さは12cm、P3は径35cmで、深さは24cmである。生活段階の土壤は検出されなかった。

住居の遺存状態は悪かったが、遺物はたいへん多く出土した。その約9割は土師器甕・壺の破片であった。図化できた遺物は計6点あり、出土位置はすべて床面近くからの出土である。

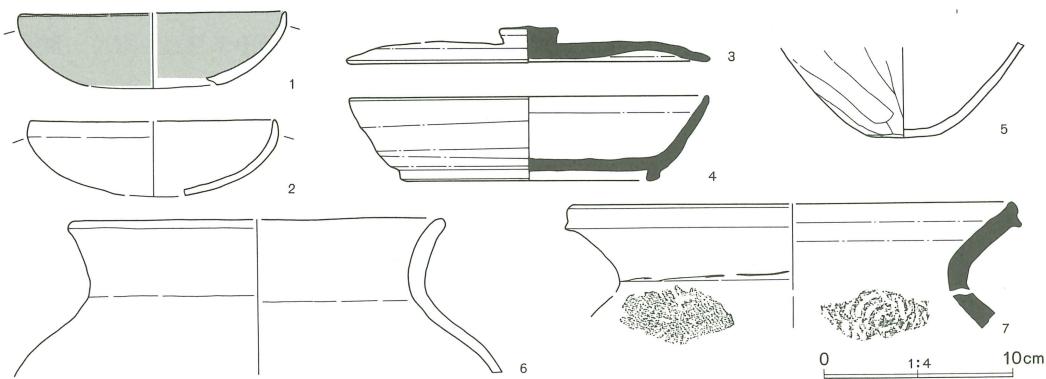
#### 第12号住居跡（第271～273図）

95-113グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。

住居の床面では筋状に何本かの噴砂が確認された。覆土中では確認できなかったので、本住居跡



第267図 第10号住居跡(2) L=6.70m



第268図 第10号住居跡出土遺物

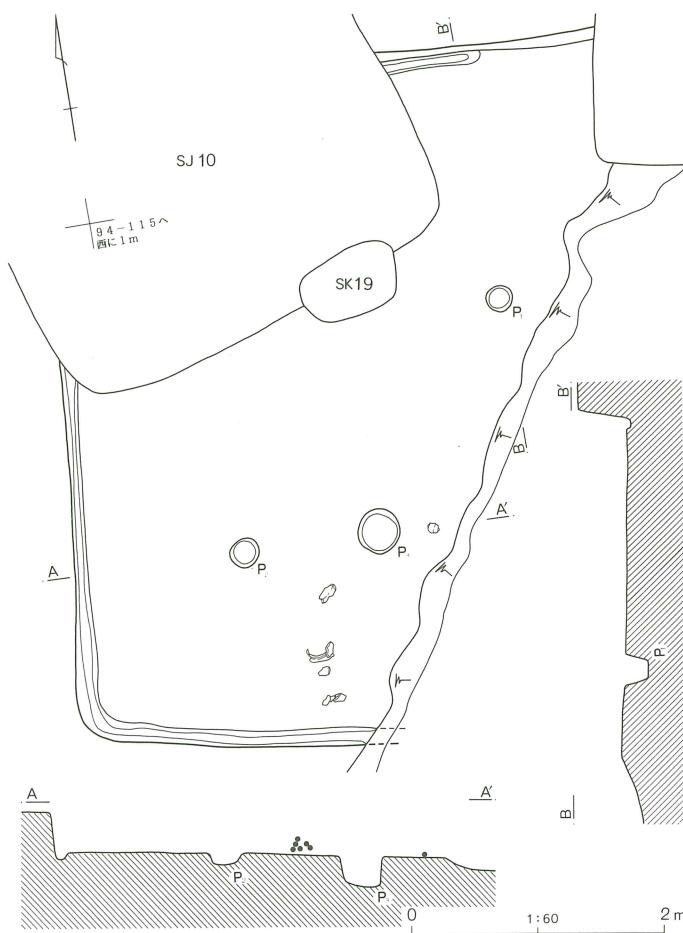
構築以前の地震によって生じたものと考えられる。

住居の南半分が調査区域外にかかっていたため、住居の全容はつかめなかった。よって、住居の規模は不明である。発掘範囲内の所見から主軸方向はN-9°-Eと推定される。

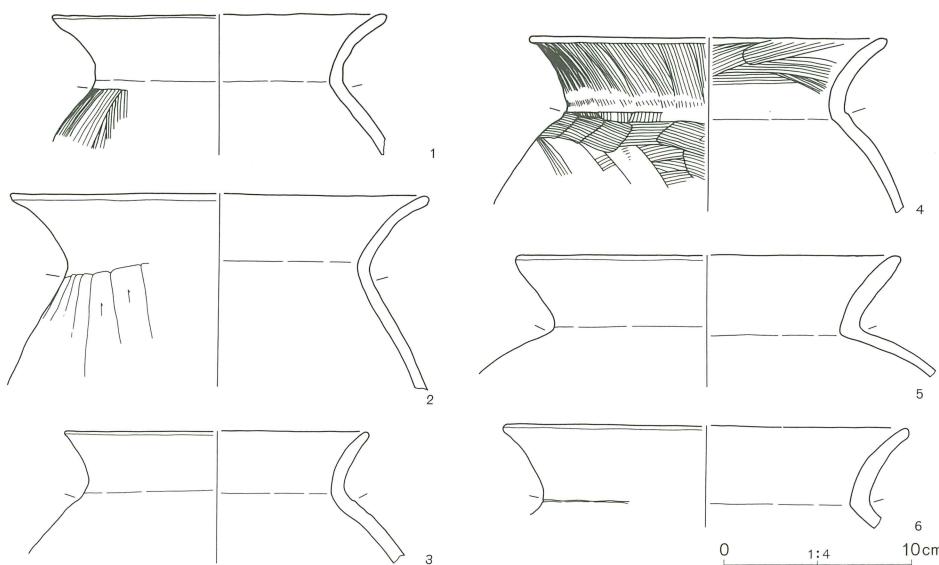
壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は17cmで、深さは10cmである。

生活段階のピットは計4本検出された。P2の土層断面では柱痕がはっきり確認できた。P1は径29cmで、深さは30cm、P2は径36cmで、深さは12cm、P3は径36cmで、深さは15cmである。

床面では、土壙が計2基検出された。SK1はカマド右脇にあり、上面は不整形で、深さは38cm



第 269 図 第 11 号住居跡 L=6.60m



第 270 図 第 11 号住居跡出土遺物

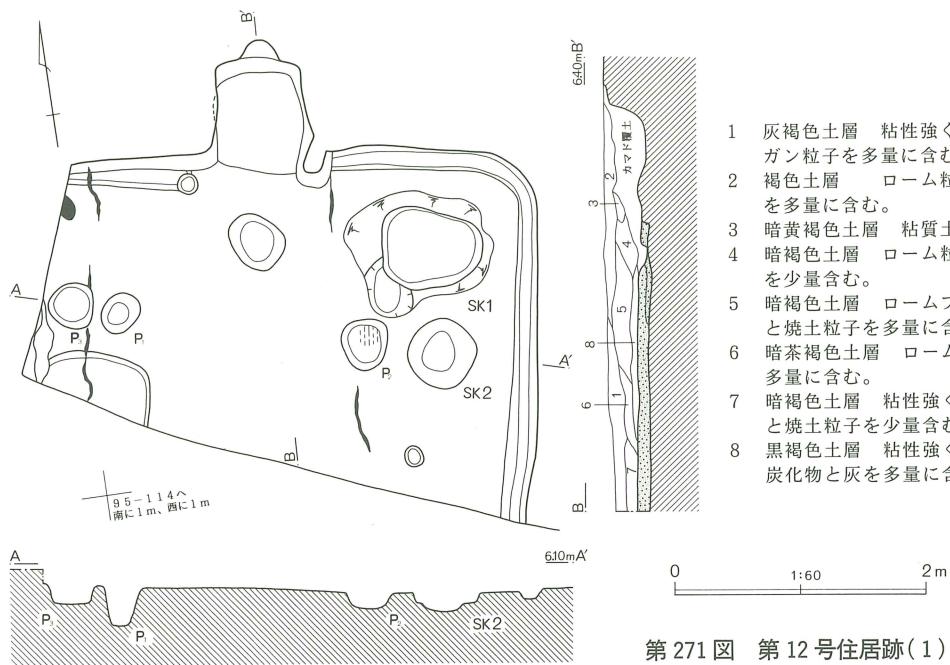
ある。SK 2 は SK 1 の南側にあり、楕円形で径 54cm、深さは 15cm ある。

カマドは北壁に設けられ、長さ 1.16m、焚口幅 62cm である。煙道部は残っていないが、おそらく燃焼部と段差のある形態であろう。カマド前面には灰落としと思われる凹みがある。

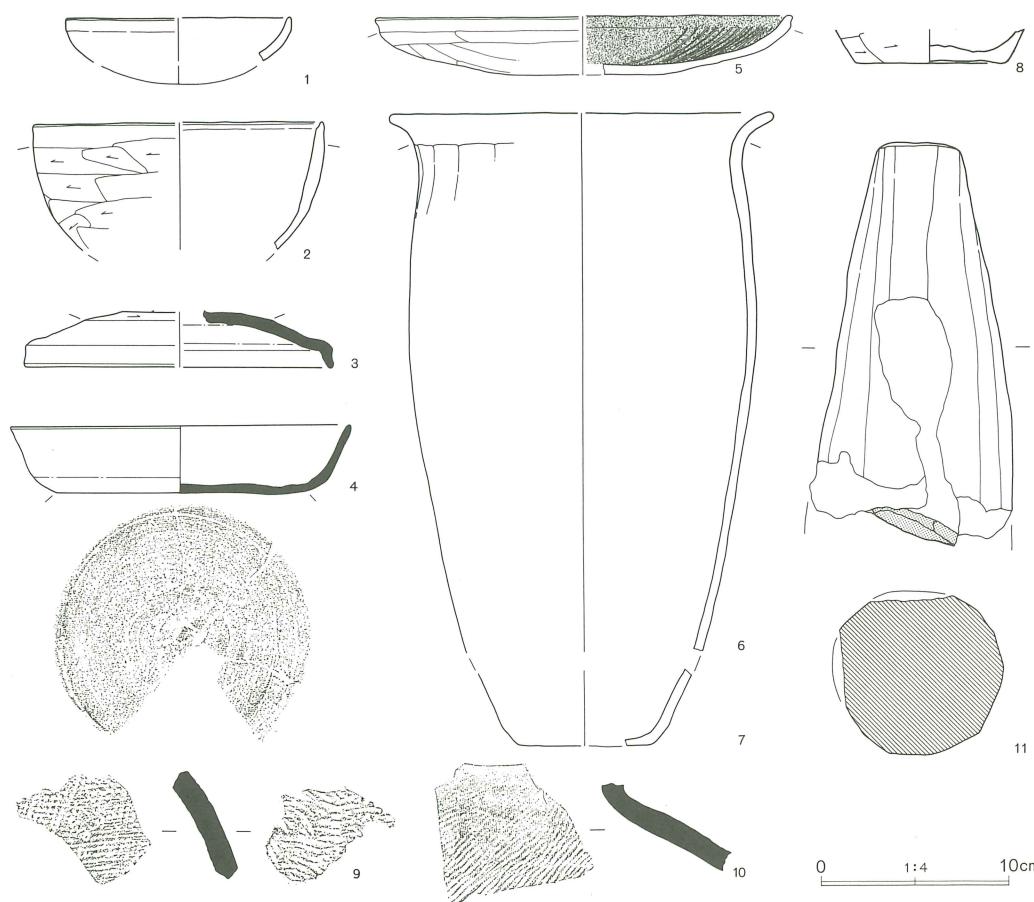
遺物はたいへん多く出土したが、大半は覆土中から出土したものである。

図化できた遺物は計 11 点あり、出土位置は 1 ~ 8 ・ 11 がカマド、9 ・ 10 が覆土である。

4 の須恵器は底部全面へラ削り調整で、口径 18cm、底径 13cm、器高 3.6cm である。焼成はあまり良くなく、酸化炎焼成にとどまっている。

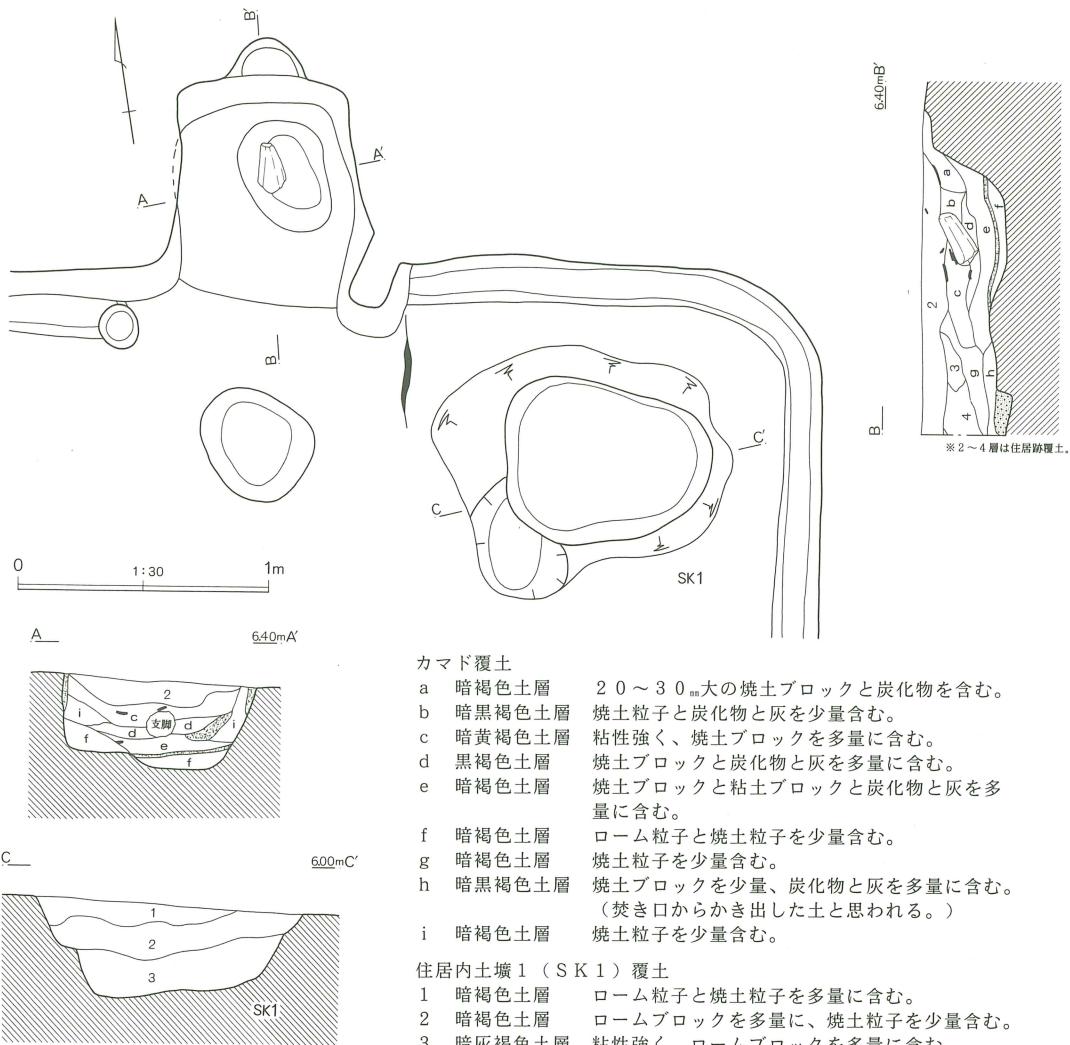


第 271 図 第 12 号住居跡(1)

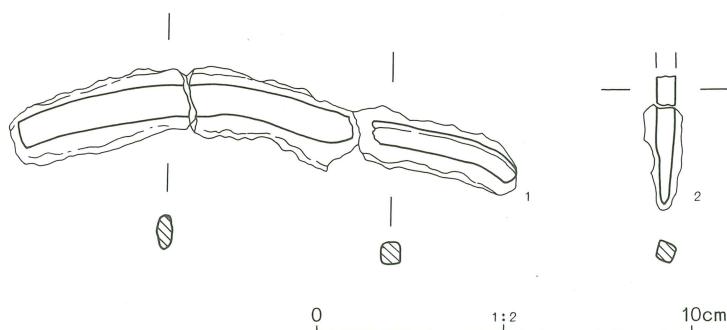


第 272 図 第 12 号住居跡出土遺物

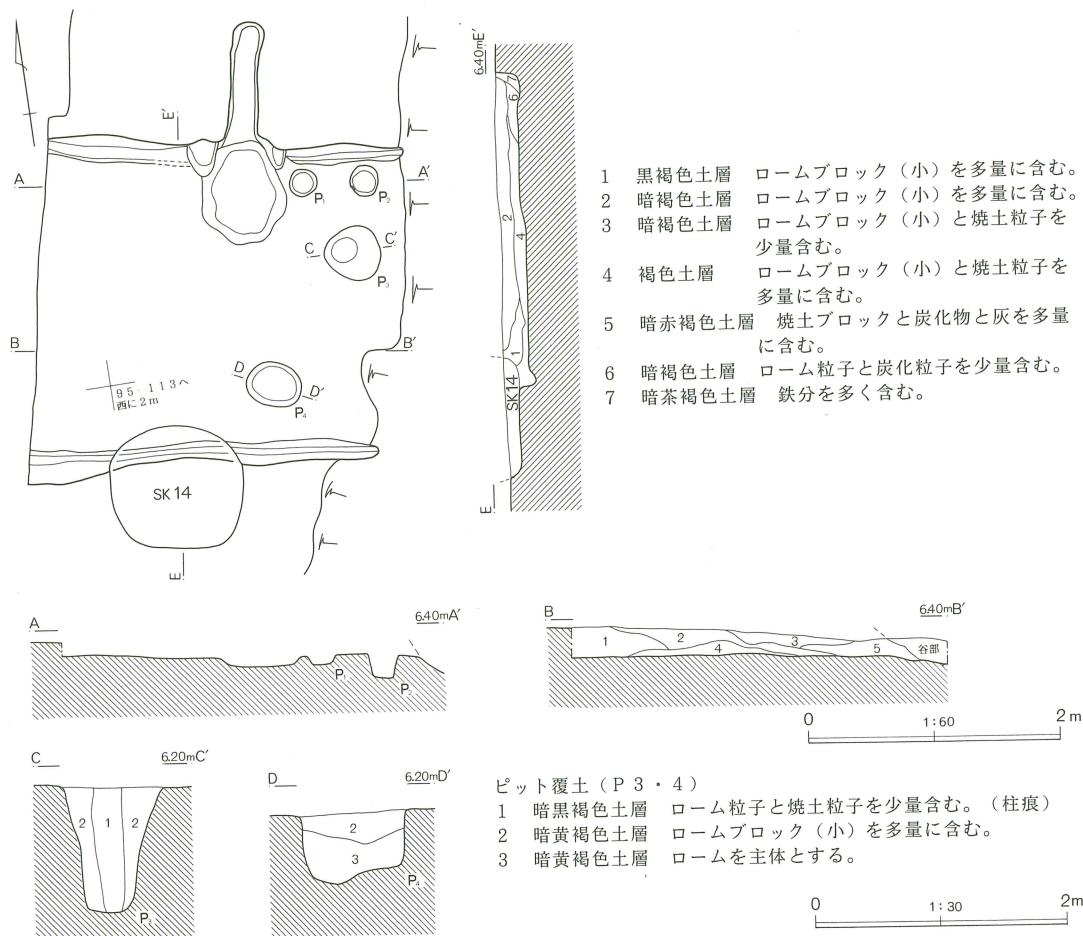
根 切



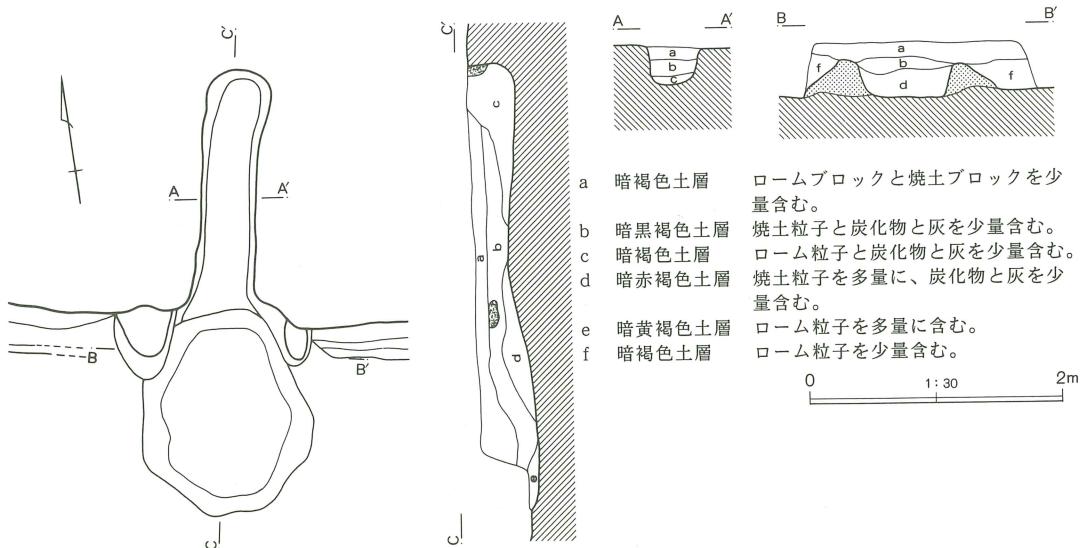
第 273 図 第 12 号住居跡 (2)



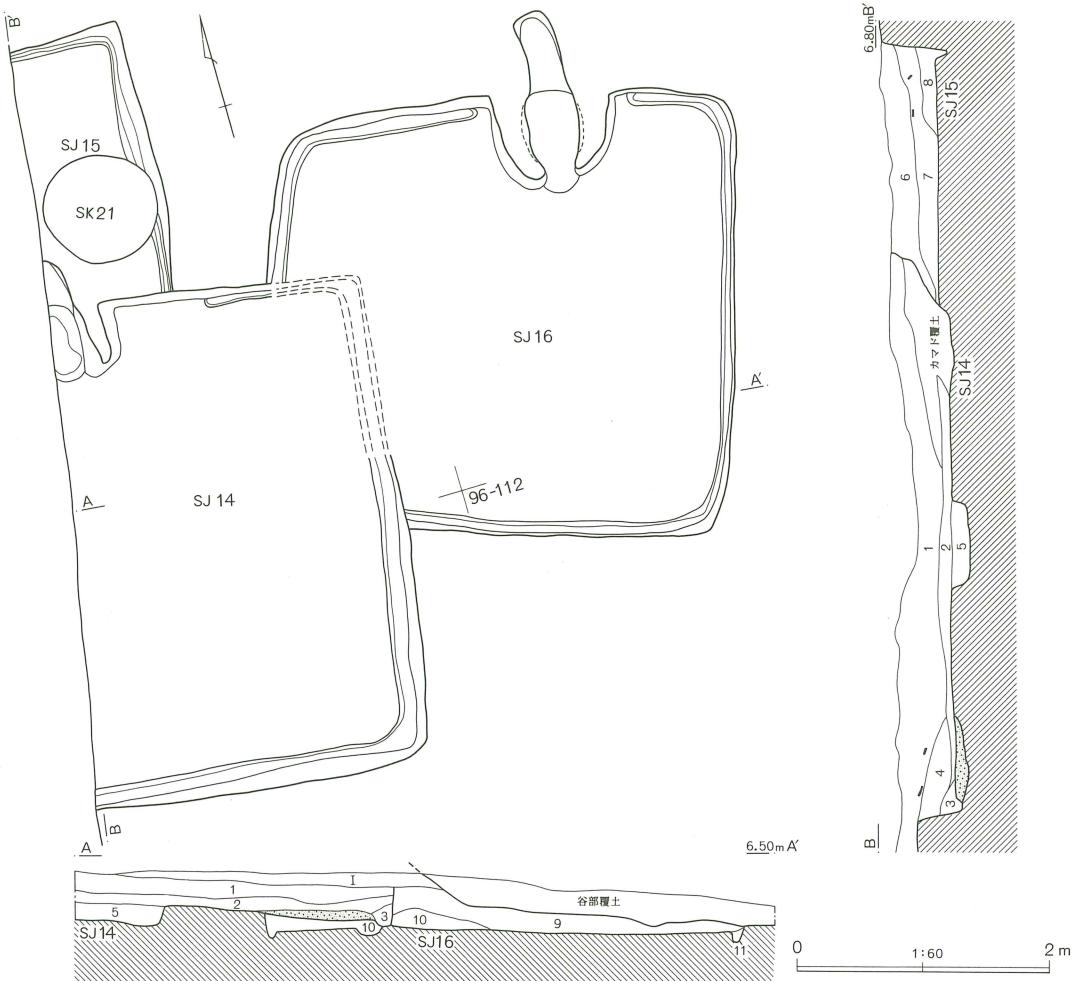
第 274 図 第 13 号住居跡出土遺物 (S=1/2)



第275図 第13号住居跡(1)



第276図 第13号住居跡(2) L=6.40m



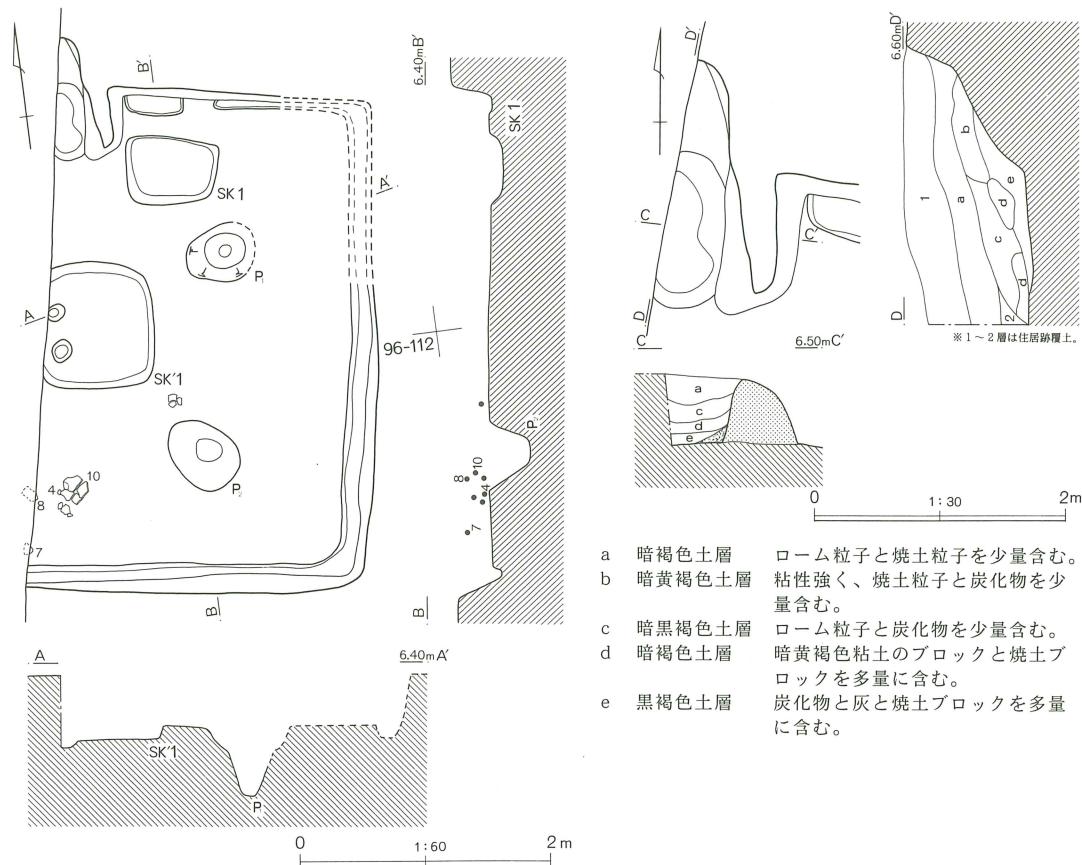
表土	I	暗褐色土層	耕作土
第14号住居跡	1	暗褐色土層	ローム粒子と焼土粒子と炭化物を少量含む。
	2	暗褐色土層	ロームブロック（小）を多量に、炭化物を少量含む。
	3	暗黒褐色土層	ローム粒子と焼土粒子を多量に含む。
	4	暗褐色土層	ロームブロック（小）を少量含む。
第15号住居跡	5	暗褐色土層	ロームブロックと炭化物を多量に含む。（床下土壤1覆土）
	6	褐色土層	ローム粒子と焼土粒子を少量含む。
	7	暗黒褐色土層	ロームブロック（小）を多量に含む。
	8	暗褐色土層	ローム粒子を少量含む。
第16号住居跡	9	暗褐色土層	ロームブロック（小）を斑に含む。（人為的に埋めた土か）
	10	黒褐色土層	ロームブロック（小）と炭化物を多量に含む。
	11	暗灰褐色土層	砂質が強い。

第277図 第14～16号住居跡

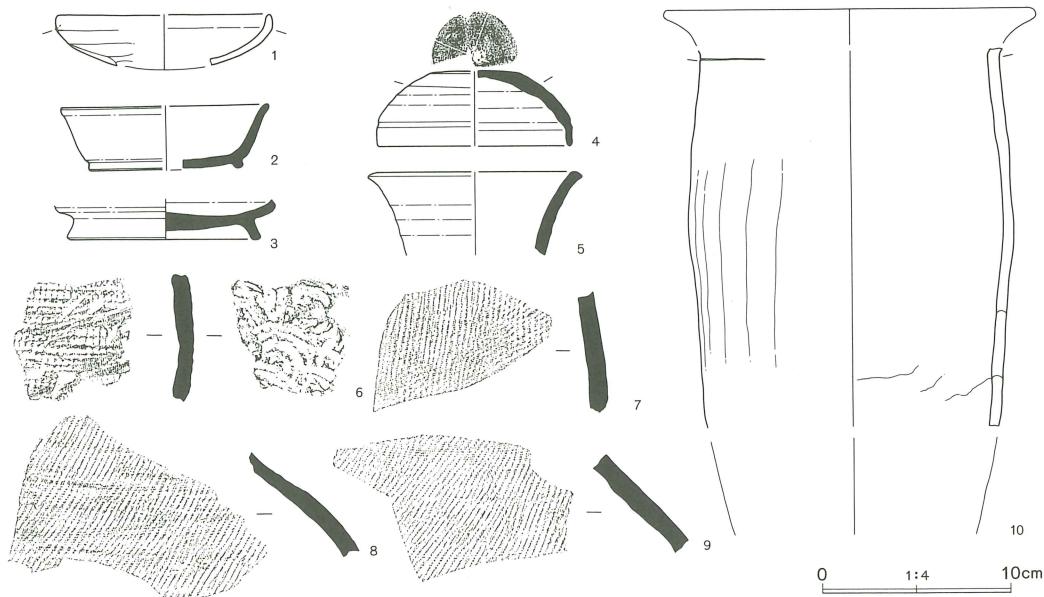
## 第13号住居跡（第274～276図）

95-112・95-113グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第14号土壤よりも古い。住居の西壁が調査区域外にかかり、さらに西壁部分は鴨川の氾濫により削り取られており、住居の全容はつかめなかった。

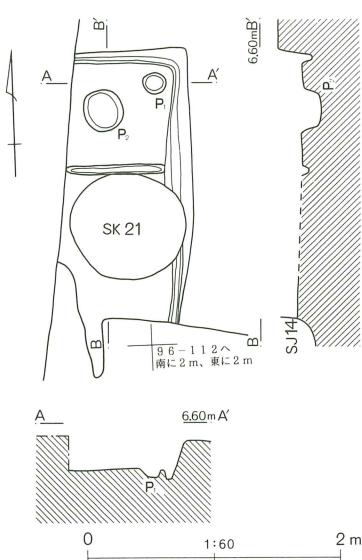
よって、住居の平面形や規模は不明である。主軸方向はN-10°-Eである。



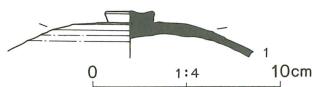
第278図 第14号住居跡



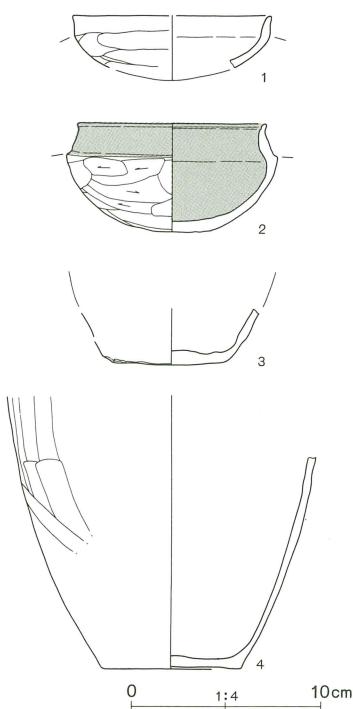
第279図 第14号住居跡出土遺物



第280図 第15号住居跡



第281図 第15号住居跡出土遺物



第282図 第16号住居跡出土遺物

壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は10cmで、深さは5cmである。

床面では、ピットが計4本検出された。P1は径22cmで、深さは7cm、P2は径22cmで、深さは20cm、P3は径40cmで、深さは50cm、P4は径42cmで、深さは27cmである。

一方、土壙は検出されなかった。

カマドは北壁に設けられ、長さ1.74m、焚口幅68cmである。煙道部と燃焼部にはほとんど段差がない。

遺物は少なく、図化できた遺物も計2点しかなかった。

1・2とも出土位置は覆土である。

#### 第14号住居跡（第277～279図）

95—111・95—112グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第15号住居跡・第16号住居跡よりも新しい。

住居の西半分が調査区域外にかかっているため、住居の全容はつかめなかった。

よって、住居の平面形は不明である。

規模は一辺の長さが唯一わかる東壁が3.98mで、深さは30cmある。主軸方向はN—10°—Eである。

壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は10cmで、深さは10cmある。

床面では、ピットが2本検出された。P1は径58cmで、深さは54cm、P2は径54cmで、深さは33cmである。

また、土壙は1基検出された。SK1は方形で、カマド右脇にあり、長辺が54cm、深さは10cmである。

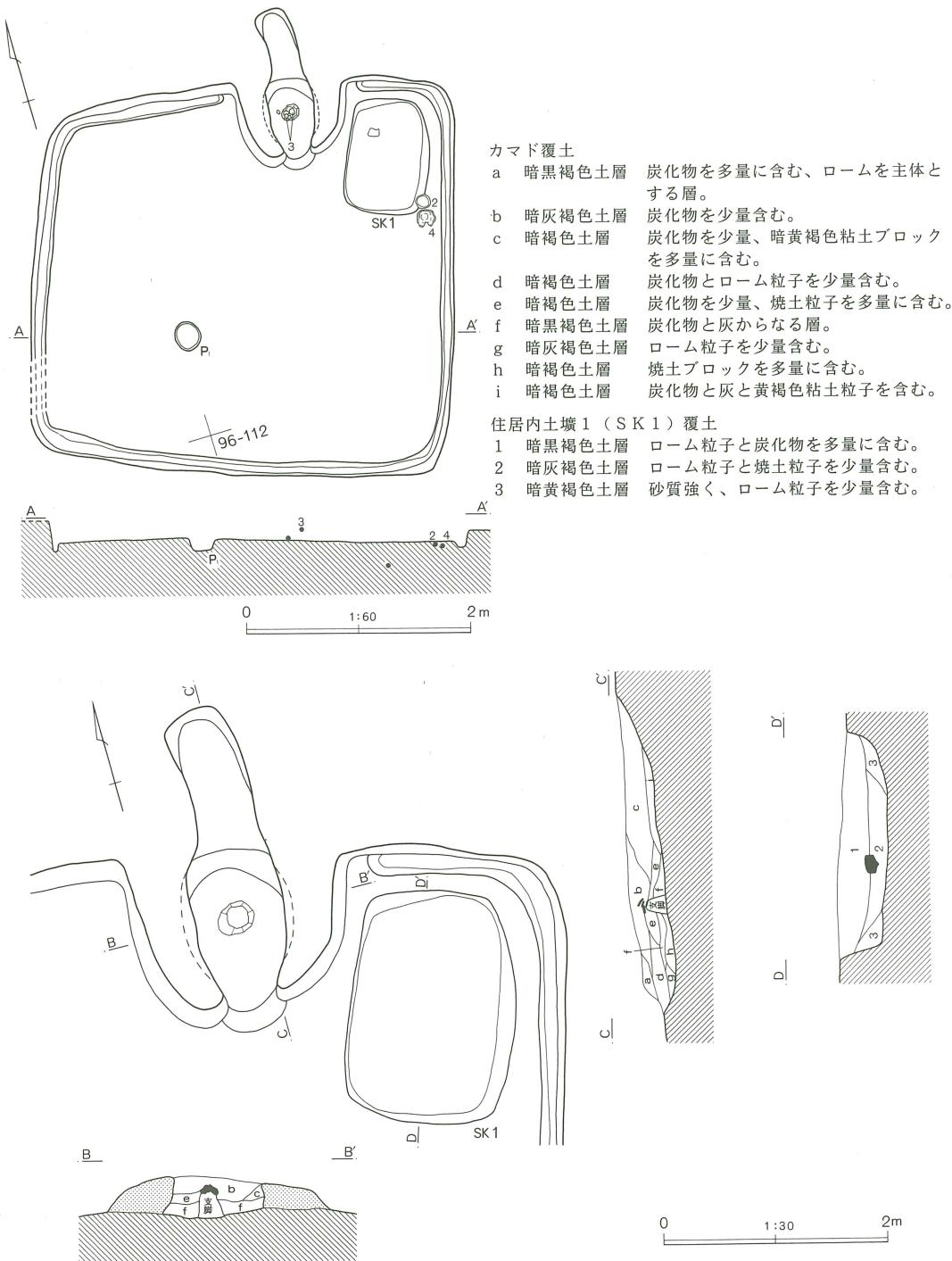
貼り床は第16号住居跡と重複する部分で顕著に認められた。

また、床面下からは土壙が1基検出された。SK'1は方形で一部調査区域外にかかっている。一辺が82cmで、深さは11cmある。

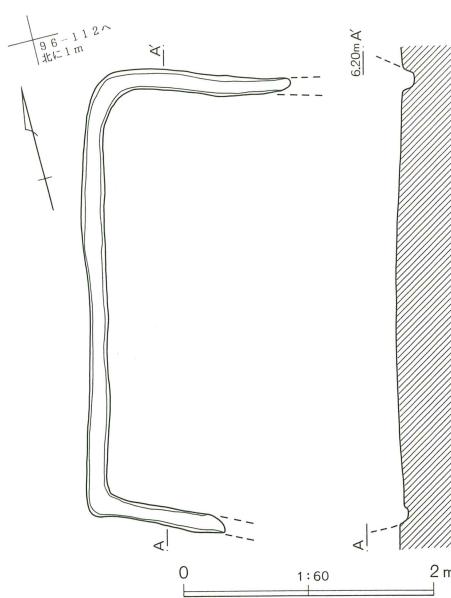
カマドは北壁に設けられ、長さ98cm、焚口幅は不明である。煙道部は破壊されて残っていなかった。

遺物は比較的少なく、その6割近くが土師器甕・壺の破片であった。

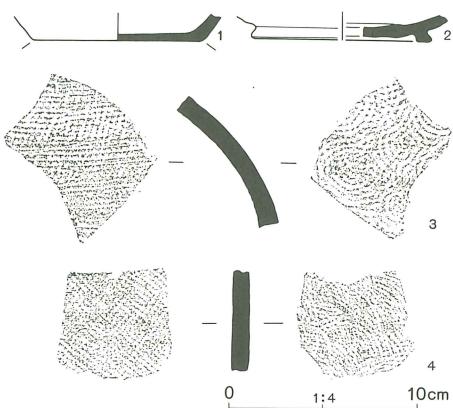
図化できた遺物は計10点あった。出土位置は1～3・5～9が覆土、4が床面直上、10が床面近くである。



第 283 図 第 16 号住居跡 L = 6.10 m



第 284 図 第 17 号住居跡



第 285 図 第 17 号住居跡出土遺物

cmで、深さは11cmである。

また、土壙は1基検出された。SK 1は長方形で、カマド右脇にあり、長辺1.03mで、深さは22cmある。

カマドは北壁中央やや右寄りに設けられ、長さ1.46m、焚口幅26cmである。煙道部と燃焼部はほとんど段差がない。カマド上半部は無いが、燃焼部には支脚が立ったまま出土していること、焚口部が幅細く絞り込んでいることから、比較的旧状をよく留めているものと思われる。すなわち、住居廃棄時にはカマドを破壊していないようである。

遺物はあまり多くは出土しなかった。図化できた遺物は計4点あった。出土位置は1が覆土、2・4が床面直上、3がカマドである。

### 第15号住居跡 (第280~281図)

95—111グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第14号住居跡・第21号土壙よりも古い。

住居の大半が調査区域外にかかり、さらに重複する遺構によって破壊されているため、住居の全容はつかめなかった。

よって、住居の平面形や規模などは不明である。

壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は8cmで、深さは10cmある。

床面では、ピットが計2本検出された。P 1は径12cmで、深さは8cm、P 2は径33cmで、深さは15cmある。

遺物はたいへん少なく、土師器が19点、須恵器が14点しか出土しなかった。

図化できた遺物は1点しかなかった。出土位置はP 2である。

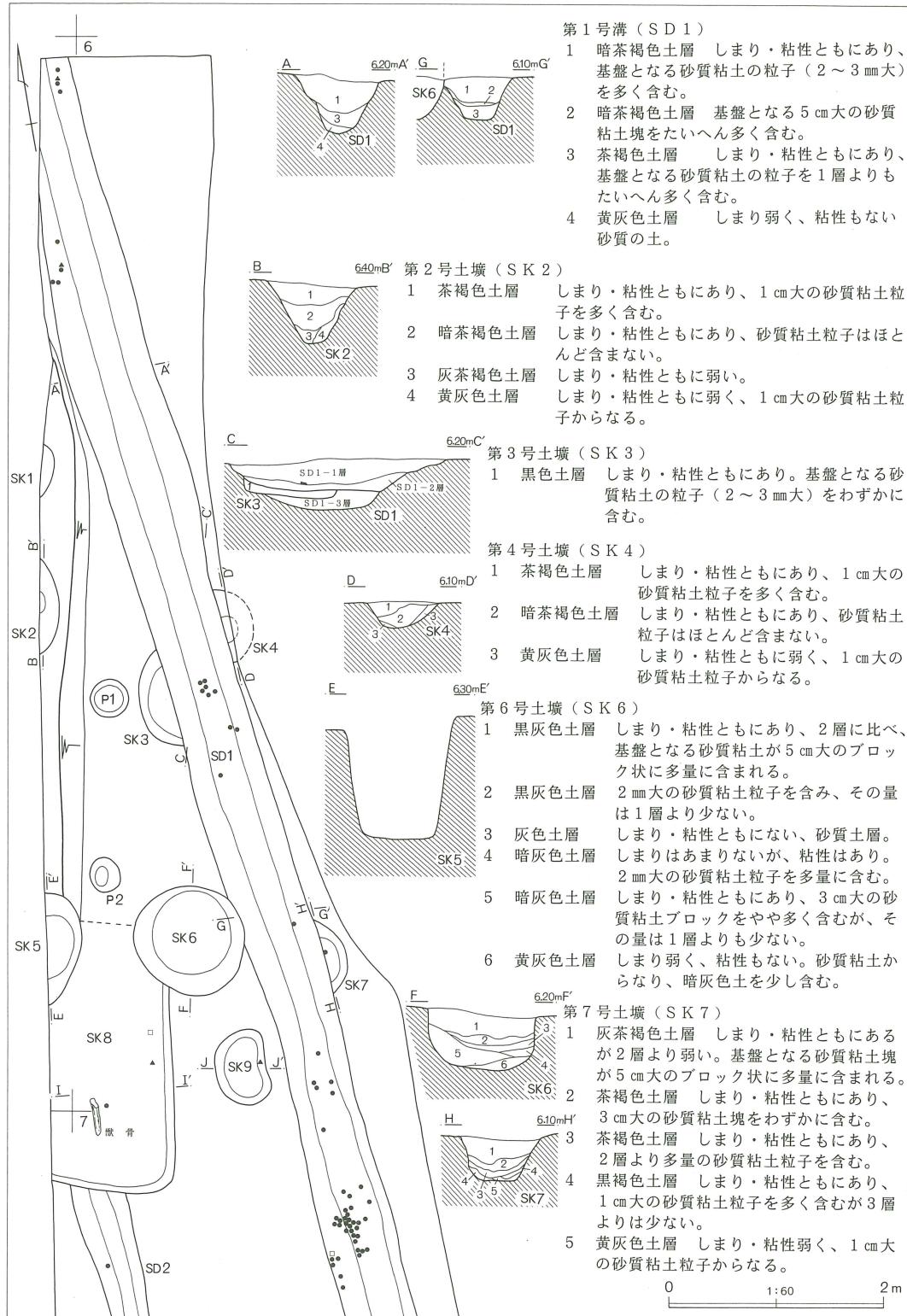
### 第16号住居跡 (第282~283図)

95—111・96—111、96—112グリッドに位置する。他の遺構と重複関係があり、第14号住居跡よりも古い。

住居の平面形はほぼ正方形に近く、主軸方向はN—21°—Eである。

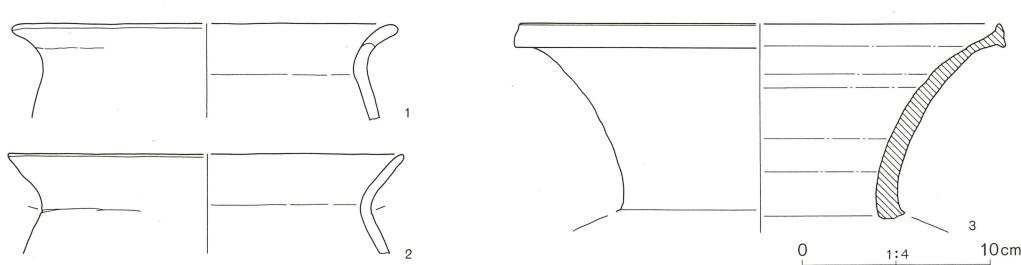
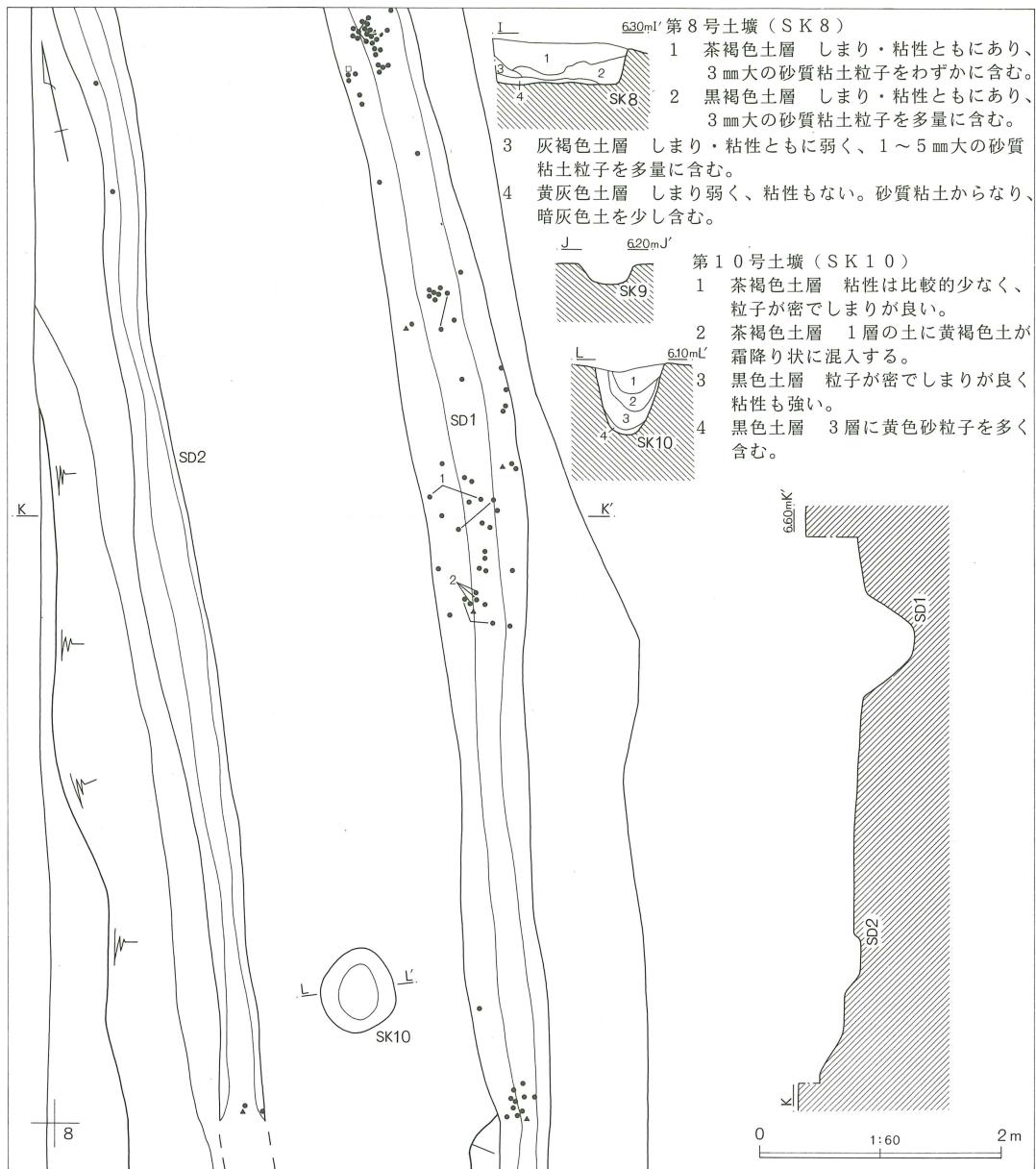
規模は南北長が3.44m、東西長が3.47m、深さは9cmである。壁溝は全周しており、幅は12cmで、深さは8cmである。

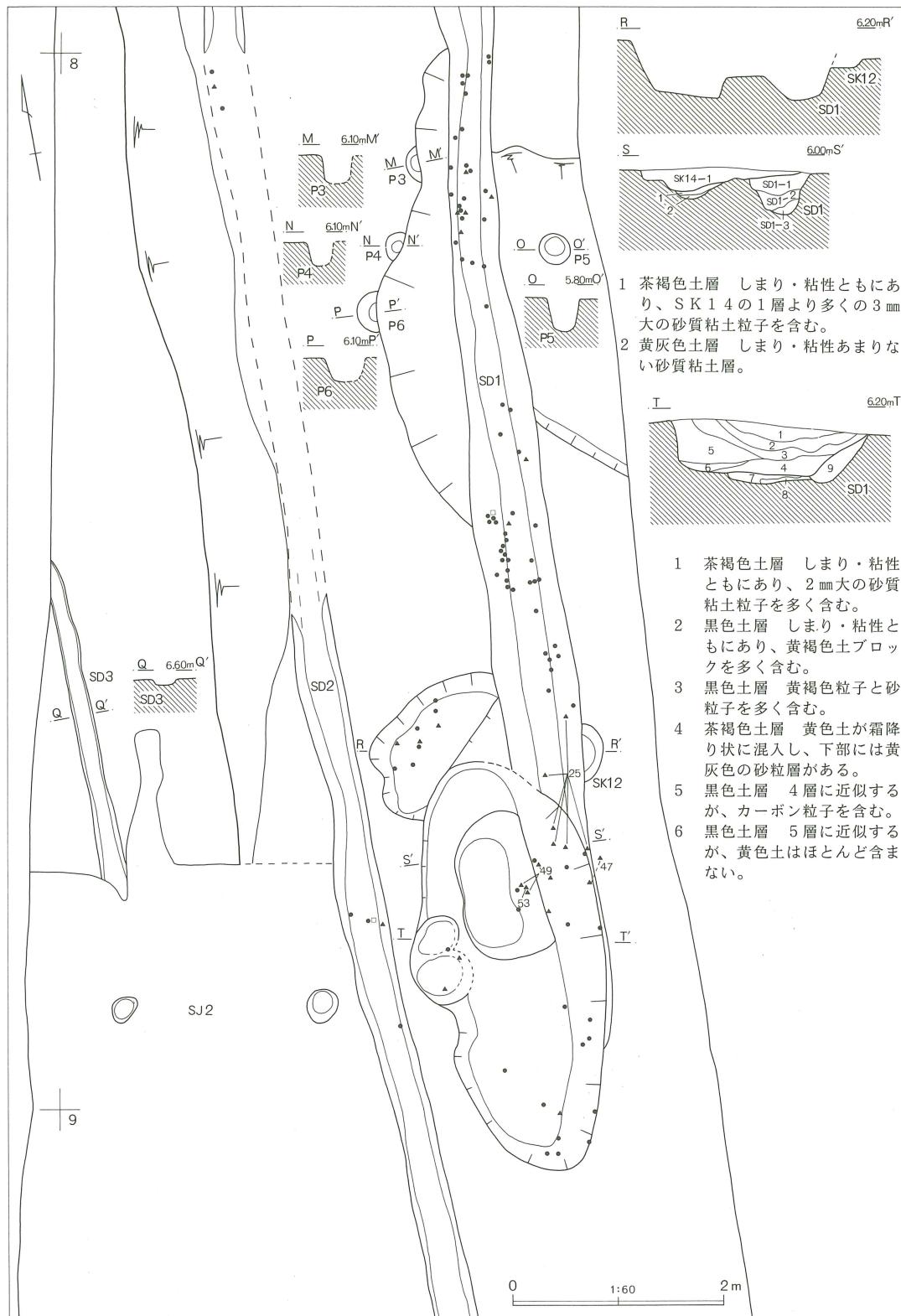
床面では、ピットが1本検出された。P 1は径14



第286図 土壌・溝跡(1)

# 根 切





第289図 土壌・溝跡(3)



第290図 土壙・溝跡(4)

## 第17号住居跡（第284～285図）

95—112・96—112グリッドに位置し、他の遺構との重複関係はない。

遺構確認時にすでに床面が露出しており、さらに住居の東半分は鴨川の氾濫により削り取られていたため、住居の全容はつかめなかった。

規模は一辺の長さが唯一わかる西壁が3.64mで、深さは不明である。

壁溝は発掘範囲内では全周しており、幅は15cmで、深さは10cmである。

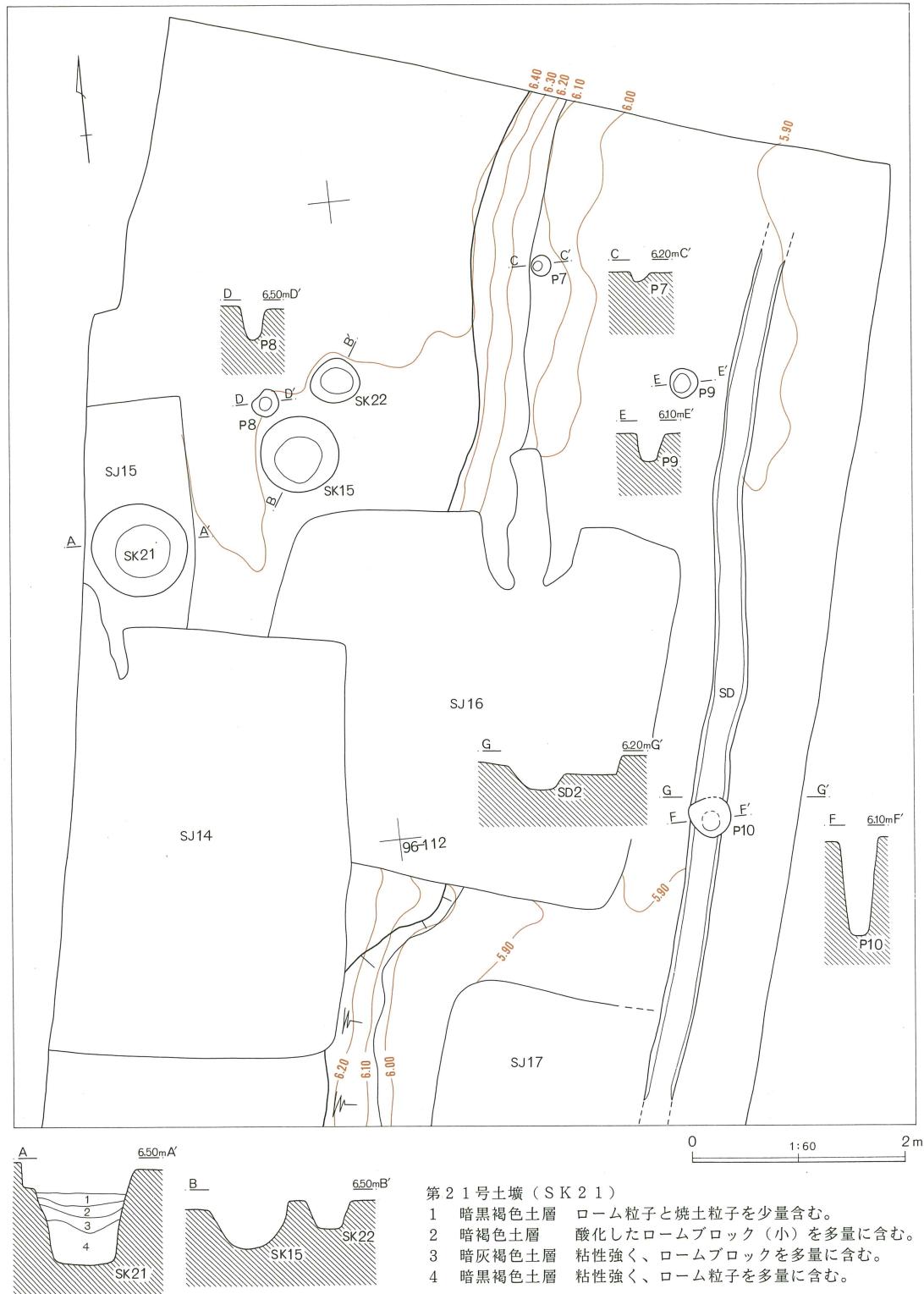
生活段階のピットや土壙は検出されなかった。

遺物はあまり多くは出土しなかった。図化できた遺物は計4点あった。出土位置はすべて床面近くである。

## (2) 溝 跡

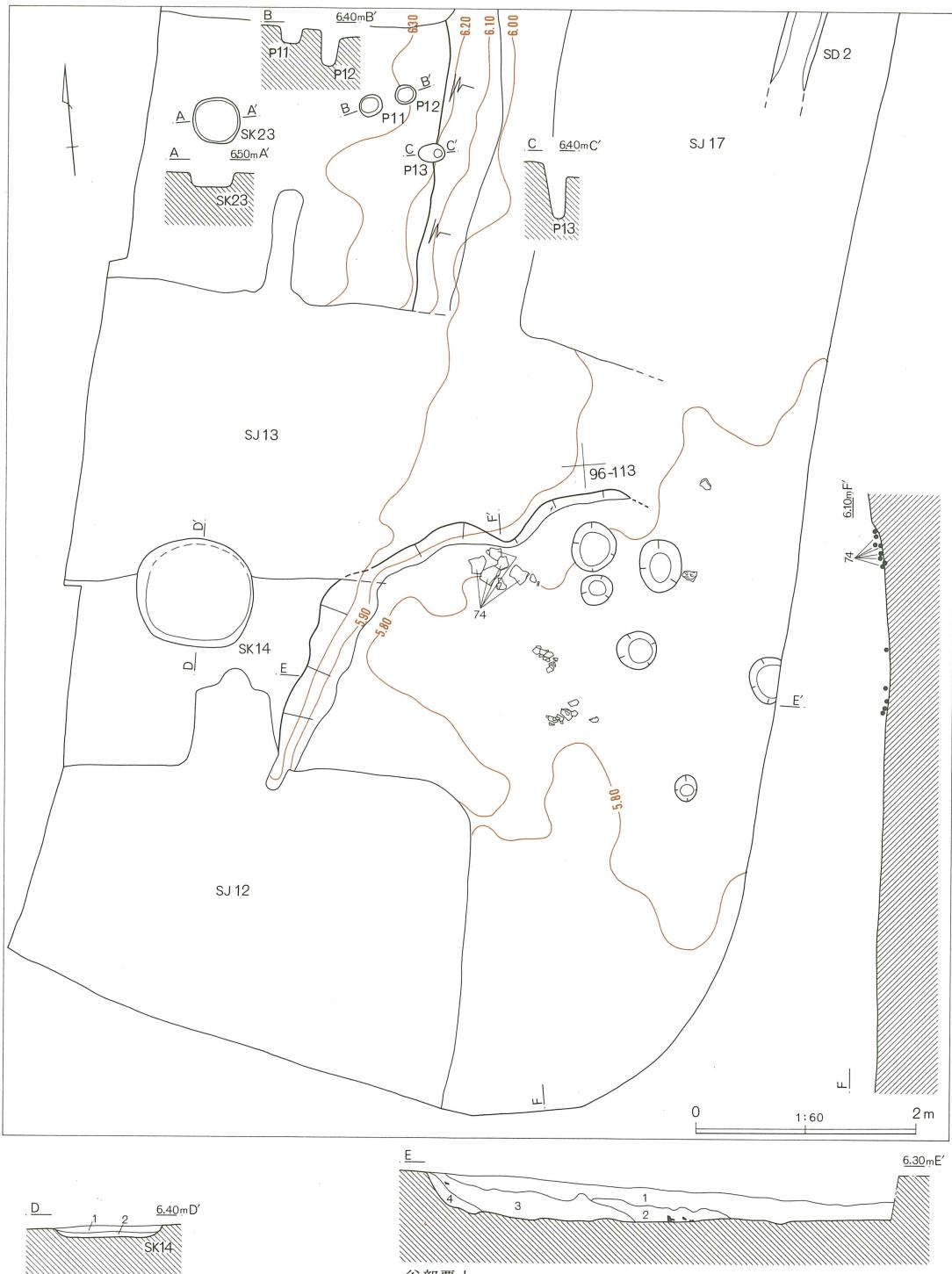
## 第1号溝跡（第286～289図）

96—103グリッドから96—108グリッドに位置する。他の遺構との重複関係があり、第4号土壙・



第291図 土壌・溝跡(5)

## 根切



### 第14号土塘 (SK14)

- 第14号土壤 (SK14)

1 暗褐色土層 ローム粒子と炭化物粒子を少量含む。	2 暗黒褐色土層 粘性強く、ロームブロック（小）と焼土粒子と炭化物を多量に含む。
2 暗褐色土層 ローム土を主体とする。	3 暗褐色土層 ローム粒子を斑に含む。
	4 黒褐色土層 ロームブロック（小）を多量に含む。

第292図 土壌・溝跡(6)



第 16 号 土 壤 ( S K 1 6 )

1 暗褐色土層 ローム粒子を多量に、焼土粒子を少量含む。  
 2 黒褐色土層 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。  
 3 暗黄褐色土層 ローム土を主体とし、焼土粒子を少量含む。

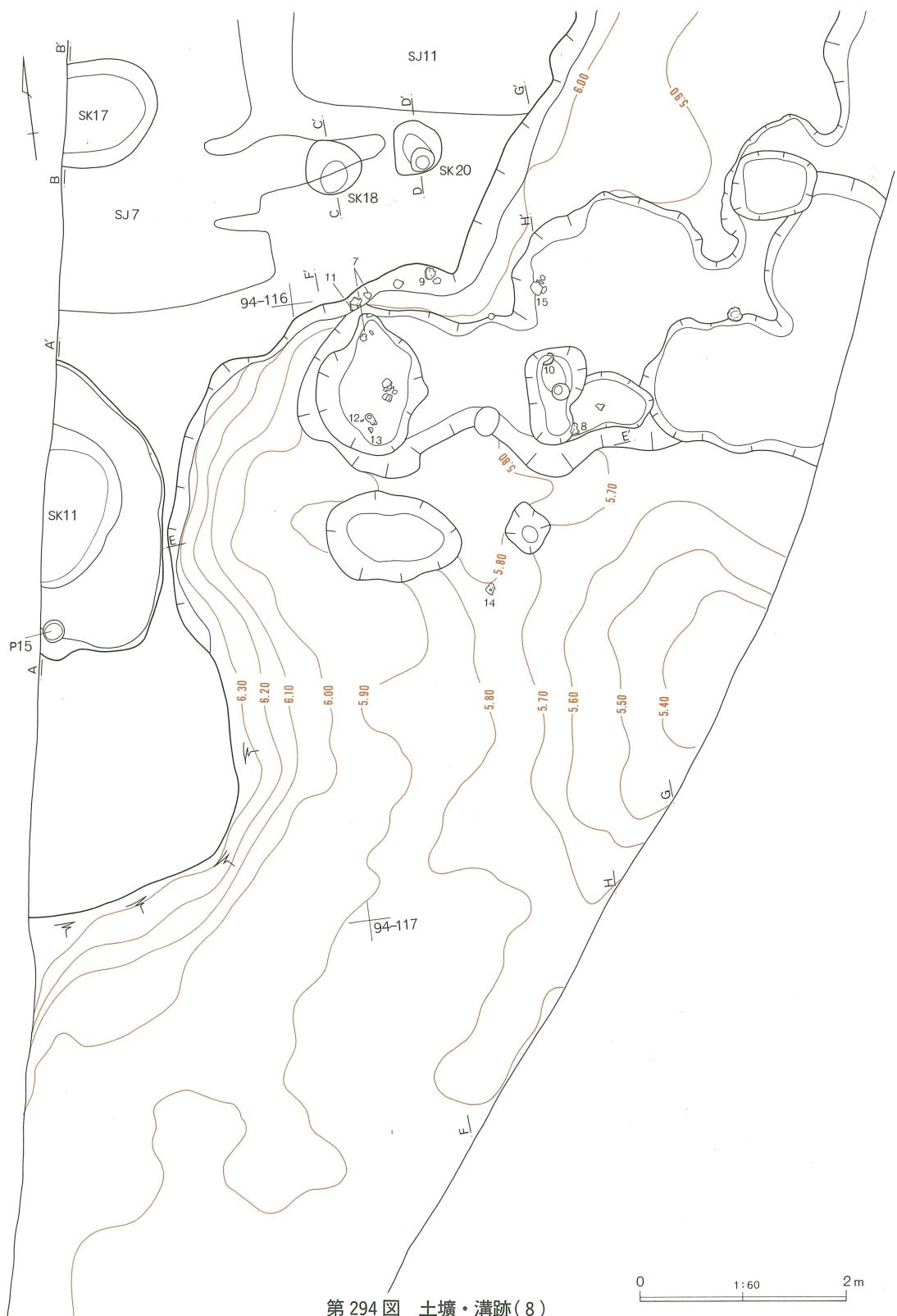
第 19 号 土 壤 ( S K 1 9 )

1 黒褐色土層 焼土粒子と炭化物を少量含む。  
 2 暗黒褐色土層 ロームブロック (小) と焼土粒子を多量に含む。  
 3 暗灰褐色土層 ローム土を主体とする。

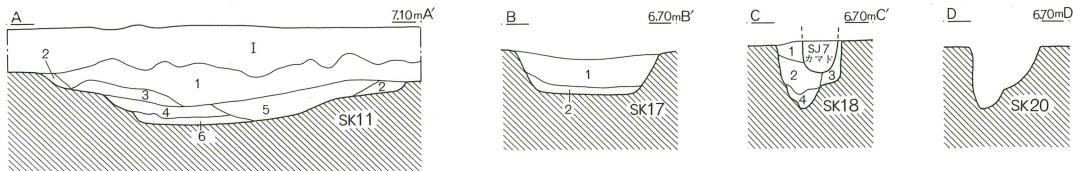
第 14 号 ピット ( P 1 4 )

1 暗黒褐色土層 焼土ブロックを多量に含む。

第 293 図 土 壤・溝 跡 ( 7 )



第294図 土壌・溝跡(8)



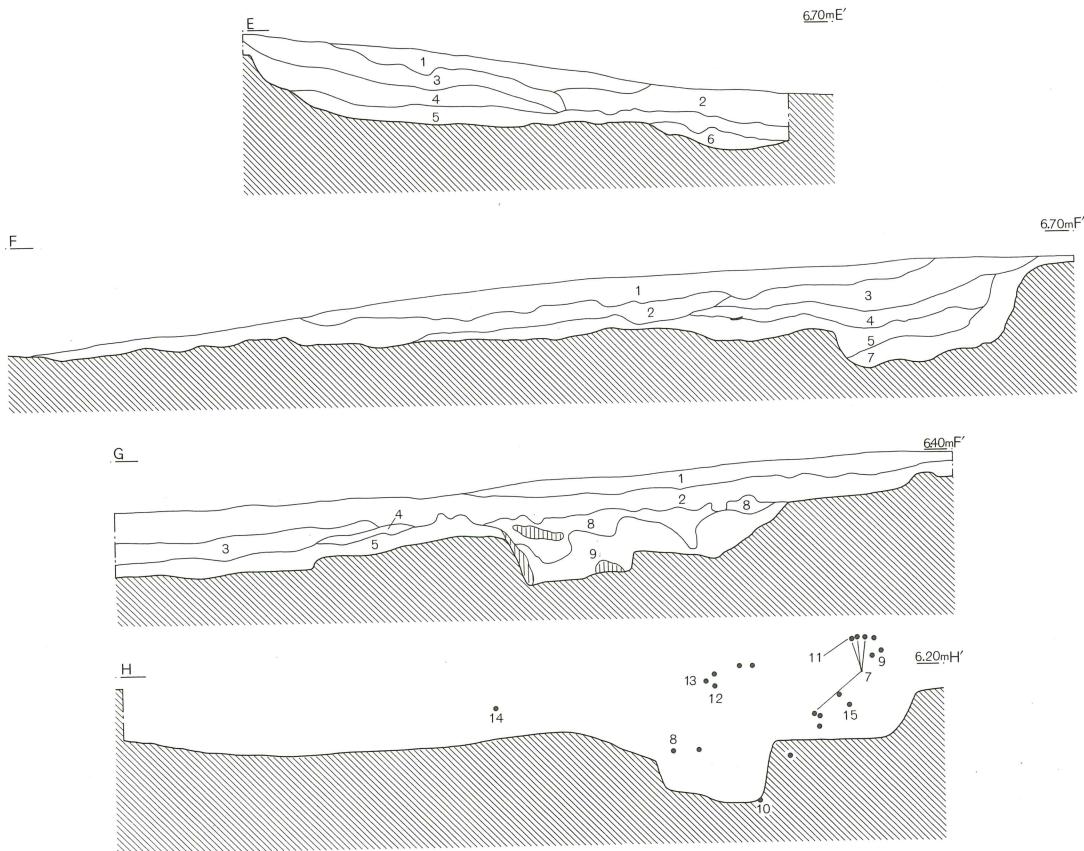
第11号土壤 (SK11)

- 1 暗褐色土層 耕作土（表土）。  
 2 黒褐色土層 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。  
 3 灰褐色土層 黒色土粒子を少量含む。  
 4 暗黒褐色土層 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。  
 5 暗黃褐色土層 ロームブロック（小）を斑点状に含む。  
 6 暗褐色土層 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。  
 7 暗灰褐色土層 ローム粒子を多量に含む。

第17号土壤 (SK17)

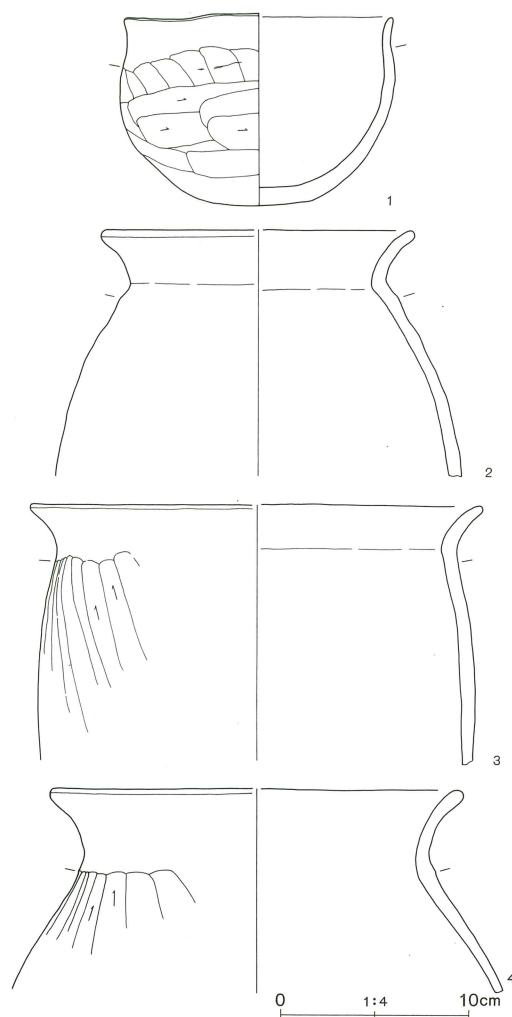
- 1 褐色土層 ロームブロック（小）を多量に、焼土粒子を少量含む。  
 2 暗黒褐色土層 ローム粒子と焼土粒子と炭化物を少量含む。  
 第18号土壤 (SK18)  
 1 暗褐色土層 ローム粒子と焼土粒子を少量含む。  
 2 暗黒褐色土層 ロームブロックと焼土粒子を少量含む。  
 3 暗黃褐色土層 黒色土ブロックと炭化物を含む。  
 4 暗黒褐色土層 焼土粒子を少量含む。

第295図 土壤土層堆積図



- 1 暗灰褐色土層 ローム粒子と酸化鉄分とマンガン粒子を多量に含む。  
 2 灰褐色土層 ローム粒子と焼土粒子と炭化物を少量含む。  
 3 暗褐色土層 ローム粒子と焼土粒子と炭化物を多量に含む。  
 4 暗褐色土層 ローム粒子と焼土粒子と炭化物を少量含む。  
 5 暗黒褐色土層 ロームブロックと焼土粒子を多量に含む。  
 6 暗黃褐色土層 ロームブロックをたいへん多く含む。  
 7 暗黒褐色土層 ローム粒子と焼土粒子と炭化物を多量に含む。  
 8 暗灰褐色土層 ローム粒子と焼土粒子と炭化物を多量に含む。

第296図 谷部土層堆積図



第297図 第13号土壌出土遺物

く、第2号住居跡よりも新しい。

96—110グリッド付近で一端途切れている。

規模は幅40cm、深さ15cmで、調査区域外にも延びているため全長は不明である。

遺物は土師器と須恵器の破片が十数点出土したのみで、図化できる遺物もなかった。

溝の時期は確定できない。

### 第3号溝跡 (第289~290図)

96—107グリッドから96—110グリッドに位置する。第2号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は確認できなかった。

規模は幅20cm、深さ8cmで、調査区域外にも延びているため全長は不明である。

遺物はほとんど出土せず、溝の時期も確定できない。

第7号土壌・第11号土壌～第13号土壌よりも新しく、第6号土壌・第14号土壌よりも古い。

この溝は同じ場所で1回掘り直されており、第3号土壌は旧第1号溝跡よりも新しく、新第1号溝跡よりも古いたことが土層図で確認できる(第286図のA—A'、C—C')。

新第1号溝跡の規模は幅75cm、深さ30cmで、調査区域外にも延びているため全長は不明である。

遺物は比較的多く出土したが、図化できた遺物は3点しかなかった。3点とも口縁部の破片なので時期は確定できないが以下のように推定される。

1は土師器甕で古墳時代後期か奈良時代、2は土師器甕で奈良時代、3は灰釉陶器の広口瓶で平安時代の所産と思われる。

溝の時期は確定できない。

### 第2号溝跡 (第286~292図)

96—105グリッドから96—112グリッドに位置する。他の遺構との重複関係があり、第8号土壌・第10号ピットよりも古

## (3) 土 壤

第3地点では計24基の土壙が検出された。各遺構は第286図～第296図に、出土遺物は第297図に示した。また、各土壙の規模などに関しては第1表にまとめて記した。

遺物が出土しない土壙も多く、他の遺構と重複関係があつても、時期が確定できた土壙は第13号土壙だけであった。以下、第1表に付け加えることがある土壙のみについて述べたい。

第3号土壙の重複関係は第1号溝跡の古い段階のものより新しく、第1号溝跡の新しい段階のものよりも古い（第286図のA—A'、C—C'）。

第13号土壙は、図化できる遺物が唯一あった土壙で、土師器の小型壺1点と土師器の甕3が出土している（第297図）。出土位置はいずれも土壙の底面近くである。重複関係にある第9号住居跡と第10号住居跡は古墳時代末から奈良時代初頭の住居跡である。この土壙の時期は、出土遺物から住居跡とはさほど隔たりのない時期と思われる。

第24号土壙は第5号住居跡と接しており、本来は重複関係にあったものと思われるが、その新旧関係は確認することができなかった。

第6表 根切遺跡第3地点第1～24号土壙一覧表

番号	位置 (グリッド)	規 模 (単位:cm) 長径×短径×深さ	重複関係	出 土 遺 物
1	96—104	—×—×—	なし	なし
2	96—104	—×—× 55	なし	なし
3	96—104	95×—× 30	本文参照	なし
4	96—105	70×—× 25	SD1より古い	なし
5	96—105	105×—×115	SK8より新しい	なし
6	96—105	103×—× 52	SK8・SD1より新しい	なし
7	97—105	71×—× 37	SD1より古い	なし
8	96—105	247×—× 33	SK5・SK6より古い	土師器、須恵器、獸骨
9	96—105	70× 47× 18	なし	土師器
10	96—106	70× 60× 55	なし	なし
11	93—116	283×—× 45	P15より古い	なし
12	96—108	55×—× 40	SD1より古い	なし
13	93—114	240×120× 35	SJ9・SJ10より新しい	土師器
14	95—113	105× 96× 10	SJ13より新しい	なし
15	95—111	75× 72× 47	なし	なし
16	93—115	92× 65× 40	SJ9より新しい	土師器
17	93—115	—×100× 30	なし	なし
18	94—115	55× 52× 55	SJ7より古い	なし
19	94—115	83× 52× 49	SJ10より新しい	なし
20	94—115	50× 46× 50	なし	なし
21	95—111	90×—× 90	SJ15より新しい	なし
22	95—111	45×—× 25	なし	なし
23	95—112	40×—× 12	なし	なし
24	94—114	105× 60× 30	本文参照	なし

#### (4) ピット

第3地点では計15本のピットが検出された。各遺構は第286・289・291～294図に示した。

建物や柵列の一部になるものもあるかと思うが、単独のピットとしてしか確認することができなかつた。

規模などに関しては図版掲載で報告と代えたい。また、遺物がほとんど出土しなかつたのでそれぞれのピットの時期は確定できなかつた。

#### (5) 遺物包含層

今回の調査区は自然堤防の縁辺部分にあたる。もともと自然堤防はもっと東側まで、すなわち現在鴨川が流れているあたりまで続いていたが、長年の鴨川の侵食を受けてだいぶ削られていようである。96—106グリッドから96—110グリッドにかけて南北に走る段差が存在するが、これは鴨川の侵食によってできたものと思われる（第242図）。段差の高低差は30cm前後である（第290図）。また、第2号住居跡と第17号住居跡はこの侵食によって住居の東半分が破壊されている。

調査区の東半分はこの鴨川の侵食によって一段低くなつており、埋没する過程で多量の遺物が混入していた。

調査区はグリッド114列で一端途切れるので、ここでは114列より北の調査区を「北側調査区」、南の調査区を「南側調査区」として包含層から出土した遺物を報告したい。

##### 北側調査区（第298～307図）

96—104グリッドから96—110グリッド（6グリッドから10グリッド）にかけては遺物分布図を作成した。

この図には遺物の種類がわかるように以下のようなマーク分けをした。

- ：土師器
- ▲：須恵器
- ：土師質土器
- △：陶器、磁器
- ：その他（縄文土器、弥生土器、瓦など）

なお、出土状態図の遺物に付いた番号は、遺物実測図の番号と一致している（第303～307図）。

また、接合した遺物は実線で、同一個体と思われる遺物は破線でそれぞれの遺物を結んで、わかるようにした。

出土した遺物の時期は古墳時代後期から近世にわたつてゐる。量的には古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が一番多かつた。これは住居跡の時期と一致している。

図化できた遺物は計74点あつた（第303～307図）。1～39・71～74は古墳時代後期の土師器・須恵器・石製模造品、40～63は奈良時代から平安時代の土師器・須恵器・瓦、64～67は中世の陶器、68

は近世の陶器である。69・70は時期は確定できない。

出土した位置は1～70が遺物分布図を作成した96—104グリッドから96—110グリッド(6グリッドから10グリッド)、71～74は96—113杭付近の浅い凹地である。

図化した古墳時代後期の遺物の中で、須恵器がかなりみられるが、湖西産などの搬入品の他に県北産と思われる製品もいくつか存在する。22・23・26・34がそれにあたる。26は内面に指突痕が1か所ある。それはちょうど肩部と胴部の屈曲部の径の中心にあたるので須恵器を製作する過程でつけられたものであろう。

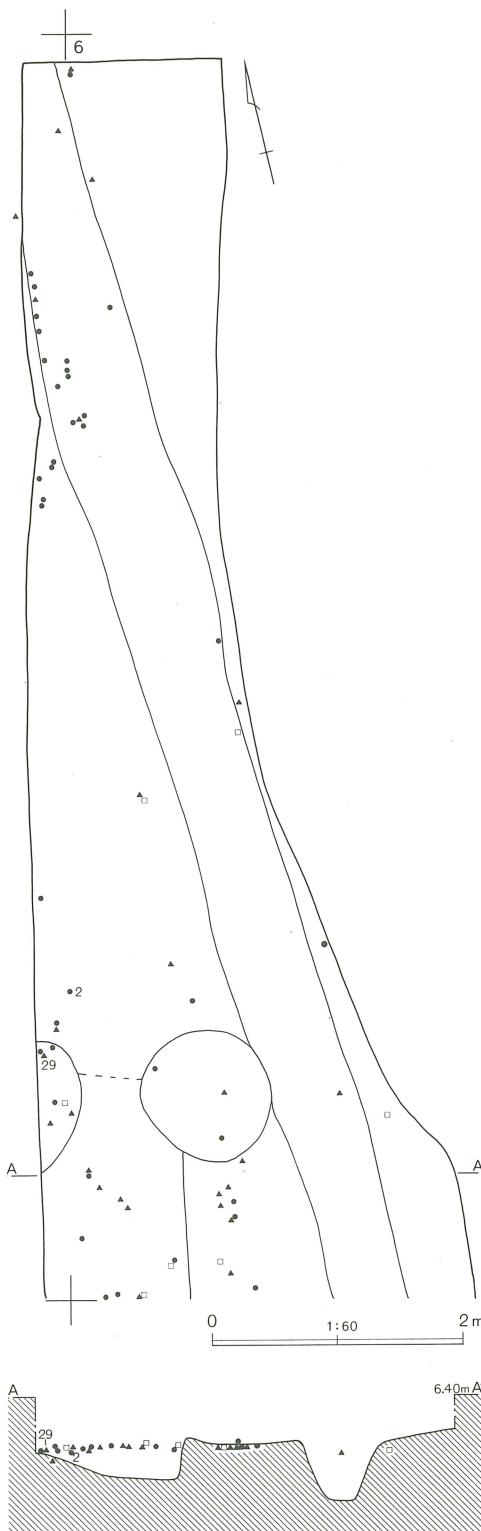
図化した奈良時代から平安時代の遺物の中で、58・62・63は平安時代と思われるが、それ以外はすべて奈良時代であろう。

#### 南側調査区 (第308～310図)

出土位置がわかるものは第294図にその地点を示した。これ以外の遺物はグリッド一括で取り上げられたものなので、遺物分布図は作成していない。

出土した遺物の時期は古墳時代後期から近世にわたっている。量的には古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が一番多かった。これは住居跡の時期と一致している。北側調査区とほぼ同じ様相であるが、古墳時代後期の遺物は南側調査区出土の方が古い段階のものが多いようである。

図化できた遺物は計43点あった(第308～310図)。1・7～34は古墳時代後期の土師器・須恵器、2～4・35～41は奈良時代の須恵器である。42・43は奈良時代か平安時代である。5は時期を確定できない。また、6は煙管なので近世以降であろう。



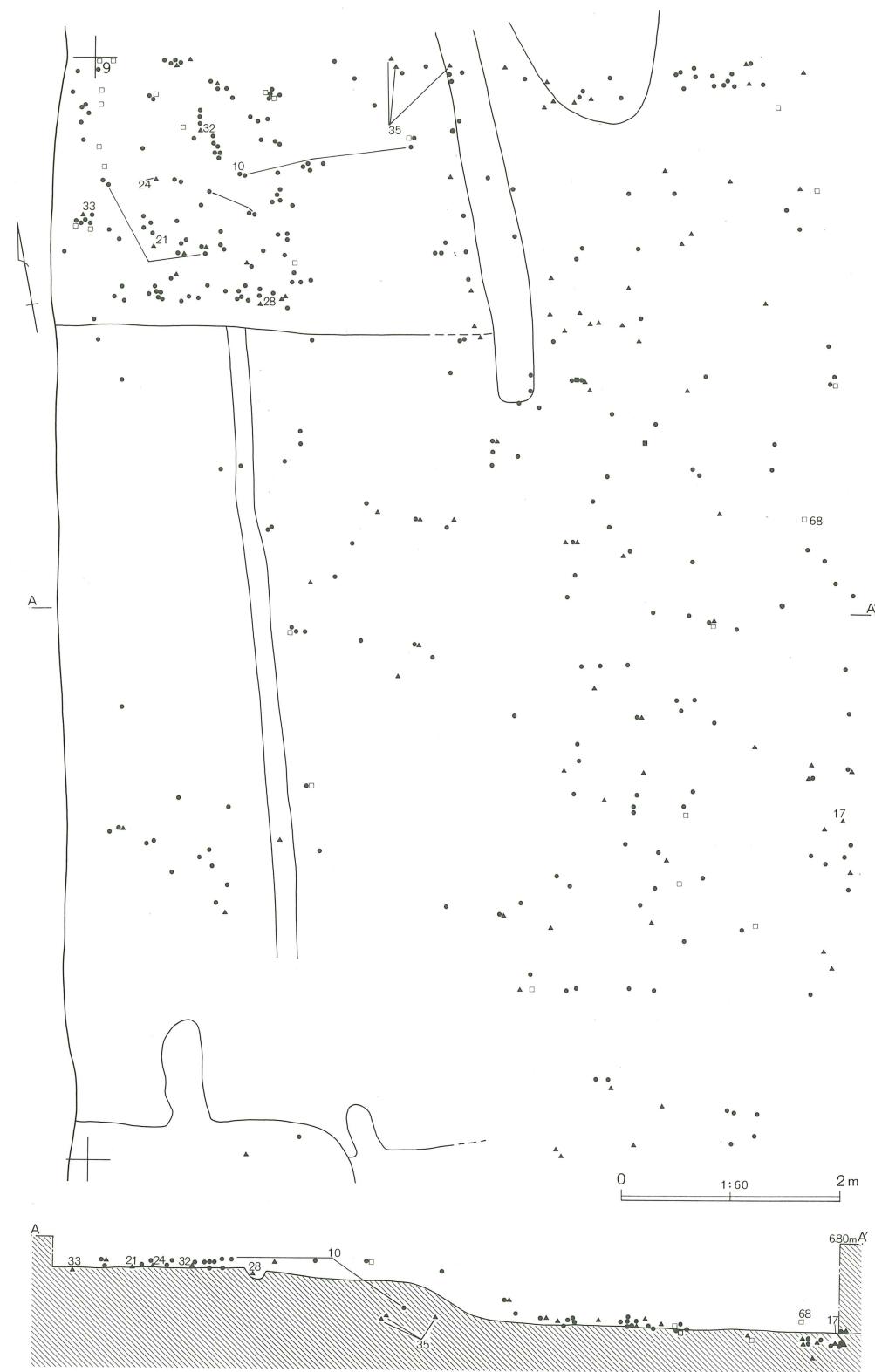
第298図 包含層遺物出土状態(1)



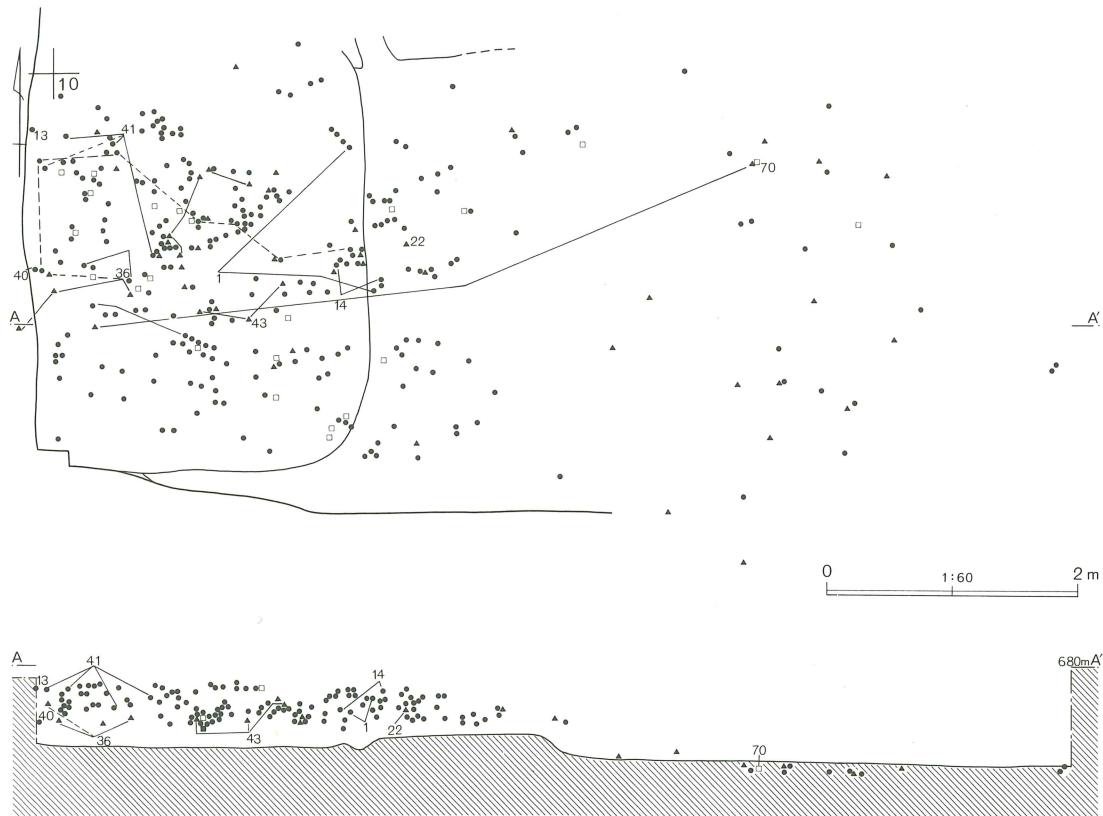
第299図 包含層遺物出土状態(2)



第300図 包含層遺物出土状態(3)



第301図 包含層遺物出土状態(4)



第302図 包含層遺物出土状態(5)

## 工房関連遺物（第309図）

遺物包含層中には工房に関連したと思われる遺物が多くみられたので、ここでまとめて報告しておきたい。

出土した位置に特にまとまりはみられなかった。

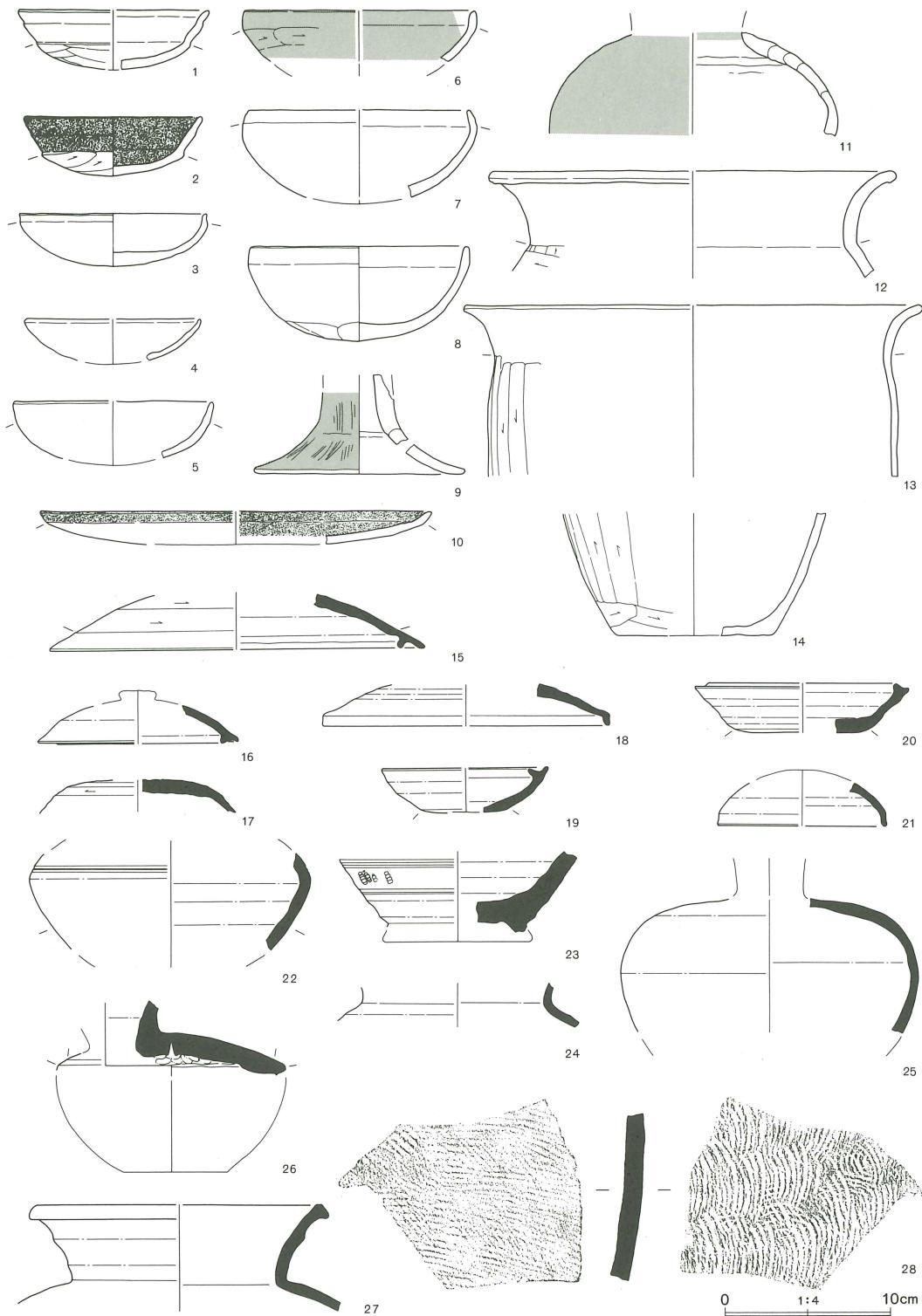
遺物の種類には、漆が付着したもの(1～4)、ふいごの羽口(7)、取瓶(5・10～15)、鋳型(9)などがある。

1は須恵器の底部破片であるが、器形はどのようなものになるのかわからない。外面の調整方法も胴部は平行叩き、底部付近は長方形の格子目叩きが施されており、管見の限りあまり他に類例をみない調整方法である。2は頸径が小さいので長頸壺ではなく平瓶の頸部と思われる。口縁部を故意に打ち欠いており、欠けた土器断面に漆が付着している。3は須恵器の坏で、内面には漆が一面付着していた。4は平瓶の肩部で、粘土の接合痕があるので頸部に近いところと思われる。

以上の1・2・4は漆貯蔵具として使用されていたと思われる。

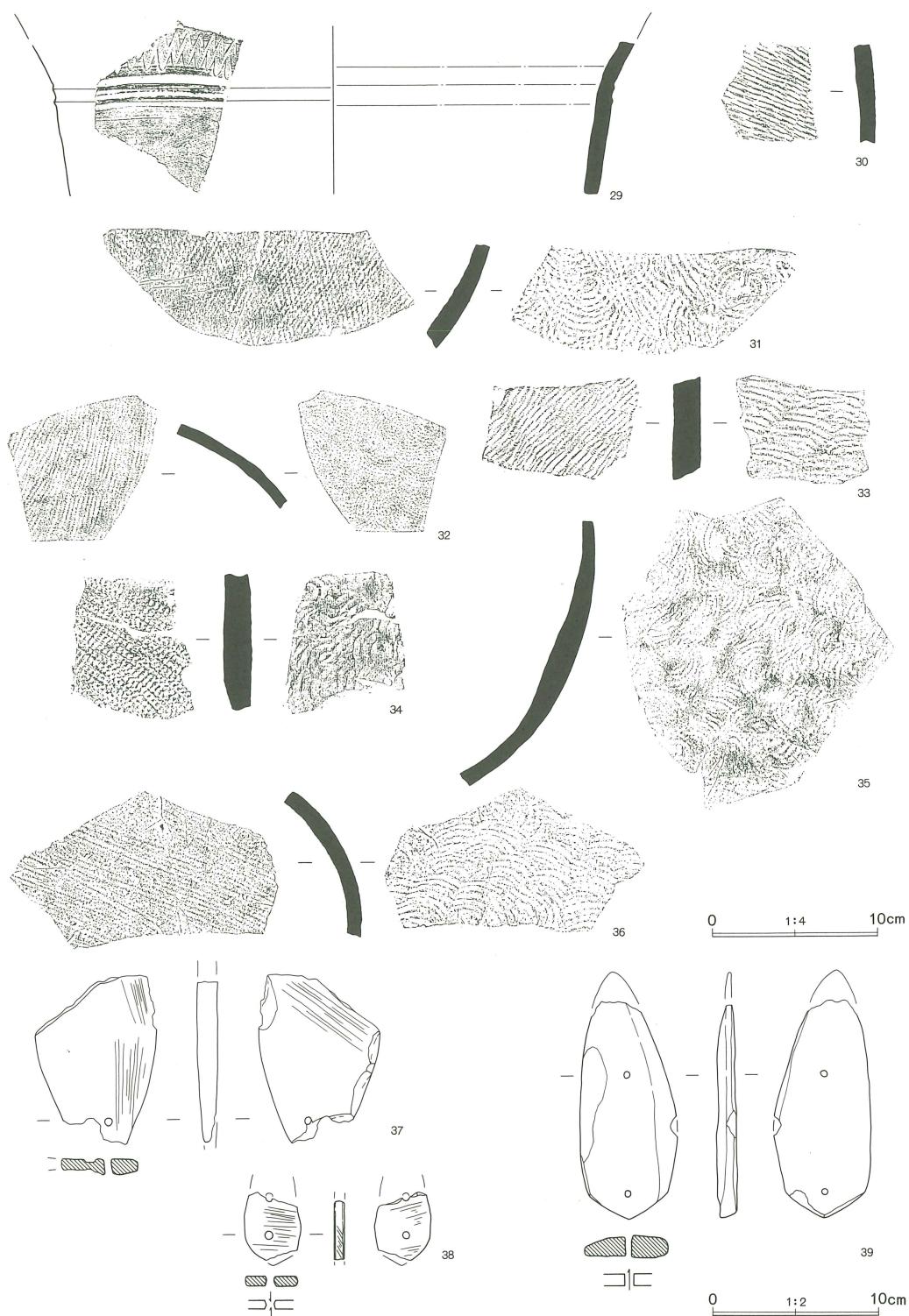
5は取瓶専用に作られた土器で、被熱していないので未使用であろう。6の口縁部にはわずかではあるが発泡した黒い物質が付着している。作業過程で流れた溶解物が単に付着したのか、取瓶として使用された可能性もあるのでこの図版に加えた。

根 切



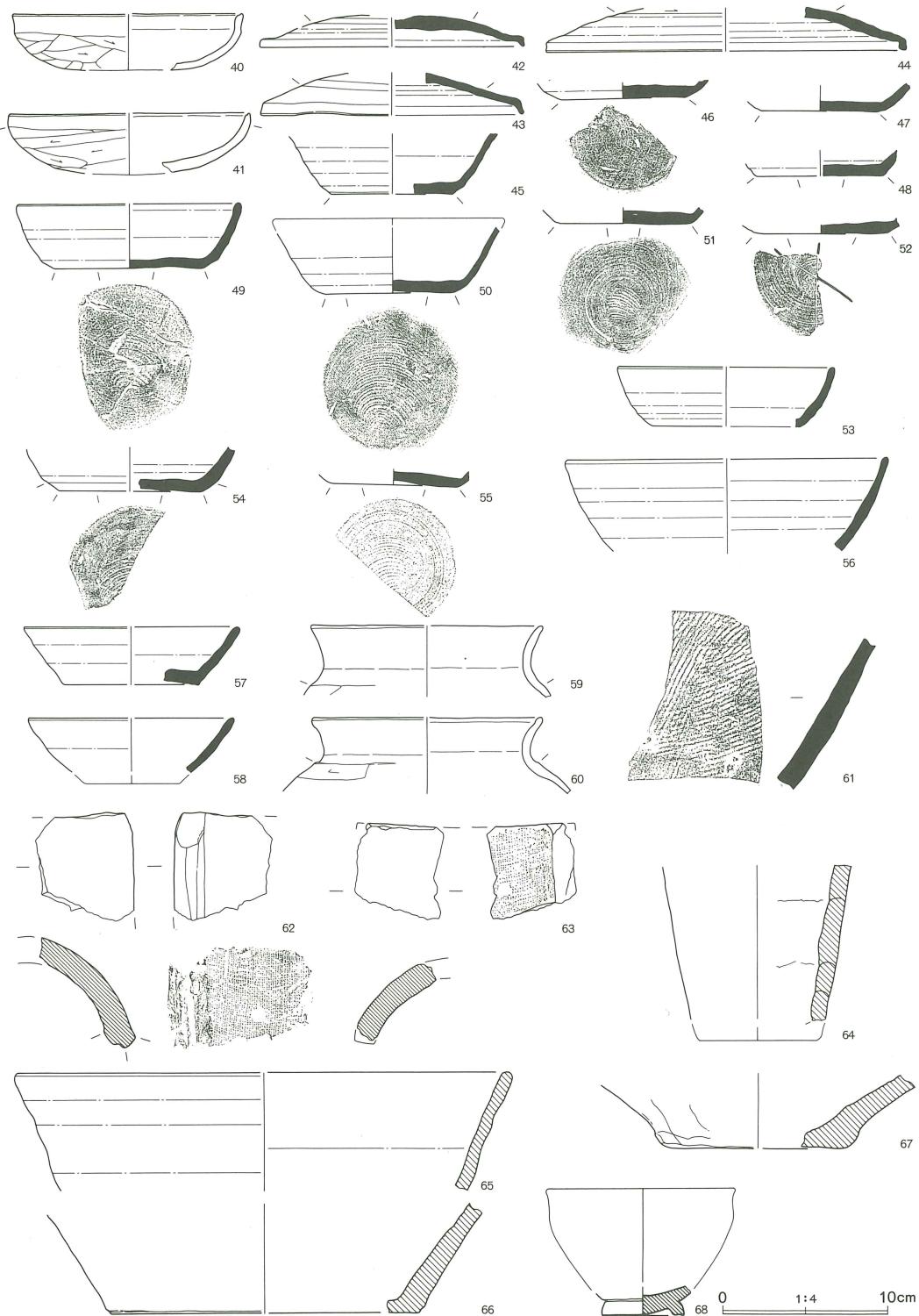
第 303 図 北側調査区包含層出土遺物(1)

根 切



第304図 北側調査区包含層出土遺物(2)

根 切



第305図 北側調査区包含層出土遺物(3)

7 はふいごの羽口で先端部を欠損している。この他にも羽口の先端部は十数点出土しており、その一部は写真図版に掲載した(図版39)。これらの羽口の大きさから、製鍊に使用されたものではなく、鍛冶の精錬炉か鋳造の溶解炉に使用されたものと思われる。

8 は土塊であるが被熱しており、鋳造等に使用された可能性もあるのでこの図版に加えた。

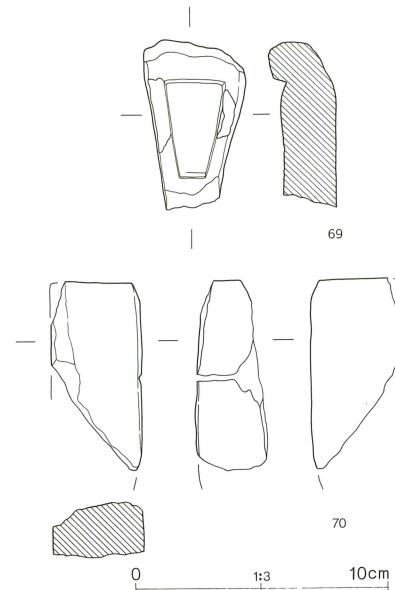
9 は内面が丁寧に調整してあるので、鋳型と考えてもよいであろう。

図化したもの以外にも、溶解炉の壁、鍛冶滓、鋳造滓などがあり、写真図版に掲載した(図版39・40)。

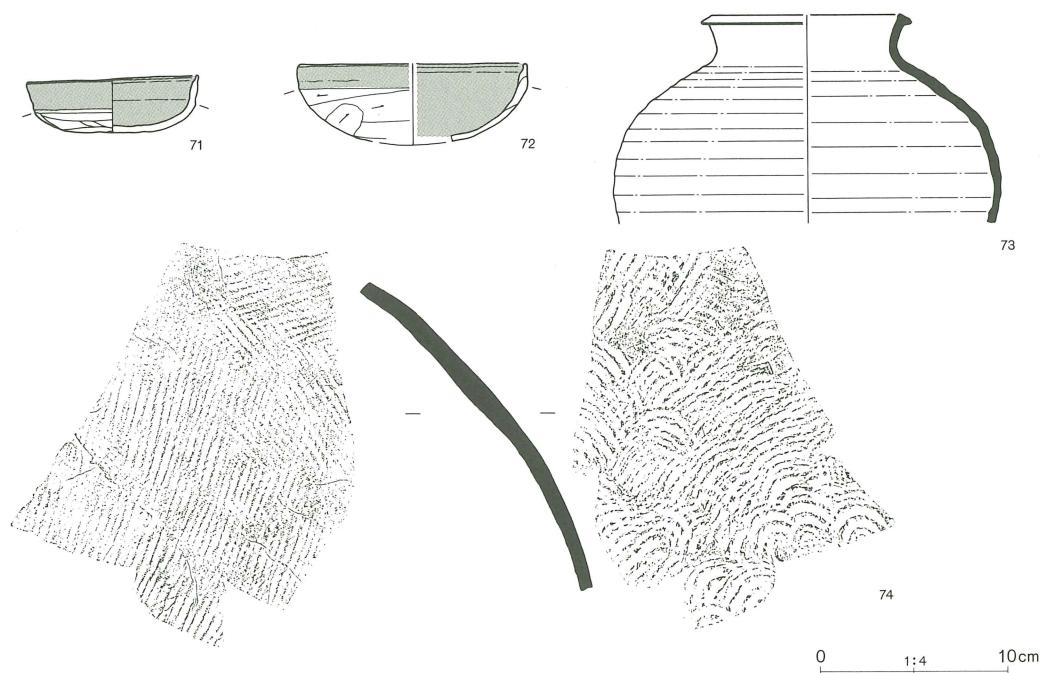
10~15は須恵器の破片に溶解物が付着していた。緑青がふいているものが多いので銅の溶解物であろう。10~12は胎土から湖西産の須恵器と思われる。

以上の他に、住居跡でもすでに報告したように工房に関連した遺物が出土しているので、ここで繰り返し触れておきたい。

第2号住居跡の床面下出土の土師器坏(第248図6)

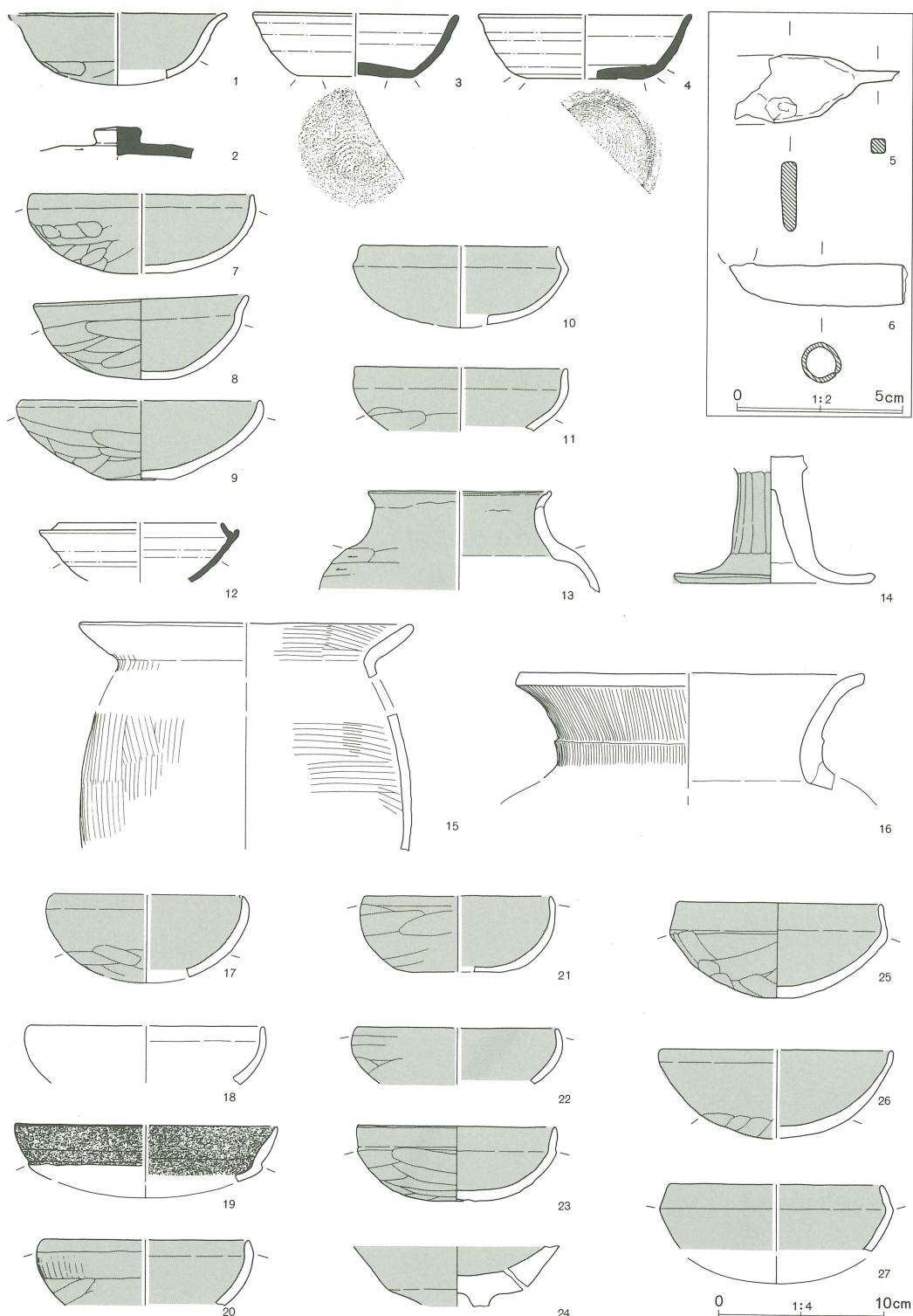


第306図 北側調査区包含層出土遺物(4)

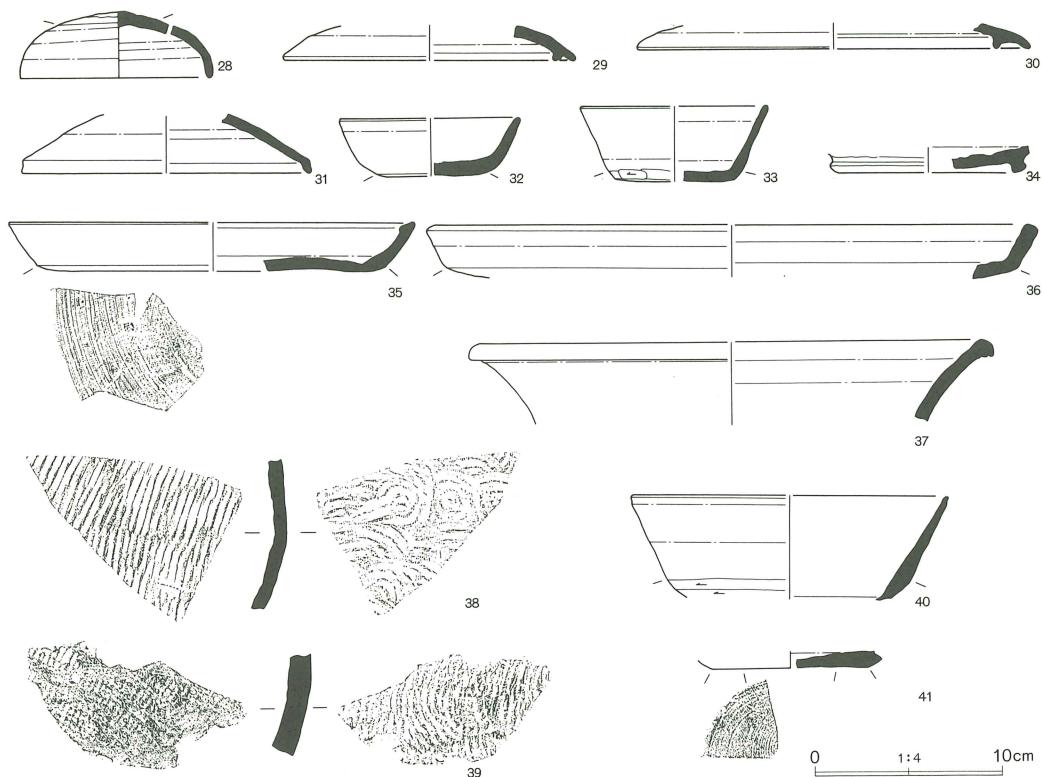


第307図 北側調査区包含層出土遺物(5)

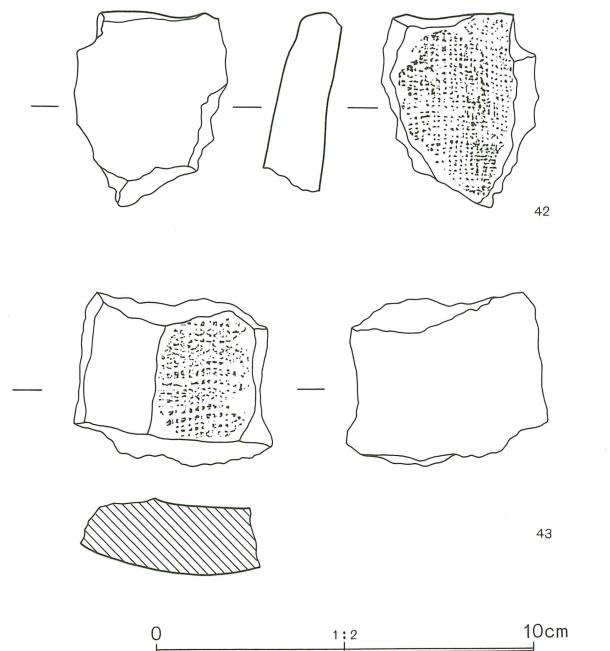
根 切



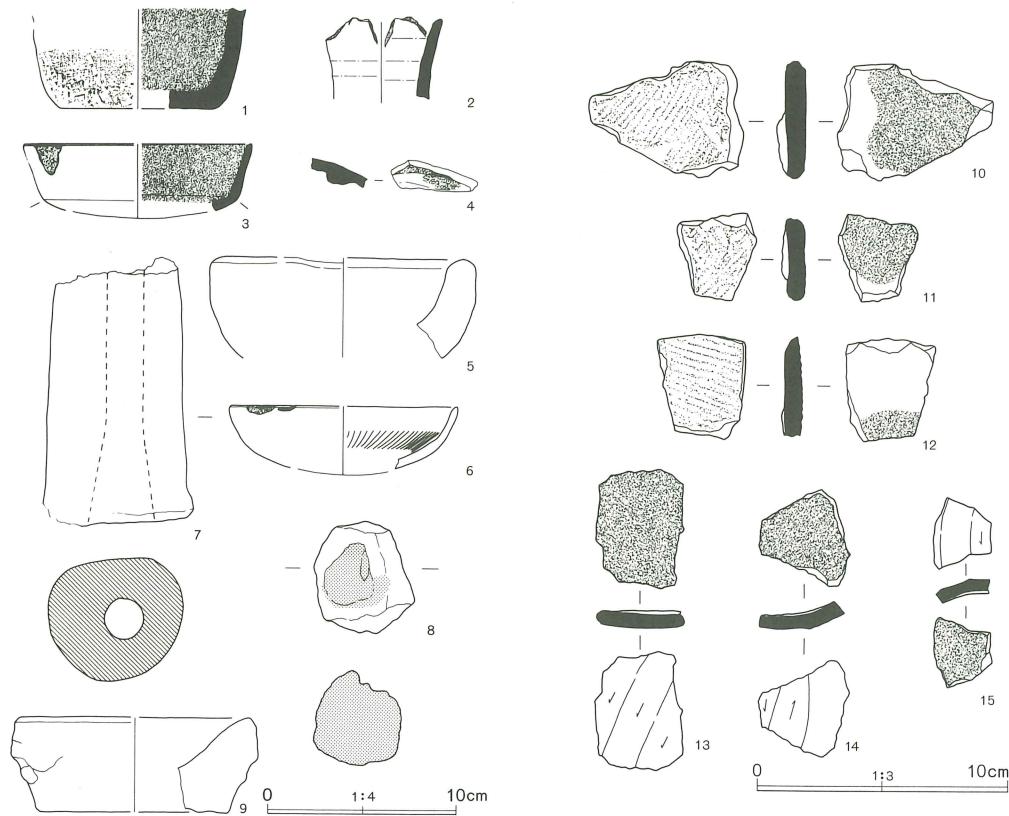
第308図 南側調査区包含層出土遺物(1)



第309図 南側調査区包含層出土遺物(2)



第310図 南側調査区包含層出土遺物(3)



第311図 包含層出土工房関連遺物

には漆が薄く付着していた。また、同住居跡の覆土出土の須恵器高台付坏（第248図8）には銅の溶解物が付着していたので取瓶として使用されていたと思われる。

第6号住居跡の覆土出土の須恵器平瓶（第257図5）は漆貯蔵具として、土師器坏（第257図2）はパレットとして使用されていたと思われる。

これらの遺物を手がかりに手工業の種類を想定してみると、漆を使った工房、青銅製品や鉄製品を鋳造により製作した工房、鉄製品を鍛造により製作した工房、少なくとも3種類をあげることができる。

また、調査区の96—108グリッド（8グリッド）と94—116グリッド付近では不整形の土壙状の落ち込みが検出されている（第289・294図）。このあたりの地山は自然堤防の粘土なので、これらの不整形の落ち込みは粘土を採掘した穴の可能性が高い。

ここで問題となるのが、採掘した時期と用途であろう。残念ながら今回の調査では双方とも決める根拠を得ることはできなかった。覆土から古墳時代後期から奈良時代の遺物が出土しているが、埋没する過程で混入したものなので時期決定の根拠にはなりえない。用途としてはカマドの袖、土壁、前述した鋳造や鍛造の工房で使用するものなどが考えられる。ここでは、工房に関連した粘土採掘土壙の可能性もあるということを指摘しておきたい。

第7表 根切遺跡第1地点遺物観察表

包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	縄文土器	壺	—	—	—	BC	B	にぶい橙	—	81-65、82-65ケリット
2	縄文土器	異形台付壺	—	—	—	C	B	にぶい橙	—	97-72ケリット
3	石製品	石鏃	3.8	—	0.3	—	—	—	100	93-70ケリット 重さ:1.6g 石質:チャート
4	弥生土器	甕	27.1	7.1	34.0	BC	B	暗赤褐	70	98-71ケリット
5	土師器	壺	(12.4)	—	—	BC	B	橙	40	83-64ケリット
6	土師器	壺	(12.4)	—	—	BCD	B	淡黄	40	95-71ケリット
7	土師器	壺	18.0	—	7.0	BC	B	浅黄橙	50	93-69ケリット
8	土師器	壺	14.0	—	3.2	BC	B	にぶい橙	80	90-67ケリット
9	土師器	壺	(12.3)	4.8	4.6	BCD	B	淡黄	40	90-66ケリット
10	土師器	壺	16.1	5.2	5.0	BC	B	にぶい橙	70	93-69ケリット
11	土師器	壺	11.7	—	—	BCF	B	にぶい橙	50	96-71ケリット
12	土師器	壺	13.4	—	—	BCF	B	浅黄橙	30	91-67ケリット 外面も赤彩の痕跡あり。
13	土師器	壺	(14.3)	5.1	4.8	BC	B	浅黄橙	80	83-65ケリット
14	土師器	壺	13.0	—	—	B	B	浅黄橙	50	93-67、94-69ケリット 赤彩の可能性あり。
15	土師器	壺	—	3.7	—	BC	B	浅黄橙	60	98-72ケリット
16	土師器	壺	13.1	—	4.9	BC	B	にぶい橙	70	83-64ケリット
17	土師器	壺	(13.0)	—	—	B	B	橙	40	97-71、97-72ケリット
18	土師器	壺	(12.4)	—	—	BC	B	橙	30	97-71、98-71ケリット
19	土師器	壺	(14.4)	—	—	BC	B	にぶい橙	20	94-70ケリット
20	土師器	壺	12.8	—	—	BC	B	浅黄橙	50	97-71ケリット
21	土師器	壺	11.7	—	5.5	BCD	B	浅黄橙	100	93-70ケリット
22	土師器	壺	(12.8)	—	—	BC	B	浅黄橙	30	92-68ケリット
23	土師器	壺	(11.9)	—	—	BC	B	橙	80	96-70ケリット
24	土師器	壺	(10.8)	—	—	BC	B	浅黄橙	60	95-69ケリット 外面も赤彩の可能性あり。
25	土師器	壺	12.9	—	4.5	BCD	B	浅黄橙	60	95-70ケリット
26	土師器	壺	(14.0)	—	4.8	BCD	B	橙	70	93-69ケリット
27	土師器	壺	(12.7)	—	5.0	BC	B	浅黄橙	40	92-68ケリット
28	土師器	壺	(10.9)	—	—	BC	B	浅黄橙	40	96-69ケリット 他 赤彩の可能性あり。
29	土師器	壺	(13.1)	—	—	BC	B	浅黄橙	50	98-71ケリット
30	土師器	壺	13.1	—	4.0	BC	B	浅黄橙	50	97-72ケリット
31	土師器	壺	—	—	—	B	B	橙	40	97-70ケリット
32	土師器	壺	(10.4)	—	—	BC	B	にぶい橙	40	90-67ケリット
33	土師器	壺	15.0	—	—	BC	B	浅黄橙	30	91-68ケリット
34	土師器	塊	(8.3)	—	4.8	BC	B	淡黄	50	93-68ケリット
35	土師器	壺	11.1	4.0	7.6	BC	B	にぶい橙	60	83-64ケリット
36	土師器	壺	—	—	—	BC	B	にぶい橙	80	83-64ケリット
37	土師器	塊	—	4.3	—	B	B	橙	80	95-70ケリット
38	土師器	(塊)	—	4.5	—	B	B	淡黄	60	94-70ケリット
39	土師器	小型壺	(9.1)	—	—	BC	B	浅黄橙	20	92-68、93-69ケリット
40	土師器	壺か堵	—	4.2	—	B	B	浅黄橙	—	94-69ケリット
41	土師器	壺	—	—	—	ABC	B	灰褐	60	97-70ケリット 他
42	土師器	壺	—	—	—	ABC	B	にぶい橙	60	93-68、94-69ケリット

## 包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
43	土師器	壺	(9.4)	—	—	BCD	B	橙	40	93-68ケリット
44	土師器	壺	9.1	6.5	13.1	BC	B	橙	90	92-67ケリット
45	土師器	壺	—	—	—	BC	B	淡黃	80	90-66ケリット
46	土師器	壺	—	4.6	—	B	B	淺黃橙	60	97-72ケリット
47	土師器	壺	—	—	—	B	B	橙	70	95-69ケリット
48	土師器	壺	(10.0)	—	—	BC	B	橙	30	91-67ケリット
49	土師器	高壺	—	(19.5)	—	BC	B	橙	40	95-70ケリット他
50	土師器	高壺	—	(20.0)	—	BC	B	橙	40	91-67ケリット
51	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	80	90-66ケリット他
52	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	橙	90	90-66ケリット
53	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	70	84-65ケリット
54	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	90	91-66ケリット
55	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	90	96-71ケリット
56	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	70	96-71ケリット
57	土師器	高壺	—	—	—	BCF	B	橙	80	97-71ケリット
58	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	70	96-70ケリット
59	土師器	高壺	—	12.8	—	BC	B	淺黃橙	60	95-70ケリット
60	土師器	高壺	—	—	—	ABC	B	にぶい橙	70	94-69ケリット
61	土師器	高壺	—	9.8	—	BC	B	橙	30	96-71ケリット
62	土師器	高壺	—	—	—	BCD	B	淡黃	90	93-69、94-70ケリット
63	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	80	98-72ケリット
64	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	橙	50	96-70ケリット
65	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	淺黃橙	40	90-66ケリット
66	土師器	高壺	—	—	—	BCD	B	橙	40	96-70ケリット
67	土師器	高壺	—	(12.5)	—	BC	B	橙	40	91-68ケリット
68	土師器	高壺	17.1	—	—	BC	B	淺黃橙	60	84-65ケリット他
69	土師器	高壺	—	—	—	BC	B	橙	40	83-65ケリット
70	土師器	鉢	23.0	—	—	BC	B	淺黃橙	60	98-71、97-71ケリット
71	土師器	甌か鉢	(23.4)	—	—	BCD	B	淺黃橙	40	92-67ケリット他
72	土師器	甌の把手	—	—	—	BC	B	淺黃橙	100	93-69ケリット
73	土師器	甌の把手	—	—	—	BC	B	淡黃	100	90-66ケリット
74	土師器	甌の把手	—	—	—	BC	B	淺黃橙	100	91-68ケリット
75	土師器	甌	—	(5.8)	—	BC	B	淺黃橙	40	91-66ケリット
76	土師器	甌	16.0	—	—	BC	B	淺黃橙	50	92-68ケリット
77	土師器	甌	(21.2)	—	—	BC	B	淡黃	40	96-70、95-70ケリット
78	土師器	甌	(18.1)	—	—	BC	B	にぶい橙	30	97-72ケリット
79	土師器	甌	15.2	6.4	27.4	BC	B	橙	80	92-69ケリット他
80	土師器	甌	(16.3)	—	—	BC	B	淺黃橙	30	96-71ケリット
81	土師器	甌	(16.6)	—	—	BC	B	淺黃橙	20	93-69ケリット
82	土師器	甌	16.5	—	—	BC	B	淺黃橙	40	96-71ケリット
83	土師器	甌	14.8	5.6	(26.7)	BC	B	淺黃橙	50	97-71ケリット
84	土師器	壺	(19.8)	7.4	(26.0)	BCD	B	橙	60	95-69ケリット
85	土師器	(台付甌)	18.5	—	—	BC	B	淺黃橙	50	90-66、95-70ケリット
86	土師器	台付甌	(13.5)	7.8	—	BCD	B	黒褐	60	82-65ケリット

## 包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
87	土師器	台付甕	—	—	—	BC	B	淡黃	80	82-64ケリット
88	土師器	甕	(20.5)	9.3	—	BC	B	淺黃橙	70	95-69ケリット
89	土師器	壺	21.3	—	—	BC	B	橙	90	97-70ケリット
90	土師器	壺	(19.2)	—	—	BC	B	橙	20	89-66ケリット
91	土師器	壺	(25.7)	7.5	—	BCF	B	橙	60	94-69ケリット
92	土師器	壺	(18.5)	—	—	BC	B	橙	40	96-71ケリット
93	土師器	壺	(18.0)	—	—	BC	B	橙	70	92-68ケリット、他
94	土師器	壺	22.8	—	—	BC	B	淺黃橙	60	97-71、98-71ケリット
95	土師器	壺	22.5	—	—	BC	B	淺黃橙	70	99-70ケリット
96	須恵器	蓋	—	—	—	—	A	灰	30	91-68ケリット
97	須恵器	蓋	—	—	—	A	B	灰	40	95-70ケリット
98	須恵器	坏	—	—	—	A	A	灰	40	90-67ケリット、他
99	須恵器	はそう	—	—	—	A	A	灰	95	90-66ケリット、他 陶邑産
100	須恵器	壺	—	—	—	A	A	灰白	40	94-69ケリット
101	須恵器	はそう	—	—	—	A	A	灰	40	92-68、93-69ケリット
102	須恵器	長頸壺	—	—	—	A	A	灰白	90	98-72ケリット 湖西産
103	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	96-70ケリット、他
104	須恵器	甕	(46.3)	—	—	A	B	灰	10	83-65、84-65ケリット 破片の一片が人為的に存在
105	須恵器	甕	(44.4)	—	—	A	A	暗灰	20	97-72ケリット
106	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	90-67、96-71ケリット
107	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	89-67ケリット
108	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰白	—	97-72ケリット
109	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	90-66、92-67ケリット
110	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	81-65、82-65ケリット
111	須恵器	甕	(44.0)	—	—	A	A	灰	10	94-68ケリット 縁部外面波状文（一位15条）
112	手捏土器	塊	(5.6)	3.5	2.8	BC	B	淺黃橙	60	97-72ケリット
113	石製模造品	有孔円板	—	3.2	0.4	—	—	—	—	93-69ケリット 重さ:(5.4)g 石質:滑石
114	石製模造品	劍形品	—	2.9	0.5	—	—	—	—	96-71ケリット 重さ:(12.8)g 石質:滑石
115	石製模造品	(劍形品)	—	—	0.7	—	—	—	—	95-69ケリット 重さ:(10.2)g 石質:滑石
116	須恵器	蓋	(16.7)	—	—	AE	B	灰黃	40	94-69、94-70ケリット
117	須恵器	坏	—	9.2	—	AE	B	灰	80	97-71ケリット、底部調整B
118	須恵器	坏	—	7.1	—	AE	B	灰	90	97-71ケリット、底部調整D
119	須恵器	坏	—	7.9	—	AE	B	灰	80	81-65ケリット、底部調整D
120	須恵器	坏	—	5.7	—	AE	B	灰	70	89-66ケリット、底部調整A 火薙痕あり。
121	須恵器	坏	(11.2)	(6.0)	(4.1)	AE	B	灰	20	89-65ケリット、底部調整A
122	須恵器	坏	(11.9)	—	—	AE	B	灰	30	89-66ケリット
123	須恵器	坏	—	(5.4)	—	AE	B	灰	30	94-68ケリット、底部調整A
124	須恵器	高台付塊	—	7.6	—	AE	B	灰	80	96-70ケリット、底部調整Bの後、高台を貼り付ける。
125	土師質土器	坏	—	6.7	—	BC	B	淺黃橙	80	93-68ケリット、底部調整A 内面黒色処理
126	土師質土器	高台付塊	—	—	—	C	B	淺黃橙	80	81-65ケリット
127	須恵器	甕	(26.4)	—	—	A	B	灰	30	92-68ケリット、他

根 切

包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
128	須恵器	甕	—	21.4	—	ACG	D	灰黃	60	89-66グリット他
129	陶器	鉢	(35.9)	—	—	A	A	にぶい橙	10	93-69グリット 常滑産
130	陶器	壺	—	—	—	A	A	灰白	10	瀬戸産
131	舶載磁器	青磁碗	—	—	—	—	A	灰白	20	82-65グリット 糜は濃緑色。
132	土製品	(土錘)	2.7	1.7	1.7	ABC	B	にぶい褐	100	重さ:10.9g

第8表 根切遺跡第3地点遺物観察表

表採

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	埴輪	—	—	—	—	ABCF	B	橙	—	
2	須恵器	甕	(28.7)	—	—	A	B	灰	20	
3	須恵器	蓋	—	—	—	AE	B	灰	40	
4	舶載磁器	青磁碗	(17.4)	—	—	—	A	灰白	20	竜泉窯系
5	陶器	鉢	—	(15.0)	—	A	A	赤灰	20	
6	磁器	碗	—	3.0	—	—	A	灰白	80	肥前 外面染付け文様あり。

第1号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	(10.6)	—	—	BCF	B	橙	30	器表面の剥離が著しい。
2	土師器	壺	(12.2)	—	3.6	BC	B	橙	60	口唇部内面に一条の沈線あり。
3	土師器	壺	15.0	—	—	BC	B	明赤褐	30	内面にミガキ調整。
4	土師器	壺	12.3	—	3.4	BCF	B	灰褐	95	
5	土師器	壺	13.4	—	3.5	BC	B	浅黄橙	60	器表面の剥離が著しい。
6	土師器	壺	14.4	—	—	BC	A	橙	20	内面ミガキ調整 漆が付着。
7	土師器	壺	15.1	—	—	BC	B	橙	20	
8	須恵器	高台付壺	—	—	—	A	A	灰白	30	内面に銅の溶解物が付着。
9	須恵器	壺	16.6	11.3	4.6	AE	B	淡黄	80	底部調整B
10	須恵器	壺	—	—	—	A	B	灰	30	県北産
11	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰白	20	
12	土師器	甕	(23.0)	9.0	(30.0)	BCDG	B	橙	40	器表面の剥離が著しい。
13	土師器	壺	18.9	8.0	31.2	BCD	B	橙	90	

第2号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	10.8	—	3.5	CF	B	橙	100	内面全体に漆が付着している。
2	土師器	壺	12.6	—	3.0	BC	B	橙	70	器表面の剥離が著しい。
3	土師器	壺	10.7	—	2.8	BCF	B	橙	70	器表面の剥離が著しい。
4	土師器	壺	11.4	2.0	2.4	BCF	B	橙	60	器表面の剥離が著しい。
5	土師器	壺	15.1	—	—	BCF	B	灰黃	30	
6	須恵器	壺	9.0	—	3.2	A	A	灰	100	底部ヘラ切り
7	須恵器	高台付壺	(15.2)	11.2	3.9	A	A	灰白	40	湖西産
8	須恵器	壺	—	—	—	ACF	C	灰黃	30	在地産
9	土師器	壺	9.2	—	—	BCE	B	橙	40	口唇部内面に一条の沈線あり。
10	土師器	壺	(9.7)	—	2.8	BCE	B	明赤褐	40	口唇部内面に一条の沈線あり。
11	土師器	壺	10.2	—	—	BC	B	橙	20	口唇部内面に一条の沈線あり。

## 第2号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
12	土師器	壺	10.0	—	4.1	BC	B	橙	40	器表面の剥離が著しい。
13	土師器	甌	19.7	8.9	21.0	BC	B	浅黄橙	95	器表面の剥離が著しい。
14	土製品	支脚	—	—	—	BC	B	橙	90	

## 第3号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	須恵器	甌	—	—	—	A	B	灰	40	頸部のつけねに突帯がめぐる。
2	須恵器	平瓶か壺	—	—	—	A	B	灰	60	県北産 胴部下半格子目叩き
3	土師器	壺	(11.0)	—	3.3	BCEF	B	にぶい橙	60	
4	土師器	壺	(13.9)	—	—	BCF	B	橙	40	器表面の剥離が著しい。

## 第5号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	15.5	10.7	3.0	B	B	橙	20	相模型壺の可能性あり。
2	須恵器	蓋	—	—	—	A	A	灰白	60	(湖西産)
3	須恵器	蓋	—	—	—	AE	B	灰	60	
4	須恵器	蓋	—	—	—	AE	B	灰	20	
5	須恵器	蓋	—	21.5	—	ACDH	C	淡黄	20	県北産
6	須恵器	長頸壺	—	—	—	A	A	灰白	20	湖西産
7	土師器	高壺	—	13.7	—	BC	B	橙	100	器表面の剥離が著しい。
8	石製品	砥石	4.0	1.8	2.2	—	—	—	—	重さ:32.0g 石質:凝灰岩
9	土師器	台付甌	(14.2)	—	—	BC	B	橙	40	器表面の剥離が著しい。
10	土師器	甌	21.2	7.2	31.7	BC	B	浅黄橙	95	
11	土師器	壺	20.6	—	—	BCF	B	明赤褐	50	

## 第7号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	(11.0)	—	—	BC	B	橙	30	
2	須恵器	甌	—	18.8	—	ADE	B	暗灰	20	外面平行叩き
3	軽石	—	6.1	4.8	2.4	—	—	—	100	全面摺れている。

## 第8号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	須恵器	甌	—	—	—	A	A	灰	—	
2	土製品	支脚	20.0	12.0	9.5	BC	B	浅黄橙	100	

## 第9号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	10.9	—	—	BCF	B	橙	50	
2	須恵器	高台付壺	—	11.1	—	A	C	灰白	20	底部調整Bの後、高台を貼り付ける。
3	須恵器	高台付壺	—	10.4	—	A	B	灰	90	底部調整Bの後、高台を貼り付ける。
4	石製品	砥石	—	3.4	2.6	—	—	—	—	
5	土師器	壺	21.6	—	—	C	B	橙	40	器表面の剥離が著しい。

## 第10号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	(14.3)	—	—	BC	B	橙	40	

## 第10号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
2	土師器	壺	(13.1)	—	—	BCF	B	橙	30	
3	須恵器	蓋	(19.5)	—	1.9	AB	C	浅黃橙	50	
4	須恵器	高台付壺	19.2	13.8	4.5	A	A	灰	70	底部ヘラ切りか。
5	土師器	甕	—	4.1	—	BC	B	赤褐	70	
6	土師器	甕	20.1	—	—	BC	B	にぶい橙	40	外面木口状工具の痕あり。
7	須恵器	甕	(24.6)	—	—	AE	B	浅黃橙	20	

## 第11号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	甕	(17.8)	—	—	BC	B	浅黃橙	10	
2	土師器	甕	(22.4)	—	—	BC	B	にぶい褐	30	
3	土師器	壺	(16.2)	—	—	BC	B	橙	20	器表面の剥離が著しい。
4	土師器	甕	19.0	—	—	BC	B	にぶい褐	70	
5	土師器	壺	20.5	—	—	BC	B	浅黃橙	40	
6	土師器	甕	(21.6)	—	—	BC	B	橙	20	器表面の剥離が著しい。

## 第12号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	12.0	—	—	BCF	B	橙	20	
2	土師器	壺	15.4	—	—	BCD	B	にぶい橙	30	内面丁寧なミガキ調整
3	須恵器	蓋	—	(16.3)	—	AD	B	灰	30	
4	須恵器	壺	18.0	13.0	3.6	ACEH	C	にぶい褐	80	底部調整B
5	土師器	皿	22.3	—	3.1	CF	C	浅黃橙	70	内面方斜状暗文あり。
6	土師器	甕	20.3	—	(33.4)	BCDF	B	にぶい橙	50	
7	土師器	甕	—	7.2	—	BCDF	B	にぶい橙	40	
8	土師器	甕	—	7.9	—	BC	B	にぶい橙	90	
9	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	
10	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	
11	土製品	支脚	—	—	8.7	BC	B	浅黃橙	—	

## 第13号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	鉄製品	(刀子)	—	0.9	0.4	—	—	—	—	
2	鉄製品	釘	—	0.5	0.5	—	—	—	—	

## 第14号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
1	土師器	壺	11.4	—	—	BCF	B	橙	50	
2	須恵器	高台付壺	11.2	8.2	3.4	A	A	灰白	40	
3	須恵器	高台付壺	—	10.3	—	A	B	灰白	90	
4	須恵器	蓋	(10.2)	—	4.0	A	B	灰白	40	天井部にヘラ記号「×」あり。
5	須恵器	長頸壺	(11.5)	—	—	A	B	青灰	20	
6	須恵器	甕	—	—	—	A	B	にぶい橙	—	
7	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰	—	
8	須恵器	甕	—	—	—	A	A	青灰	—	
9	須恵器	甕	—	—	—	A	A	青灰	—	内面1cm大の火ぶくれが多い。
10	土師器	甕	—	—	—	BC	B	浅黃橙	40	

## 第15号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
1	須恵器	蓋	—	—	—	AE	B	灰	40	

## 第16号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
1	土師器	壺	10.5	—	—	BC	B	浅黄橙	40	
2	土師器	塊	9.9	—	5.8	BC	B	橙	90	
3	土師器	甕	—	5.8	—	BCF	C	にぶい橙	80	
4	土師器	甕	—	7.5	—	BC	B	浅黄橙	60	

## 第17号住居跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
1	須恵器	壺	—	(8.9)	—	AE	B	灰	30	底部調整B
2	須恵器	高台付壺	—	9.6	—	A	A	灰白	50	底部調整Bの後、高台を貼り付ける。
3	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰	—	
4	須恵器	甕	—	—	—	A	B	青灰	—	

## 第1号溝跡

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
1	土師器	甕	(20.6)	—	—	BCF	B	橙	40	
2	土師器	甕	21.1	—	—	BC	B	橙	20	
3	灰釉陶器	広口瓶	25.5	—	—	A	A	灰	30	

## 北側調査区遺物包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
1	土師器	壺	(11.6)	—	—	B	B	にぶい橙	40	10ヶリット
2	土師器	壺	10.7	—	3.6	BCF	B	淡黄	60	6ヶリット 縁部と内面黒色処理。
3	土師器	壺	11.4	—	3.2	BCF	B	橙	70	8ヶリット 器表面の剥離が著しい。
4	土師器	壺	(10.7)	—	—	BCF	B	橙	30	8ヶリット 器表面の剥離が著しい。
5	土師器	壺	(12.2)	—	—	BC	B	橙	40	8ヶリット
6	土師器	壺	14.0	—	—	BCF	B	浅黄橙	60	8ヶリット
7	土師器	壺	13.5	—	—	BC	B	橙	30	8ヶリット
8	土師器	壺	13.3	—	5.7	BCD	B	橙	40	8ヶリット
9	土師器	高壺	—	12.8	—	BC	B	浅黄橙	80	8ヶリット
10	土師器	皿	(23.8)	—	—	BCF	B	明黄褐	20	9ヶリット 内面ミガキ後黒色処理
11	土師器	壺	—	—	—	BC	B	浅黄橙	30	8ヶリット
12	土師器	甕	(24.8)	—	—	BC	B	淡黄	20	95-113ヶリット
13	土師器	甕	(28.0)	—	—	BC	B	橙	20	5ヶリット
14	土師器	甕	—	(9.6)	—	BC	B	にぶい橙	30	10ヶリット
15	須恵器	蓋	(23.0)	—	—	AE	B	灰白	20	8ヶリット
16	須恵器	蓋	—	(10.1)	—	—	B	灰	30	8ヶリット
17	須恵器	蓋	—	—	—	A	B	灰白	30	9ヶリット
18	須恵器	蓋	(17.5)	—	—	A	B	灰	20	8ヶリット 内面に自然釉が付着。
19	須恵器	壺	(10.2)	—	2.7	A	A	灰	40	7ヶリット
20	須恵器	壺	11.4	—	3.0	A	C	灰白	30	
21	須恵器	蓋	(10.3)	—	—	A	A	灰	30	9ヶリット
22	須恵器	平瓶か壺	—	—	—	A	B	灰	20	10ヶリット 県北産

## 北側調査区遺物包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色 調	残存	備 考
23	須恵器	壺	—	—	—	AH	B	灰	40	8ケリット 県北産
24	須恵器	短頸壺	—	—	—	A	A	灰白	20	9ケリット (湖西産)
25	須恵器	長頸壺	—	—	—	A	A	灰	40	8ケリット
26	須恵器	平瓶	—	—	—	A	B	灰	40	7ケリット 肩部中心に指突痕あり。
27	須恵器	甕	17.5	—	—	A	A	灰	50	8ケリット (湖西産)
28	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰白	—	9ケリット 内面青海波文
29	須恵器	甕	—	—	—	A	B	青灰	20	1ケリット 縁部外面波状文 (一単位1 1条)
30	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰白	—	1ケリット
31	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰	—	7.8ケリット
32	須恵器	甕	—	—	—	A	A	灰白	—	9ケリット (湖西産)
33	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰	—	4ケリット
34	須恵器	甕	—	—	—	A	B	紫灰	—	7ケリット
35	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰白	—	9ケリット 内面青海波文
36	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰	—	4.5、10ケリット
37	石製模造品	剣形品	—	3.6	0.5	—	—	—	—	8ケリット 重さ:(16.7)g 石質:滑石
38	石製模造品	剣形品	—	1.6	0.3	—	—	—	—	8ケリット 重さ:(2.3)g 石質:滑石
39	石製模造品	剣形品	—	2.5	0.5	—	—	—	—	8ケリット 重さ:(21.4)g 石質:滑石
40	土師器	壺	(14.0)	—	—	BC	B	橙	30	5ケリット
41	土師器	壺	(14.7)	—	—	BC	B	橙	40	5、10ケリット
42	須恵器	蓋	—	16.1	—	A	B	灰白	60	8ケリット 湖西産
43	須恵器	蓋	16.0	—	—	A	A	灰白	40	10ケリット (湖西産)
44	須恵器	蓋	—	(21.9)	—	AE	B	灰	30	7ケリット
45	須恵器	壺	—	7.4	—	A	B	灰	30	8ケリット 底部調整BかD
46	須恵器	壺	—	7.5	—	AE	B	灰	60	7ケリット 底部調整B ヘラ記号 「×」あり。
47	須恵器	壺	—	7.0	—	AE	B	灰白	70	8ケリット 底部調整B
48	須恵器	壺	—	(7.7)	—	AE	B	灰	40	8ケリット 底部調整B
49	須恵器	壺	13.7	9.1	3.4	AE	B	灰	60	8ケリット 底部調整D
50	須恵器	壺	—	7.7	—	AE	B	灰白	60	8ケリット 底部調整D
51	須恵器	壺	—	8.0	—	AE	B	灰白	80	8ケリット 底部調整B
52	須恵器	壺	—	8.2	—	AE	B	灰白	30	8ケリット 底部調整D ヘラ記号 「×」あり。
53	須恵器	壺	13.2	(9.0)	3.6	AE	B	灰	20	8ケリット 火襷痕あり。
54	須恵器	壺	—	(8.7)	—	AE	B	灰	30	8ケリット 底部調整D
55	須恵器	壺	—	7.8	—	AE	B	灰	60	8ケリット 底部調整D
56	須恵器	塊	19.7	—	—	AE	A	灰	30	8ケリット
57	須恵器	壺	13.1	8.2	3.5	A	B	灰	30	9ケリット 底部調整A
58	須恵器	壺	(12.4)	—	—	AE	B	灰	30	8ケリット
59	土師器	台付甕	(14.0)	—	—	BC	B	橙	30	8ケリット
60	土師器	台付甕	(14.0)	—	—	BCF	B	にぶい赤褐	30	8ケリット
61	須恵器	甕	—	—	—	A	B	紫灰	—	7ケリット
62	瓦	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	8ケリット 別表参照
63	瓦	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	7ケリット 別表参照
64	陶器	瓶子	—	—	—	—	A	灰白	20	瀬戸・美濃産
65	陶器	鉢	(30.0)	—	—	A	A	灰白	20	7ケリット 常滑産

## 北側調査区遺物包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備考
66	陶器	鉢	—	(18.6)	—	A	A	赤灰	10	2か所断面が人為的にすらされている。
67	陶器	大甕	—	(11.5)	—	—	A	暗赤灰	30	7ヶリット 常滑産
68	陶器	天目茶碗	—	5.0	—	A	A	灰白	80	9ヶリット 濬戸・美濃産
69	石製品	硯	—	—	12.2	—	—	—	—	7ヶリット 重さ: (82.2)g 石質:凝灰岩
70	石製品	砥石	—	3.6	—	—	—	—	—	10ヶリット 重さ: (83.1)g 石質:凝灰岩
71	土師器	壺	9.2	—	3.0	BC	B	浅黄橙	70	95-113ヶリット
72	土師器	壺	(12.2)	—	—	BCE	B	褐灰	40	95-113ヶリット
73	須恵器	短頸壺	(10.0)	—	—	A	A	灰白	40	95-113ヶリット 湖西産
74	須恵器	大甕	—	—	—	A	B	灰白	—	95-113ヶリット

## 南側調査区遺物包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師器	壺	13.4	—	—	BCD	B	浅黄橙	30	
2	須恵器	蓋	—	—	—	AE	B	灰	60	火襷痕あり。
3	須恵器	壺	(12.5)	7.0	3.9	AE	B	灰白	60	底部調整D
4	須恵器	壺	13.0	7.0	3.9	A	B	淡橙	50	底部調整D
5	鉄製品	(刀子)	—	2.2	0.5	—	—	—	—	
6	青銅製品	煙管	—	—	—	—	—	—	—	雁首
7	土師器	壺	(13.5)	—	4.8	BC	B	浅黄橙	60	94-116ヶリット
8	土師器	壺	13.1	—	5.0	BCF	B	浅黄橙	90	94-116ヶリット
9	土師器	壺	(14.6)	4.0	4.8	BC	B	橙	70	94-115ヶリット
10	土師器	壺	11.9	—	—	BC	B	橙	50	94-116ヶリット
11	土師器	壺	(12.9)	—	—	BCF	B	浅黄橙	30	94-116ヶリット
12	須恵器	壺	(10.0)	—	—	A	A	灰	30	
13	土師器	壺	11.0	—	—	BCE	A	橙	30	94-116ヶリット
14	土師器	高壺	—	(11.4)	—	BC	B	橙	70	94-116ヶリット
15	土師器	甕	(20.4)	—	—	BCF	B	暗褐	30	
16	土師器	壺	21.0	—	—	BCF	B	浅黄橙	90	
17	土師器	壺	(11.6)	—	—	BCF	B	淡黄	40	
18	土師器	壺	(14.2)	—	—	BC	B	浅黄橙	40	94-116ヶリット
19	土師器	壺	15.9	—	—	BCF	B	淡黄	20	口縁部、内面黒色処理
20	土師器	壺	12.5	—	—	BC	B	浅黄橙	50	94-116ヶリット
21	土師器	壺	(11.4)	—	4.6	BC	B	橙	40	
22	土師器	壺	(12.3)	—	—	BCF	B	浅黄橙	20	
23	土師器	壺	(12.2)	—	4.5	BC	B	橙	40	94-116ヶリット
24	土師器	高壺	—	—	—	BCF	B	橙	70	94-116ヶリット
25	土師器	壺	(12.5)	—	5.7	BC	B	赤褐	80	94-116ヶリット
26	土師器	壺	(14.1)	—	5.4	BCF	B	橙	40	94-115ヶリット
27	土師器	壺	(13.0)	—	—	BC	B	橙	30	94-115ヶリット
28	須恵器	蓋	(10.1)	—	3.5	A	B	灰	50	
29	須恵器	蓋	—	(15.6)	—	A	B	灰白	10	外面自然釉付着
30	須恵器	蓋	—	20.9	—	A	B	灰	10	94-116ヶリット
31	須恵器	蓋	—	(15.4)	—	A	A	灰	20	外面自然釉付着
32	須恵器	壺	9.6	—	3.1	AC	B	灰	30	94-116ヶリット

根 切

南側調査区遺物包含層

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
33	須恵器	壺	(10.0)	6.2	4.0	AE	B	灰	30	底部調整C
34	須恵器	高台付壺	—	10.4	—	A	B	灰	40	94-116ケリット
35	須恵器	盤	21.6	17.5	2.6	A	A	灰	20	底部調整B
36	須恵器	盤	(32.5)	—	—	A	B	灰	10	
37	須恵器	甕	(27.0)	—	—	A	B	灰	20	
38	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰	—	94-116ケリット
39	須恵器	甕	—	—	—	A	B	灰	—	
40	須恵器	壺	16.9	—	—	AC	B	灰白	30	
41	須恵器	壺	—	(8.3)	—	AE	B	灰白	40	底部調整D
42	瓦	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	瓦観察表参照
43	瓦	平瓦	—	—	—	—	—	—	—	95-116ケリット 瓦観察表参照

包含層出土工房関連遺物

番号	種類	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存	備 考
1	須恵器	壺	—	8.3	—	A	B	灰	40	94-116ケリット 漆貯蔵壺
2	須恵器	(平瓶)	—	—	—	A	B	灰白	40	漆貯蔵壺
3	須恵器	壺	(12.2)	—	—	A	B	灰	20	外外面漆が付着。
4	須恵器	平瓶	—	—	—	AF	B	灰白	10	内面漆が付着。
5	土製品	とりべ	(13.2)	—	—	BC	B	灰白	50	未使用
6	土師器	壺	12.1	—	—	—	A	橙	40	94-115ケリット 内面暗文
7	土製品	羽口	—	7.2	6.4	BC	B	橙	—	先端部欠損
8	土製品	—	5.8	4.6	5.0	BC	B	橙	100	重さ:139.0g
9	土製品	(鋳型)	(12.2)	—	—	C	B	灰白	30	
10	須恵器	甕片	—	—	—	A	A	灰白	—	11、12と同一個体の破片か。
11	須恵器	甕片	—	—	—	A	A	灰白	—	
12	須恵器	甕片	—	—	—	A	A	灰白	—	
13	須恵器	壺片	—	—	—	C	B	灰白	—	
14	須恵器	壺片	—	—	—	A	B	灰	—	
15	須恵器	蓋片	—	—	—	A	B	灰	—	

第9表 根切遺跡第3地点瓦観察表

北側調査区包含層

番号	種類	胎土	焼成	色調	特徴他
62	丸 瓦	A	B	灰	凸面はナデ整形。凹面の布目数は7×7。側面、端面はヘラ削り整形。端面には布目圧痕が一か所残る。角を落としている。
63	丸 瓦	A	B	灰	凸面はナデ整形。凹面の布目数は7×8。端面はヘラ削り整形。北側調査区の包含層の62と同一個体か。

南側調査区包含層

番号	種類	胎土	焼成	色調	特徴他
42	平 瓦	A	B	灰	凸面はナデ整形。凹面の布目数は7×9。端面の整形は遺存状態が悪く不明。
43	丸 瓦	A	B	灰	凸面はナデ整形。凹面の布目数は6×7。

## VI 結語

本文の中で、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・古墳跡の時代については触れなかったので、ここでそれらを含めて今回の発掘調査の成果をまとめておきたい。

### 1 各遺跡の時期と性格

#### (1) 水判土堀の内遺跡

今回の調査区は自然堤防と低地にまたがっており、自然堤防では集落と古墳跡の存在が確認できた。一方、低地では集落で不要となったものを投棄したために形成されたと思われる遺物包含層と祭祀跡の存在が確認できた。遺構の種類と総数は以下のようになる。

堅穴住居跡：30軒

掘立柱建物跡：1棟

古墳跡：1基

土壙：16基

井戸跡：23井

祭祀跡：1基

焼土遺構：1基

溝跡：14条

堀跡：1本

堅穴住居跡は計30軒検出され、その時代は古墳時代後期から平安時代にわたっている。

古墳時代後期：7軒（第5号住居跡、第8号住居跡、第11号住居跡、第12号住居跡、第14号住居跡、第21号住居跡、第28号住居跡）

奈良時代：2軒（第2号住居跡、第18号住居跡）

平安時代：14軒（第1号住居跡、第17号住居跡、第9号住居跡、第13号住居跡、第16号住居跡、第17号住居跡、第19号住居跡、第20号住居跡、第22号住居跡、第23号住居跡、第24号住居跡、第25号住居跡、第26号住居跡、第27号住居跡）

上記以外の第4号住居跡、第3号住居跡、第6号住居跡、第10号住居跡、第15号住居跡、第29号住居跡、第30号住居跡の7軒は時期を確定できない。

掘立柱建物跡は1棟しか認識できず、その時期は確定できない。柱の掘り方が比較的小さいので古代ではなく中世か近世のものの可能性が高い。

古墳跡は周掘の底面が残っていただけで、墳丘はすでに失われていた。周掘の形態から円墳と思われる。小破片の遺物しか出土しなかったので時期は確定できない。

次に各時代ごとの成果をまとめてみたい。

古墳時代の遺構としては堅穴住居跡9軒、古墳跡1基、祭祀跡1基、土壙1基が検出された。いずれも古墳時代でも後期に属する。この時代、自然堤防上は集落と基域になっていた。ここで問題

となるのは住居と古墳の時期差であろう。9軒の竪穴住居跡にも時間があり、床面近くや住居内土壤・ピットから出土した遺物を手掛りに新旧を考えると次のようになる。古い順に挙げると第12号住居跡→第11号住居跡・第21号住居跡・第28号住居跡→第5号住居跡・第8号住居跡（第14号住居跡は出土遺物の時期に幅があるため確定できない）。第12号住居跡は半球状で丸底になり、口縁部が内側に入る形態の土師器壺（第47図1）や胴部にまだ膨らみのある形態の土師器甕（第47図7・8・9）が出土していることから実年代はおおむね6世紀前半としておきたい。次の一群は、第11号住居跡から陶邑窯跡群の資料と比較すると高蔵10号窯前後の形態の須恵器壺（第43図7）や口径が14cm近くに復元でき、器高があまり高くない土師器壺（第43図2・3）が出土していることから実年代はおおむね6世紀後半としておきたい。一番新しい1群は、口径が12cm前後の土師器壺（第35図2）や胴部があまり膨らまない形態の土師器甕（第35図6・7）が出土していることから実年代はおおむね7世紀前半としておきたい。一方、すでに述べたように古墳跡の時期については今回の発掘資料からその時期を確定することはできなかった。古墳跡と住居跡の位置はかなり近接しており、同じ場所に集落と古墳が共存していたことはありえないが、残念ながら今回の調査ではその新旧関係を判断する資料を得ることができなかった。

奈良時代の遺構としては竪穴住居跡2軒が検出され、この時代に自然堤防上は集落になっていた。第2号住居跡からは瓦が数多く出土した。完形に近い平瓦は粘土横紐一枚造りで、凸面には正格子目叩きがあり、判読できなかったが刻印も捺されている（第20図9）。丸瓦は粘土横紐造りのものが多く、凸面は縄目叩きのままのものと、その後にナデ整形を加えているものがある（第19図7・8、第20図10、第21図11～13、第22図14～17）。共伴した須恵器壺は胎土に白色針状物質が含まれていることから南比企窯跡群の製品と思われるが、瓦の胎土には白色針状物質が確認できず産地は特定できない。鴨川流域では古代の瓦を出土する遺跡が多いことで從来注目を集めてきたが、今回の調査で自然堤防上の集落から瓦が出土したのは第2号住居跡、第4号住居跡、第8号住居跡、第28号住居跡の4軒あった。しかし、第2号住居跡以外は破片が覆土から1片出土しただけで、住居に伴うものではなかった。それに対し、低地の遺物包層からは多量の瓦が出土している。第2号住居跡でも瓦はカマドから出土したものを除くと住居廃棄時に投げ込まれたような出土状態であった。集落の中で、瓦がどのような使われ方をしていたのかは今後の課題として残された。

平安時代の遺構としては竪穴住居跡14軒が検出され、この時代に自然堤防上は集落になっていた。第13号住居跡は食膳具に須恵器がなく、指頭圧痕が残る土師器と酸化炎焼成の土師質土器によって構成されていることから実年代は11世紀代に（水口 1989A）、それ以外の住居跡は9～10世紀代に位置付けられる。検出された竪穴住居跡数は平安時代が一番多く、また低地の遺物包層からも多數の遺物が出土しているので、この周辺には平安時代にかなりの数の竪穴住居跡があったものと推測される。遺物が出土しているので、この周辺には平安時代にかなりの数の竪穴住居跡があったものと推測される。遺物包層からは印刻花文や緑彩花文の綠釉陶器の破片が出土しており、今後注意を要する。

中世と近世の遺構としては掘立柱建物跡1棟、井戸跡23井、堀跡1本が検出された。これらの遺構の時期を中世か近世か、明確に分ける根拠を今回の調査からは得ることができなかった。掘立柱

建物跡は1棟しか認識できなかったが、井戸跡が23基も検出されていること、自然堤防の遺物包含層からはかなりの数の中世・近世の遺物が出土していること、発掘区域内では多数のビットが検出されており複数の建物跡があったものと推測されることから、中世・近世の集落が存在していたことは想像に難くない。中世・近世の集落は溝や堀などで区画した中に建物と井戸が配置される場合が多いようなので、本遺跡もこのような景観だったのかもしれない。この場所の字名が「堀の内」というのも示唆的である。堀跡がこの付近では確認されておらず、鴨川の旧流路がこの遺跡をとり囲むように流れているので「堀の内」という地名が残ったのではないかと発掘当初は漠然と思っていた。しかし、トレンチで堀跡の存在が確認できたので、この場所には堀によって区画された集落があったのでこのような地名が残ったのであろう。なお、本遺跡よりも2kmほど北にある遊馬には近世に「東西約500m、南北約600mの楕円形集落のまわりを幅3m程の濠がまわり、濠の外側には集落を核として水田が同心円状に広がり、内側には水田との比高差が2m程ある畑があった」という集落の事例が報告されている（立木 1985年）。

## (2) 林光寺遺跡

今回の調査区は自然堤防上ではあるが、水田造成時の削平により深い遺構しか残っていなかったので、集落があったかはわからない。遺構の種類と総数は以下のようになる。

溝 跡：7条

旧河川跡：1本

土 壤：6基

個々の遺構の時期については本文で述べてあるので、ここでは成果として取り上げておきたいことを二・三まとめてみたい。

溝跡のうち第1号溝跡・第2号溝跡・第3号溝跡は規模も大きく、水田の用水路または排水路と思われる。底面には磨耗した土器片を含む暗黒色の粘土が厚く堆積し、木杭が溝の方向にそって出土したことから水が流れていたことは確実であろう。ここで問題となるのはどの方向に水が流れていたのかであるが、調査区域が限られ、また平坦なため、その方向は明らかにできなかった。今後この付近を調査する際にこれらの溝跡の続きを検出されることを期待したい。

ところで、第1号溝跡と第2号溝跡の時期を出土物や覆土に含まれる火山灰から考えると、古墳時代後期が中心で、平安時代にはほとんど埋没していたようである。第1号溝跡からは赤彩された土師器壺が数多く出土しており、「比企型壺」と呼ばれている形態のものが多い（第171図35～44）。この形態の土師器壺について筆者はかつて検討を加えたことがあり、それに対応させると今回出土した一群はIII段階第3小期からIV段階第1小期にかけてのものである（水口 1989B）。実年代は7世紀前半ぐらいと考える。完形で出土した壺はこの形態のものが最も多く、溝が機能していた時期は古墳時代後期でも7世紀前半が中心だったようである。

旧河川跡と考えた遺跡は、明確な掘り方がなく、規模も大きかったので溝跡とは区別した。覆土の自然科学分析を行ったところ、覆土下層に浅間B火山灰の純粋層と推定される層が確認でき、この遺構が埋没していく過程の一つの時期を考える上で貴重な手掛りとなった。また珪藻化石や花粉

化石や孢子化石が抽出されたので、古環境を復元する手掛りも得ることができた。

今回、土壌として報告した遺構の中には、形が不整形なものが多く、他の種類の遺構の底面付近の可能性が高いものも多かった。

### (3) 根切遺跡

今回の調査区は鴨川沿いに約700mと長く、遺跡の内容も異なったので、第1地点・第2地点・第3地点の三か所にわけて報告した。第1地点と第2地点は低地に、第3地点は自然堤防にあたっている。第1地点では集落で不要となったものを投棄したための形成されたと思われる遺物包含層の存在が確認できた。第2地点では遺物がわずかに出土したのみで、遺構は検出されなかった。第3地点では集落の存在が確認できた。遺構の種類と総数は以下のようになる。

堅穴住居跡：17軒

土 壤：27基

溝 跡：8条

ピ ッ ト：15本

堅穴住居跡はすべて第3地点で検出され、計17軒ある。その時代は古墳時代後期から奈良時代にわたっている。

古墳時代後期：7軒（第2号住居跡、第3号住居跡、第9号住居跡、第11号住居跡、第14号住居跡、第16号住居跡、第17号住居跡）

奈良時代：4軒（第1号住居跡、第5号住居跡、第10号住居跡、第12号住居跡）

上記以外の第4号住居跡、第6号住居跡、第7号住居跡、第8号住居跡、第13号住居跡、第15号住居跡の6軒は時期を確定できない。

古墳時代後期と奈良時代の堅穴住居跡の実年代は7世紀中頃から8世紀前半に集中している。

本遺跡は約432,000m<sup>2</sup>という広大な面積があり、これまでに大宮市教育委員会が4次にわたり発掘調査を行っている（第3図）。そのうちの第2次～第4次は今回調査区に隣接した場所で。堅穴住居51軒、掘立柱建物跡3棟などが検出された（山口他1992、1993）。調査面積は約1,000m<sup>2</sup>で、限られた狭い範囲に堅穴住居跡が重複して構築されたことが明らかになっている。堅穴住居跡のうち古墳時代後期から奈良時代にかけてのものは49軒とその大半を占めており、今回検出した住居の時期と同じである。なお、第1次調査区はこの地点から約250m離れた場所にあり、調査面積は約600m<sup>2</sup>で、堅穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟などが検出された（山口他 1991）。堅穴住居跡の時期は古墳時代後期が5軒、平安時代以降が1軒である。これらの古墳時代後期の堅穴住居跡は今回調査したものよりも古く、6世紀台が中心である。また、今回第1地点とした遺物包含層からは5世紀代の遺物も多く出土しているので、隣接した自然堤防上に当該期の集落があったことが推測できる。現在は一つの遺跡として認識されている根切遺跡には複数の集落が内包されており、時期によって堅穴住居跡が多く造られた区域が異なっているようである。

第1地点の遺物包含層からは16,000点余の遺物が出土した。その中で注目されるのは、弥生時代中期後葉の宮ノ台式土器と馬歯・馬骨であろう。前者はほぼ完形に復元でき、土圧で押しつぶされ

たような出土状態であった。この付近の自然堤防にいつから人々が生活を開始したのか、また、弥生時代中期にこの周辺がどのように利用されていたのかを今後考える上で貴重な資料である。後者は馬一体がそのまま出土したわけではないが、遺物包含層の形成は古墳時代後期を中心とする。もしその時代の所産と考えるならば、類例が少ないので貴重な資料といえよう。

第3地点の調査区内と第12号住居跡の床面では噴砂が確認された。住居の覆土中にはなかったので住居構築以前、すなわち奈良時代以前の地震によって生じたものと思われる。これまで噴砂が確認された遺跡は深谷市・妻沼町・熊谷市・行田市など県北に多く、地震の時期は平安時代でも9世紀後半から10世紀までの間と推測されている(劍持 1993)。大宮市教育委員会が行った本遺跡の第1次調査でも噴砂が検出されているが、その時期は平安時代以降とされている(山口他 1991)。本例のような県南の事例はまだ少なく、奈良時代以前の地震であるので、地震史を考える上で貴重な資料を提供したことになろう。

## 2 根切遺跡第3地点出土の漆貯蔵容器

根切遺跡第3地点の第6号住居跡から出土した漆を貯蔵した須恵器平瓶は、全国的にみても類例がまだ少なく、遺跡の性格を考える上でも重要な資料なので、ここで別個に取り上げておきたい。

この平瓶は口縁部を打ち欠き、中には漆がかなりの量がまだ残っていた(第257図5)。

このような類例は奈良県明日香村紀寺跡(奈良国立文化財研究所 1988)、奈良県平城京右京八条一坊十四坪(奈良国立文化財研究所 1989)、奈良県明日香村飛鳥池遺跡(奈良国立文化財研究所 1992)、奈良県御所市名柄遺跡(仙台市教育委員会 1992)で報告例がある(註1)。

紀寺跡出土例は寺域の東南部で検出された土壙群のうちの第10号土壙から出土している。これらの土壙群は紀寺造営に関わる鋳銅・漆工・箔工が一体となって作業した工房の廃棄に伴うものと性格付けられている。第10号土壙は長辺3.5m×短辺3m×深さ1.3mと大型で、漆貯蔵容器・漆籠・漆貯蔵具の栓の他にふいごの羽口・炉床・銅滓・焼土・金箔・刀子の柄などが出土している。漆貯蔵容器の出土点数は不明であるが大量で、須恵器平瓶・長頸壺・短頸壺・横瓶や土師器壺など多くの器種があると報告されている(第312図1~5)。壺類は口縁部および体部上半を打ち割り、中の漆を搔き出した痕がある。壺の中には漆が乾かないように木や藁を芯にして布を被せた栓がされていた。時期は出土土器から藤原宮期かやや古い時期(7世紀後半)と考えられている。

平城京右京八条一坊十四坪出土例は、十四坪北区の東北で検出された第2001号土壙から出土している。第2001号土壙は長辺14.3m×短辺2.7m×深さ23cmと長大で、構築当初は第2047号溝と一連の溝であったと考えられている。調査区内で漆工の工房そのものは検出されていないが、漆液を精製・調合する工房から廃棄された遺物群と性格付けられている。この第2001号土壙からは漆貯蔵容器・漆が付着した土器・漆の塊・漆貯蔵具の栓・漆紙文書の他に坩堝・砥石・鉱滓・ふいごの羽口などが出土している。漆貯蔵容器の出土点数は大量で、須恵器・甕や土師器甕などの器種があると報告されている(第312図6~8)。これらのうち、口の狭い須恵器長頸壺は漆の生産地から平城京へ運びこまれた漆運搬容器で、その後工房で口の広い須恵器壺や土師器甕に移し替えられたと推定されている。その証拠に、漆運搬容器は二、三を除きすべて出土しており、割れ口の断面に打撃痕の観

察できるものもある。時期は平城宮III期（8世紀前半）と考えられている。

飛鳥池遺跡出土例は、飛鳥寺東南隅から約100m離れた場所にある漆製品・金属製品・ガラス製品を製作した宮都に関わる官営工房に伴う遺物包含層から出土している。これは工房の廃棄物が堆積した層で、漆貯蔵容器・漆用パレット・漉し布・漆箆・漆刷毛の他に、ふいごの羽口・坩堝・取瓶・木製雛形・ガラス小玉鋳型などが出土している。漆貯蔵容器や漆用パレットは約800点以上あり、漆貯蔵容器の器種には須恵器平瓶・横瓶・台付長頸壺・徳利型の小壺などがある（第312図9～12）。時期は7世紀中頃と藤原宮期（7世紀後半）と考えられている。

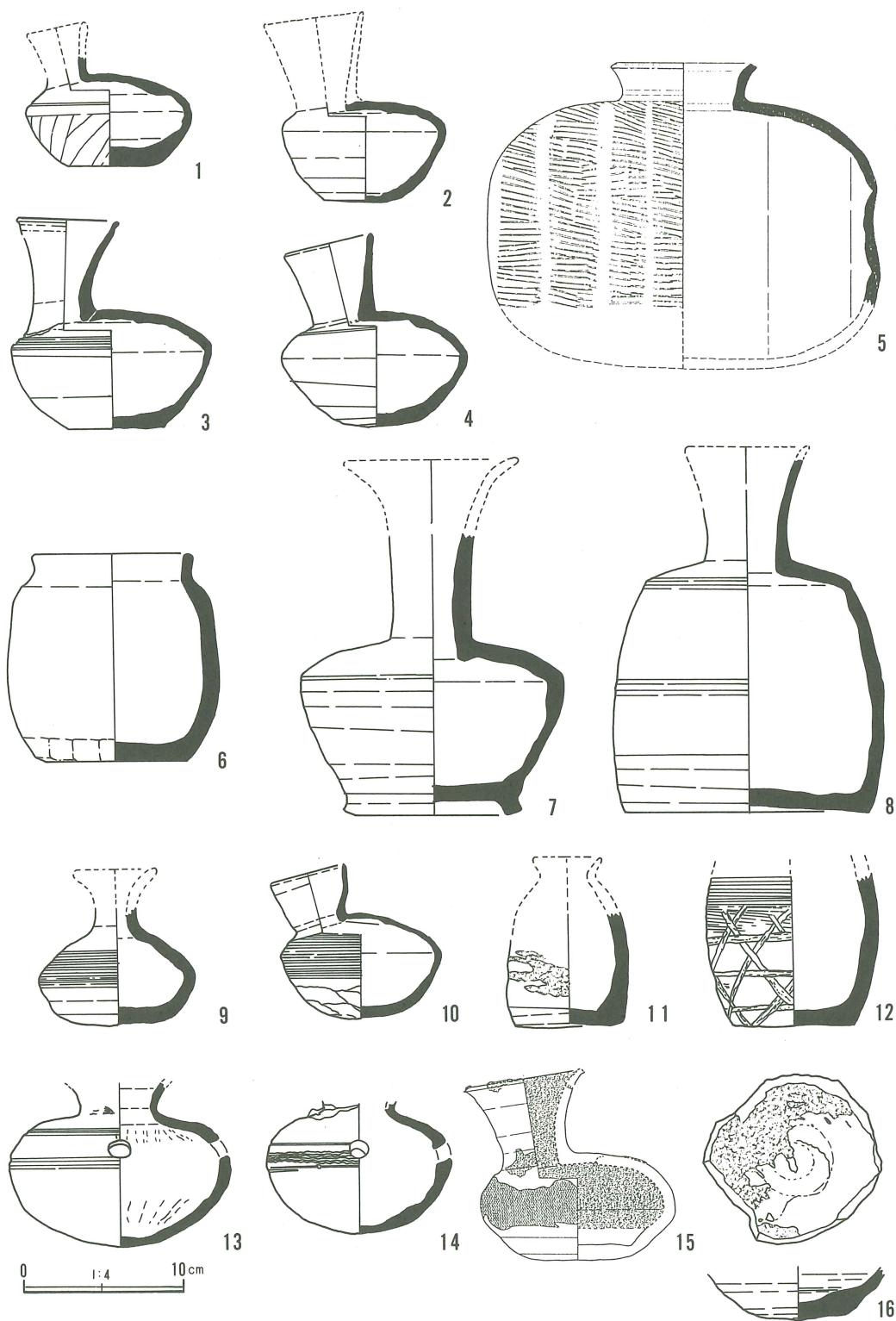
名柄遺跡出土例は居館の堀跡から出土している。堀跡は石垣で護岸され、幅は北西部で3.8m、北東部で11.2mある。調査区内で工房そのものは検出されていないが、漆の入った土師器長頸壺が1点、鉄滓、碧玉のチップ、木製刀把の未製品、木の削り屑などが出土している。時期は古墳時代中期後半から後期前半（5世紀後半から6世紀前半）とされ、居館の中にも存在していたと考えられている。

大菅波D遺跡出土例は弥生時代後期から古墳時代中～後期の集溝から出土している。大溝は幅約8m、深さ約60cmの自然流路で、大量の土器や木製品が出土した。漆貯蔵容器は2点出土しており（第312図13・14）、器種は須恵器壺で双方とも頸部は欠損している。漆は底部内面と肩部外面に顕著に付着しており、胴部外面には漆とともに刷毛の「毛」も付着していた。整理途上であるのでこの他に漆や鋳造などの手工業に関連した遺物があるのか明らかでない。壺の時期は口縁部が欠損するので限定はできないが、陶邑に照らし合わせると陶器山15号窯の形態よりは確実に古いので、古墳時代後期でも6世紀中頃以前と思われる。

郡山遺跡出土例は官衙の南西地区の外郭から100mほど内側にある第1422号土壙から出土している。この土壙からは土師器・須恵器・カマド支脚がまとまって出土した。漆貯蔵容器は1点出土しており、器種は須恵器瓶で、内面全面に漆が付着していた（第312図15）。この他に漆に関連した遺物は出土していない。時期は郡山官衙I期かII期（7世紀後半）と考えられている。

以上筆者の目に触れた6例を紹介したが、いずれの漆貯蔵容器に共通しているのは、口の狭い器種が選ばれていることであろう。これは漆が乾燥せず、ほこりがつきにくくするためである。上記の例から、古墳時代から奈良時代にかけて、漆は口の狭い容器に入れて貯蔵され、漆生産地から製品製作地へ運ばれていたことがわかる。そして、製品製作工房でこれを口の広い容器に集めて調合し、さらにパレットへ小分けしていた。口の広い容器にあける際に、口の狭い容器は打ち割られ、内面に付着した漆をも箆などで搔き出している。漆がそれだけ貴重なものであった証左であろう。根切遺跡出土例は、中にかなりの量の漆が残っており、容器も打ち割られていないので、途中で廃棄されてしまったものようである。

根切遺跡からはこの須恵器平瓶の他に、漆に関連した遺物がいくつか出土している。壺の内面に漆膜が残っていた例は第1号住居跡土師器壺（第248図6）、第2号住居跡土師器壺（第251図1）、第6号住居跡土師器壺（第257図2）、包含層須恵器壺（第311図3）の4例ある。また、瓶類の内面に漆膜が残っていた例は包含層須恵器壺（第311図1）、包含層須恵器平瓶（第311図2）、包含層須恵器平瓶（第311図4）の3例ある。これらよ漆関連遺物は、漆を生産していた工房に伴うものとい



第312図 各遺跡出土漆貯蔵容器

うよりも、漆製品を製作していた工房に伴うものと考えたほうが妥当であろう（註2）。

漆関連遺物で遺構に伴うものは第2号住居跡土師器壺しかないが、この住居跡が工房であったと断言できるその他の手が掛かりはない。今回調査した近辺に工房があったことは間違いないであろう。なお、大宮市教育委員会が調査した隣接地で漆関連遺物と思われるものは1点しか出土していない（山口 1993）。それは第7号住居跡から出土した須恵器壺の底部破片で、内面に漆が付着している（第312図16）。この住居跡もこの他に工房と断言できふような遺物は出土していない。

さらに、前述したように、根切遺跡では青銅製品や鉄製品を鋳造により製作した工房、鉄製品を鍛造により製作した工房もあったことが推測できる。

これらの工房関連遺物の時期は古墳時代後期後半が中心で、下っても奈良時代初頭と思われる。先に紹介した漆貯蔵容器を出土した遺跡とも共通する点は、多種類の製品を一か所に集まって製作していたことである。この時代、手工業はまだ分業が進んでおらず、一つの製品を造るのに、一か所で済むような体制をとっていたようである。そして、名柄遺跡例からは、手工業が在地の首長と密接な関連をもって存在していたことをうかがうことができる。

### 3 鴨川流域の自然堤防の復元と集落（第313図）

現在の鴨川は近世以降の河川改修による流路を流れているので、遺跡が存続していた時代はかなり異なった場所を流れていたものと思われる。そして、これまでの河川改修は自然堤防を掘削しているので、現在は川によって別れ別れになっていても、もとは一つの自然堤防であった場合も少なくない。最後に、今回調査した三遺跡がどの自然堤防にあたるのかについてまとめたい。

水判土掘の内遺跡は現在鴨川に囲まれて独立した自然堤防のようになっているが、もとは大宮大地指扇支台の下に形成された自然堤防Aと一体のものであったと思われる。この自然堤防ではこれまで調査例がないので、今回調査した集落がどのような広がりをもっているのかは今後の調査を待たなければならない。また、古墳群は台地の上でしか現在確認されていないので、今回古墳跡が検出されたことから、自然堤防上にも古墳群が展開していたことが予測されている。

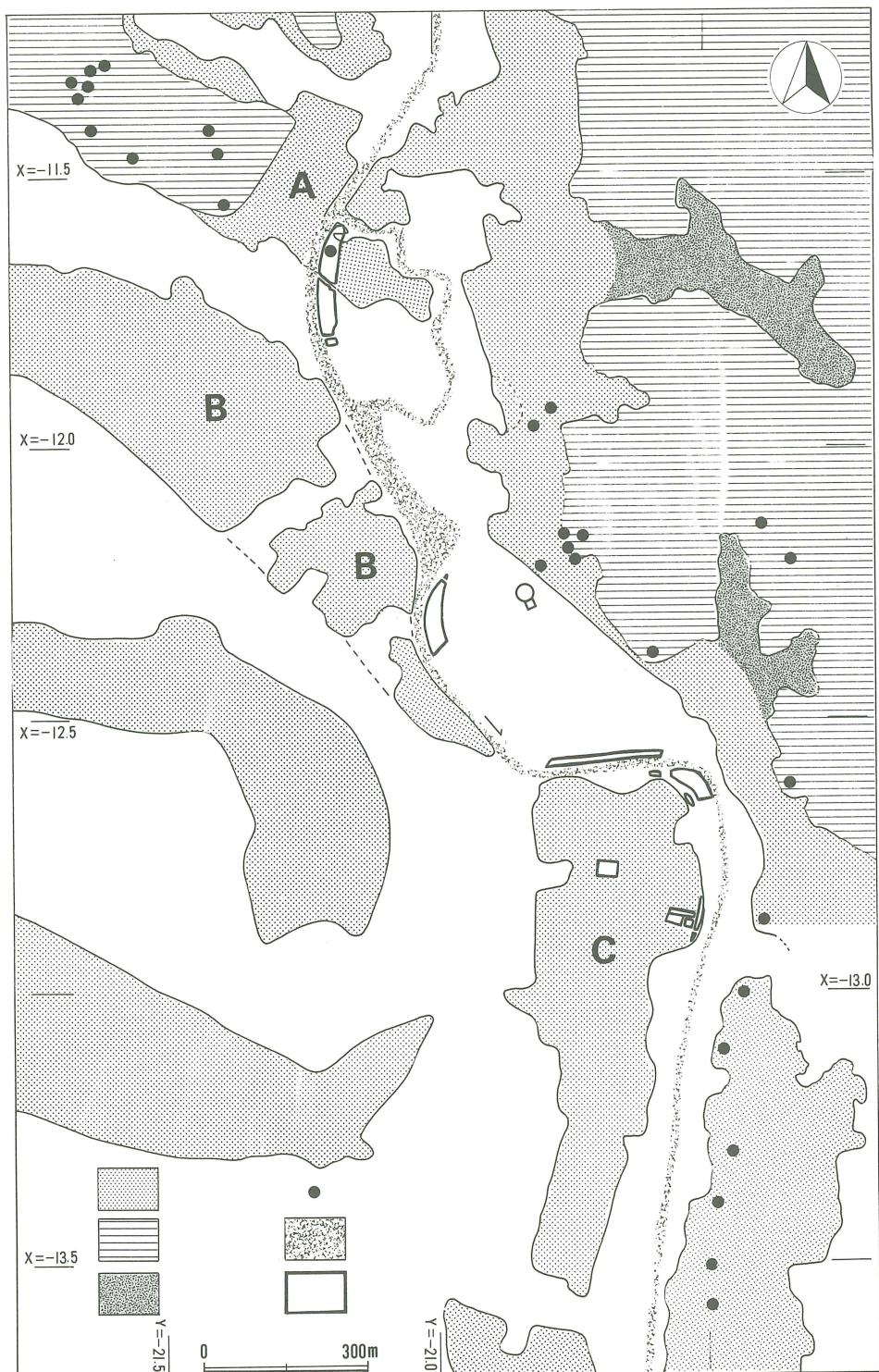
林光寺遺跡の今回の調査区は現在鴨川の左岸に細長く独立して存在しているが、もとは自然堤防Bと一体のものであったと思われる。今回の調査区から西側は現在水田になっているが、自然堤防があった可能性もある。この水田の中からかつて埴輪が出土し、井戸古墳と名付けられた前方後円墳だったので、自然堤防を削平して水田を造成している部分もあるようだ。

根切遺跡は南北に細長い自然堤防C上がすべて遺跡範囲として周知されている。自然堤防形成時には自然堤防Bと一連のものであった可能性が高い。

本来ならば最後に歴史的環境をふまえた上で、今回の調査成果をまとめなければならないが、準備不足で文章にすることができなかった。後日、稿を改め検討を加えたい。

#### 註

- 1 これらの他に出雲国序跡、仙台市袋前遺跡からも出土例があることを北野博司氏からご教示を得た。筆者の目に触れた文献は限られており、未報告のものを含めるともっと出土例があると思われる。



第313図 自然堤防の復元

2 今回は第6号住居跡出土の須恵器平瓶内の漆の成分分析を行っていないので、これが生漆なのか、調合された漆なのかがわからない。今後この結果が明らかになれば、さらに考察を深めることができよう。

#### 引用・参考文献

- 青木 忠雄 1971年 「埼玉県鴨川流域の布目瓦出土遺跡に関する予定」 浦和考古学会研究調査報告書第4集
- 飛鳥資料館 1992年 「飛鳥の工房」 飛鳥資料館図録第26冊
- 浦和市遺跡調査会 1990年 「大久保条里遺跡発掘調査報告書(第4)」
- 立木新一郎他 1985年 「原遺跡発掘調査報告表」 大宮市遺跡調査会報第12集
- 劔持 和夫 1993年 「ウツギ内・砂田・柳町」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書126集
- 笹森紀己子 1991年 「大宮の古墳」 大宮市立博物館研究紀要第3号
- 仙台市教育委員会 1992年 「郡山遺跡X II」 仙台市文化財調査報告書第161集
- 田嶋正和・北野博司 1992年 「加賀市大菅波D遺跡の須恵器について」 北陸古代土器研究第2号
- 奈良国立文化財研究所 1988年 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 18」
- 奈良国立文化財研究所 1989年 「平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告」 奈良国立文化財研究所学報第46冊
- 奈良国立文化財研究所 1992年 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 22」
- 藤田 和尊 1991年 「奈良県御所市名柄遺跡」 日本考古学協会年報42
- 水口由紀子 1989年A 「考古遺物からみた中世成立期の様相 文化財の保護第21号
- 水口由紀子 1989年B 「いわゆる“比企型坏”的再検討」 東京考古 7
- 三友國五郎 1965年 「荒川低地の開発に関する先史地理的研究」 埼玉大学紀要社会科学篇13
- 山口康行他 1991年 「B-66号遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第32集
- 山口康行他 1991年 「C-1号遺跡」 大宮市遺跡調査会報告第29集
- 山口康行他 1992年 「C-1号遺跡 第3次調査」 大宮市遺跡調査会報告第31集
- 山口康行他 1993年 「C-1号遺跡 第4次調査」 大宮市遺跡調査会報告第32集

# 付編 1 根切遺跡第1地点出土の馬歯・馬骨

## はじめに

根切遺跡第1地点は埼玉県大宮市大字植田谷本にあり、馬歯・馬骨を多量に出土した。ここに報告するのは、その調査結果である。

本遺跡では馬歯・馬骨の出土地点が北西—南東方向に3か所並んでおり、ここでは北西から順にA地点、B地点、C地点と呼ぶことにする（第237図）。A地点—B地点間は約18m、B地点—C地点間は約48m離れている。

馬歯・馬骨のほとんどはC地点から出土し、B地点では右上顎臼歯と3本余の左下顎臼歯が、A地点では下顎臼歯（右か）が出土しているだけである。

### 1 個体数（第237～241図）

C地点には、3個体分の下顎骨と、これと別個体の下顎臼歯が2本検出されており、さらにこれらの下顎骨（臼歯）と対応しない上顎臼歯があることから、少なくとも5個体分は埋存していたことは確実である。また、C地点とB地点とは48mと離れ過ぎていて、両地点に埋存していた馬歯・馬骨が同一個体に由来する可能性は極めて少なく、A地点・B地点間の距離も18mと遠く、両者の馬歯が同一個体である可能性は薄い。なお、B地点内の歯は同一個体と見て良さそうである。以上の状況から、本遺跡出土の馬歯・馬骨は少なくとも7個体に由来していると推測される。

本稿では便宜上、C地点のNo.10—1の下顎歯を第1個体、No.10—2の下顎歯を第2個体、No.45の上顎・下顎歯を第3個体、No.21とNo.40の下顎臼歯を第4個体、No.20の上顎臼歯を第5個体、A地点のNo.1の下顎臼歯を第6個体、B地点の上顎・下顎臼歯を第7個体として記述を進める。

### 2 各個体の残存部位とその状況

第1個体：左右の下顎臼歯12本と左下顎第3切歯を除くすべての切歯が残存している。C地点の上顎臼歯でこれと同一個体と見なされるものをあげれば、No.37の左上顎第3前臼歯である。

第2個体：左右の第2・第3後臼歯以外の左右の下顎臼歯全部と、右下顎の第2・第3切歯以下の下顎切歯全部が保存されている。これと対をなす上顎臼歯は存在しない。

第3個体：右上顎臼歯6本と左右の下顎臼歯計11本、上顎・下顎の切歯9本以上、中足骨片近位端、右距骨などが残存するが、左上顎臼歯を全く欠くのはなぜか不明である。

第4個体：No.21の左下顎第3前臼歯、No.40の右下顎第3全臼歯は水平距離で4mほど離れているが、土器片で6mの距離があっても接合できる例があることや、両者を同一個体としても計測値その他に矛盾がないことから、同じ個体のものと判断した。ただし、第4個体に属すると思われる下顎歯はこの2本以外検出されていない。上顎臼歯のNo.23の右上顎4本の歯や、No.22、No.24、No.25の上顎臼歯も、咬耗度などの点で第4個体のものと思われる。

第5個体：No.20の標本で右上顎臼歯が4本、左上顎臼歯が4本、この他破片が保存されている。以上の他に、C地点からは肩甲骨2、中手骨2、前肢基節骨1、前肢中節骨1、脛骨2、距骨2

が出土している。

第6個体：No.1の下顎臼歯であるが、詳細な歯種決定はできない。

第7個体：No.2標本は右上顎臼歯1本で、No.3標本は3本の歯に由来すると思われる下顎の臼歯である。

### 3 年 齢

第1個体：切歯が5本残存しているが、保存状況が不良で年齢推定に最も有効とされる咬合面の様子は詳細には観察されない。そこで臼歯の歯冠高から、Levin (1982)を参考にして推定してみると10～11才である。

第2個体：同様に切歯が4本残存しているが、保存状況が不良で咬合面の詳細な様子が観察されない。歯冠高から推定した年齢は20才前後である。

第3個体：切歯が遊離標本として検出され、この咬耗程度から Goubax et al. (1892)を参考にして求めた推定年齢は7才程度である。一方、臼歯の歯冠高からLevin (1982)に従って求めた推定年齢は8～9才である。このことから、第3個体の年齢は8才程度と考えられる。

第4個体、第5個体：臼歯の咬耗度からの推定年齢は前者が6～7才、後者が8～9才である。

第6個体、第7個体：壮令馬であること以外の詳細な年齢は推定できない。

### 4 性 別

第1個体：ほぼ全部の臼歯・切歯が検出されているが、犬歯は検出されていない。雌の犬歯は萌出しても小さくて、マッチ棒程度の大きさしかないが、雄の犬歯は切歯と同じくらいの大きさがある。雄であれば切歯のみが残存して、犬歯が腐食してしまうということは一般的には有り得ない。従って、本個体は雌と見られる。

第2個体：左下顎に保存不良ながら雄馬相当の大きさの犬歯が存在していることで雄と分かる。

第3個体：ほぼ全部の臼歯・切歯が比較的良好に保存されているが、犬歯は存在せず、雌の可能性を強く示している。

第4個体、第5個体、第6個体、第7個体：いずれも性別を知る手掛かりを欠いていて、不明である。

### 5 体高・その他の形態

第1個体：下顎全臼歯列長は咬合面で164.8mmである。この値は大塚他(1985)の示す野間馬の165.3mm・トカラ馬の雄3頭の平均163.0mm、木曽馬の雌6頭の平均179.9mmに比べると、野間馬とトカラ馬の中間にあ。野間馬・トカラ馬は日本の在来馬のなかでは体高105～122cmの小型馬に分類され、木曽馬は体高129～138cmの中型馬に分類されている(林田 1978)。このことから、本個体は小型馬相当で、110cm台の体高が推定される。

第2個体：この個体は20才前後の老齢馬であり、咬耗が極度に進んでいて、歯冠径が若令時に比べて小さくなっている。このことを念頭に置いても、本個体は各々の歯の大きさから、第1個体に

近い大きさの印象を受ける。

第3個体：上顎全臼歯列長は咬合面で166.0mmである。この値は大塚他(1985)の示すトカラ馬の雄3頭の平均157.5mmよりは大きく、木曽馬の雌6頭の平均173.2mmよりは小さい。すなわち、本個体は小型馬と中型馬の中間にあり、推定される体高は120cm代である。

第4個体、第5個体：両者とも破損あるいは欠損している臼歯が多く、全臼歯列長を得られず、現生在来馬との比較はできないが、この歯の大きさからして、第3個体と同じくらいか、それに近い馬格である印象を受ける。

第6個体、第7個体：歯の不足部分が多く、体高推定の手掛かりを欠く。

この他に、C地点からは数点の四肢骨の出土があり、いくぶん風化による骨表面の溶解があるものの、体高推定には有効なものもある。このうち、No.9の中手骨とNo.7の前肢基節骨、No.8の前肢中節骨は同一個体の一連のものと思われ、これらの骨から得られる推定体高は、それぞれ132.8cm、130.1cm、132.1cmで、平均131.7cmである。この体高は全臼歯列長から推定されたどの個体のものより大きく、上記第1個体から第7個体のいずれとも異なる個体である可能性がある。

No.48、No.49の肩甲骨は出土状況から第3個体のものと思われ、この計測値から推定される体高も木曽馬より多少小さめで、第3個体としても矛盾はない。また、No.15の脛骨は部分的な計測値でみると、岡部の示す木曽馬より多少大きめである(岡部 1953)。

## 6 その他の特徴

第1個体は異常咬耗があり、右第4前臼歯が一般的咬合面より50°ほど傾斜して上昇し、そのピークは遠心側四分の一のところにあり、際立って尖っている。それより遠心側では咬耗面は、下に湾曲しながら右第1後臼歯に連続し、第1後臼歯も近心側四分の一が高く尖った状態で湾曲しながら遠心側へ下降している。このような異常咬耗をしている個体は江戸時代の農馬や駄馬の老齢馬には良く見掛けること(宮崎 1989)で、粗末な食料あるいは特殊な食癖が原因していることが多いようである。

第2個体は、各個体とも咬耗が進み、歯冠高はきわめて低く、エナメルは各臼歯の咬合面の周囲にのみ残存し、象牙質が全面的に露出している。しかし、咬合面が波打つとかの異常咬耗は見られない。

## 7 考 察

本遺跡から出土する七個体の馬のうち、六個体までは6~11才程のまだ働き盛りの個体で、少なくとも天寿を全うした年齢とは言い難い。病死・事故死・人為的に死に至らしめられたのかのいずれかであろうが、現状で見るかぎり、殺傷痕・解体痕・加工痕などは見い出せない。第2個体のみは20才前後と自然死でもおかしくない年齢である。このような老齢馬は、江戸時代の農馬・駄馬に多く(宮崎 1989)、新しい馬を購入する経済的余裕がなかったことや、いったん飼育した馬には情が移り、最期を見届けるまで面倒をみたなどの事情が考えられ、本個体もこのような事情の下で飼養されていたのかもしれない。

また、本遺跡の馬の体高は最高でも現代の中型在来馬の小型タイプほどの大きさで、小型馬相当のものも2頭は含まれている。このように概して小さめで、おそらく乗用としてよりは駄馬あるいは農馬として飼育されていたように思われる。

馬の出土状況は、特にC地点を見るとそこに集中していて、埋葬地的性格を示しているように判断されるが、出水時には当地点にも水流があったことは認められ、場合によっては吹き溜まり的にそこへ集まつたことも有り得よう。

(文責：宮崎 重雄)

### 引用文献

- 大塚潤一・広田桂一・松元光春・橋口 勉 1985 「野間馬の形態」『野間馬に関する学術調査報告書』 P10-15 社団法人日本馬事協会
- 岡部利雄 1953 「木曾馬について」『日本在来馬に関する研究』 P75-162 日本学術振興会
- Goubax, A. and Barrier, G. 1926 The Exterior of the Horse. Lippincott, Philadelphia.
- 橋口 勉 1985 「野間馬の概要」『野間馬に関する学術調査報告書』 P2-9 社団法人日本馬事協会
- 林田重幸 1978 『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会
- 宮崎重雄 1989 「上栗須遺跡の馬骨」『上栗須遺跡』 P655-673 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- Levine, M. A. 1982 The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. In Wilson, B., C., & Payne, S., (eds), Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites. BAR British Series 109, P223-250

第1個体 (No.10-1) 馬歯計測値 下顎臼歯 単位:mm

歯種		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯冠長	咬合面	32.4	27.1	26.1	24.1	23.2	30.0
歯冠幅	咬合面	16.8	12.7	13.0	13.9	13.1	12.1
歯冠高	頬側		36.5			39.6	
	舌側	20.1	35.0	53.5	38.3	39.0	
下後錐谷長			9.8				
下内錐谷長			14.2			8.0	9.7
double knot長	咬合面	17.2			13.1	12.6	12.8
咬合面の傾斜		100°			80°	65°	
下顎全臼歯列長: 164.8mm							

第2個体 (No.10-2) 馬歯計測値 下顎臼歯 単位:mm

歯種		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯冠長	咬合面	27.4	26.0	22.3	25.2		
歯冠幅	咬合面	17.9	17.9	14.8	15.1		
歯冠高	頬側			13.0			